福　岡　市

有田・小田部

第 1 集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第58集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

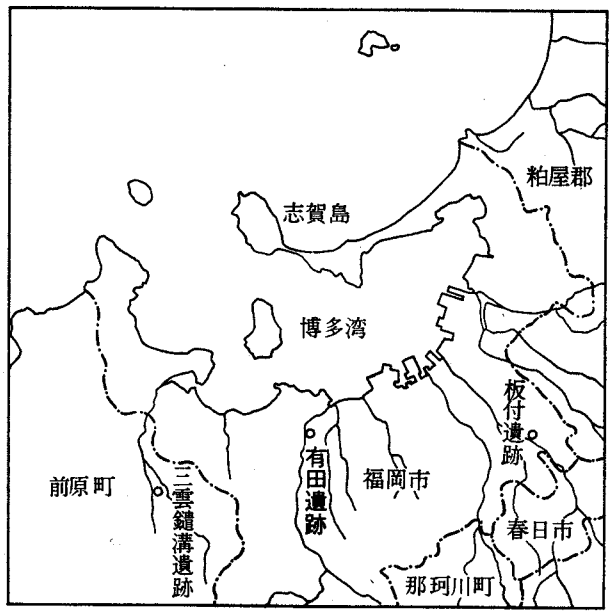
1 9 8 0

福 岡 市 教 育 委 員 会

有田・小田部

＜福岡市西区有田，小田部における遺跡群の発掘調査報告＞

第 1 集



昭和 55 年 3 月

福 岡 市 教 育 委 員 会

序　　文

福岡市の西部に位置する早良平野の中の有田・小田部の丘陵部には先史時代から古代・中世におよぶ各種の埋蔵文化財が包蔵されている地区として知られていますが，昭和42年の区画整理事業以来，年々宅地化の傾向が強まっています。

福岡市教育委員会では，宅地化などで消滅する遺跡についてはやむを得ず記録保存の発掘調査を実施しております。有田・小田部地区の調査は昭和50年以来５年目を迎え，昭和54年度も国庫補助事業として十数ヵ所の発掘調査を行いました。これまで遺跡見学会や資料・調査概報などを通じて遺跡の周知化に努めてきましたが，今年度ようやく調査報告書の第１集を刊行することになりました。

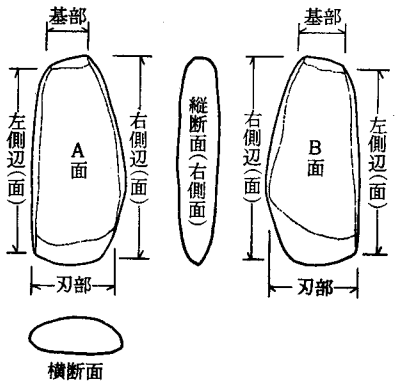
調査に対して，ご協力いただいた地元の方々をはじめ，困難な整理作業にご尽力いただいた方々など関係各位のご援助とご配慮により，報告書を刊行するはこびとなったことに対し，心から感謝の意を表するものであります。

昭和 55 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会
教育長　西　津　茂　美

例　　言

1. 本報告書は，福岡市西区有田・小田部地域内における住宅開発等に伴い，福岡市教育委員会が国庫補助を得て，昭和54年度事業として実施した緊急発掘調査報告書である。
2. 有田・小田部地区における緊急調査は，古くは，昭和40年～42年の九州大学考古学研究室における第１・２次調査に始まるが，本報告書は，福岡市教育委員会による昭和51年度以後の埋蔵文化財発掘調査報告を収録するものである。
3. 今回の第１集には，昭和54年度事業の第19次～第27次調査迄と，昭和53年度の第17次調査を収録した。
4. 本書では，有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し，広義の「有田遺跡」と呼称する。
5. 昭和51年度以来，発掘調査は数十件に及ぶが，各々遺跡の呼称が相違し，混乱を招くので「遺跡の調査経過」の項で，調査区と呼称を整理，統一した。
6. 本書掲載の Fig. 4 「有田地区調査地域図」は第１・２次調査報告の「遺構概要図」及び「福岡市文化財分布地図―西部Ⅰ」をもとに作製した。
7. 本書に収録した発掘調査は，第17次調査については井沢洋一が，第19次～27次調査については井沢，山崎龍雄が担当した。
8. 本書掲載の遺構，及び遺物写真の撮影は井沢，山崎が行った。
9. 本書掲載の遺構の整図及び遺物の実測整図は主に井沢が行った。山崎，児玉健一郎（西南大学），常松幹雄（早稲田大学），吉田富美子（福岡大学）の協力を得た。
10. 発掘調査においては，早稲田大学考古学研究会，西南大学歴史探究会，同じく郷土史研究会，福岡大学歴史研究部の協力を得た。
11. 本書の編集は山崎の協力を得て井沢が担当した。
12. 本書文中で使用する石器の部分名称は右のように図示する。



本 文 目 次

本文頁
第Ⅰ章　はじめに……1
1.　調査に至る経過……1
2.　発掘調査の組織……2
第Ⅱ章　遺跡の立地と概要……4
第Ⅲ章　調査経過……5
1.　第17次調査……7
調査の概要……7
検出遺構……7
出土遺物……9
小　　結……9
2.　第21次調査……10
調査の概要……10
検出遺構……10
出土遺物……13
小　　結……15
3.　第22次調査……16
調査の概要……16
検出遺構……16
出土遺物……19
小　　結……26
4.　第23次調査……27
調査の概要……27
検出遺構……27
出土遺物……31
小　　結……47
5.　第24次調査……49
調査の概要……49
検出遺構……49
出土遺物……52

小　　結……63
6.　第25次調査……66
調査の概要……66
検出遺構……66
出土遺物……69
小　　結……69
7.　第26次調査……71
調査の概要……71
検出遺構……73
出土遺物……75
小　　結……76
8.　第27次調査……77
調査の概要……77
検出遺構……78
出土遺物……79
小　　結……81

挿　図　目　次

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡……(1/25000)……3
Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点 (1/5000) ……折り込み
Fig. 3　有田・小田部台地の旧地形図……(1/5000) ……折り込み
Fig. 4　有田地区調査地域図……(1/2500) ……折り込み
Fig. 5　調査地点現況図……(1/500) ……7
Fig. 6　遺構配置図……(1/120) ……8
Fig. 7　溝断面図……(1/40) ……9
Fig. 8　土壙出土土錘……(1/2)……9
Fig. 9　調査地点位置図……(1/2500) ……10
Fig. 10　遺構配置図……(1/100) ……11
Fig. 11　住居跡1実測図……(1/40) ……12
Fig 12　住居跡1出土遺物……(1/2) ……13
Fig. 13　出土遺物……(1/3) ……13
Fig. 14　掘立柱建物……(1/40) ……14

Fig. 15　調査地点現況図……(1/500)……16
Fig. 16　西壁土層図……(1/100)……17
Fig. 17　遺構配置図……(1/100)……18
Fig. 18　掘立柱建物　SB 01, 02……(1/40)……20
Fig. 19　掘立柱建物　〃 04, 05……(1/40)……21
Fig. 20　掘立柱建物　〃 10, 11, 12……(1/40)……22
Fig. 21　掘立柱建物　〃 06……(1/40)……23
Fig. 22　掘立柱建物　〃 08……(1/40)……24
Fig. 23　掘立柱建物　〃 09……(1/40)……25
Fig. 24　土錘……(1/1)……26
Fig. 25　出土遺物……(1/3)……26
Fig. 26　調査地点現況図……(1/500)……27
Fig. 27　南壁土層図……(1/100)……27
Fig. 28　遺構配置図……(1/150)……28
Fig. 29　住居跡実測図……(1/40)……29
Fig. 30　掘立柱建物 SB 04……(1/40)……30
Fig. 31　掘立柱建物 SB 01……(1/40)……31
Fig 32　溝1実測図……(1/30)……折り込み
Fig. 33　溝1，2，3実測図……(1/60)……折り込み
Fig. 34　溝1出土遺物……(1/3)……34
Fig. 35　溝1出土遺物……(1/3)……36
Fig. 36　溝1出土瓦質土器……(1/3)……37
Fig. 37　滑石製品（石鍋）……(1/3)……39
Fig. 38　滑石製品（石鍋他）……(1/3)……41
Fig. 39　溝1出土石器……(1/3)……42
Fig. 40　溝1出土石器……(1/3)……43
Fig. 41　溝1出土瓦……(1/3)……44
Fig. 42　溝2出土遺物……(1/3)……46
Fig. 43　包含層及び pit 出土遺物……(1/3)……46
Fig. 44　調査地点現況図……(1/500)……49
Fig. 45　濠状遺構，及び井戸土層図……(1/40)……50
Fig. 46　遺構配置図……(1/80)……51
Fig. 47　井戸1実測図……(1/40)……53

Fig. 48　井戸2，3実測図……(1/40)……折り込み
Fig. 49　出土遺物……(1/3)……55
Fig. 50　出土遺物……(1/3)……56
Fig. 51　出土遺物……(1/3)……57
Fig. 52　石器……(1/3)……59
Fig. 53　板碑……(1/3)……60
Fig. 54　瓦類……(1/3)……61
Fig. 55　小田部地区調査地域図……(1/2500)……65
Fig. 56　調査地点現況図……(1/500)……66
Fig. 57　遺構配置図……(1/100)……67
Fig. 58　掘立建築物 SB 01, 02……(1/40)……68
Fig. 59　掘立建築物 SB 03, 04……(1/40)……69
Fig. 60　出土遺物……(1/2)……70
Fig. 61　調査地点現況図……(1/500)……71
Fig. 62　西壁土層図……(1/100)……71
Fig. 63　遺構配置図……(1/100)……72
Fig. 64　土壙墓実測図……(1/40)……73
Fig. 65　土壙墓出土遺物……(1/3)……73
Fig. 66　掘立柱建物 SB 01, 02……(1/40)……74
Fig. 67　出土遺物……(1/3)……75
Fig. 68　調査地点現況図……(1/500)……77
Fig. 69　土層図……(1/100)……77
Fig. 70　遺構配置図……(1/100)……78
Fig. 71　住居跡状遺構実測図……(1/40)……折り込み
Fig. 72　出土遺物……(1/3)……80

図　版　目　次

図版扉　作業風景　(第23次調査)
PL. 1　有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）
PL. 2　有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）
PL. 3　1.　第17次調査　遺跡近景　北より　　2.　遺跡全景　西より
PL. 4　1.　中世溝　西より　　2.　土壙出土遺物

PL.5　1.　第21次調査　調査前　西より　　2.　遺跡全景　西より
PL.6　1.　住居跡1　西より　　2.　住居跡2　西より
PL.7　1.　掘立柱建物　西より　　2.　遺跡完掘状況　西より
PL.8　1.　第22次調査　遺跡全景　南より　　2.　土層の状態　西壁
PL.9　1.　遺跡南半　南より　　2.　遺跡北半　南より
PL.10　1.　掘立柱建物　西より　　2.　出土遺物
PL.11　1.　第23次調査　発掘調査前　南東方向より　2.　遺跡南半　東より
PL.12　1.　溝1・2・3　北より　　2.　溝1・2・3　南より
PL.13　1.　溝1　北より　　2.　溝2　北より
PL.14　1.　溝1　先端部分　東より　　2.　溝1　先端部分礫取り上げ後　西より
PL.15　1.　溝1　土層　北より　　2.　溝2　土層　北より
　　3.　溝3　土層　南より
PL.16　1.　溝1　遺物出土状態　東より　　2.　住居跡　南より
PL.17　出土遺物（1/3）
PL.18　出土遺物
PL.19　出土遺物（1/3）
PL.20　出土遺物　滑石製品（1/3）
PL.21　出土遺物　石器（1/3）
PL.22　出土遺物（1/3）
PL.23　1.　第24次調査　発掘調査前　北より　　2.　濠状遺構と礫群　西より
PL.24　1.　礫群と井戸1　西より　　2.　井戸1　西より
PL.25　1.　井戸2・3と礫群　南より　　2.　井戸2・3　西より
PL.26　1.　井戸2・3（土壙1）土層　南より　　2.　濠状遺構　土層　西より
　　3.　土台　土層　西より
PL.27　1.　濠状遺構完掘状態　西より　　2.　井戸1・2・3　完掘状態　南より
PL.28　出土遺物
PL.29　出土遺物
PL.30　出土遺物（1/3）
PL.31　出土遺物（1/3）
PL.32　出土遺物
PL.33　1.　第25次調査　発掘調査前　南より　　2.　遺跡全景　南より
PL.34　1.　遺跡西半　東より　　2.　遺跡南半　東より
PL.35　1.　第26次調査　発掘調査前　南より　　2.　遺跡南半　南より

PL.36　1.　遺跡全景　北より　　2.　掘立柱建物 SB 01　北より
PL.37　1.　土壙墓　西より　　2.　出土遺物
PL.38　1.　第27次調査　発掘調査前　南より　　2.　遺跡全景　北より
PL.39　1.　住居跡状遺構　東より　　2.　遺物出土状態（砥石）
PL.40　1.　第27次調査　出土遺物　　2.　第25次調査　出土遺物

表　目　次

本文頁
表1.　有田・小田部発掘調査一覧表……6
〃2.　掘立柱建物柱間計測表……15
〃3.　掘立柱建物計測表……19
〃4.　柱穴計測表……79

第Ⅰ章　はじめに

1.　調査に至る経過

福岡市西区有田・小田部所在の有田遺跡は，昭和41年から昭和43年にかけて行われた九州大学考古学研究室による予備調査，第1・2次発掘調査の結果，縄文時代から中世に至る複合遺跡であることが判明した。その後，福岡市教育委員会によって，昭和51年度より発掘調査が進められ，遺跡が有田・小田部の台地に広く密に分布し，さらに一連の遺構であることが把握されている。福岡市街周辺部は，福岡市が都市として肥大化すると共に，主に宅地開発，住宅建設が進められており，有田・小田部地区も例外ではない。特にここ数年，金融公庫融資による住宅建設は著しく増加しており，これに伴って昭和52年1月以来，小規模開発に伴う緊急発掘調査件数は急速に伸びている。今回，有田・小田部地区において，住宅建設等の建築確認が申請されたことにより，福岡市教育委員会が昭和54年度国庫補助事業として，第18次～第32次調査迄の15ヵ所の発掘調査を実施した。

今年度の調査地点は以下の通りであるが，報告書については，第18～20次調査，および第28次～第32次調査迄を除いて報告する。

昭和54年度発掘調査地

1	第18次	福岡市西区有田1丁目32-15	面積248m²	（申請者）	犬塚　廣行
2	第19次	福岡市西区有田1丁目24-4	面積250m²		江藤　一巳
3	第20次	福岡市西区有田2丁目14-20	面積250m²		昭和土地（株）
4	第21次	福岡市西区有田1丁目13-16	面積442m²		崎村　正雄
5	第22次	福岡市西区小田部5丁目25	面積385m²		木戸　良光
6	第23次	福岡市西区有田1丁目27-2	面積485m²		坂口　武雄
7	第24次	福岡市西区有田2丁目10-7	面積143m²		宮崎　勝行
8	第25次	福岡市西区小田部5丁目237-1	面積298m²		木原　孜
9	第26次	福岡市西区小田部5丁目219	面積245m²		西嶋　良治
10	第27次	福岡市西区小田部5丁目241	面積244m²		近藤　勉
11	第28次	福岡市西区有田1丁目20-2	面積179m²		本山　信義
12	第29次	福岡市西区有田1丁目33-2	面積280m²		真子　渺
13	第30次	福岡市西区小田部3丁目288	面積586m²		毛利　保人
14	第31次	福岡市西区有田1丁目34-2	面積580m²		坂口　好春
15	第32次	福岡市西区有田1丁目29-9	面積237m²		青柳喜代太

2. 発掘調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会

調査担当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係

事務担当　志鶴幸弘（部長），井上剛紀（課長），柳田純孝（係長），古藤国生

発掘担当　第17次調査　井沢洋一

第19次～第27次調査　井沢洋一　山崎龍雄

調査協力者

松尾和雄　持田久　岩城庄助　高浜謙一　野上英治　松尾修　中富一夫　西原俊一　阿部典広　池野尚昭　池田健一　浦田健二　不老敏悦　松尾享　松井フユ子　小林ツチエ　小林アキエ　山本キクノ　坂口フミ子　野上喜美子　坂田セイ子　佐藤テル子　清原ユリ子　和玉八重子　金子由理子　仁田原絹代　渡辺武子　松尾圭子　内尾トミ子　野村美砂恵　佐々木光子　松尾幸子　（発掘調査作業員）

常松幹雄　井上裕一　白井千彰　（早稲田大学考古学研究会）

中河原裕之　石橋千恵　（福岡大学歴史研究部）

池田孝弘　児玉健一郎　山口勝巳　（西南学院大学歴史探究会）

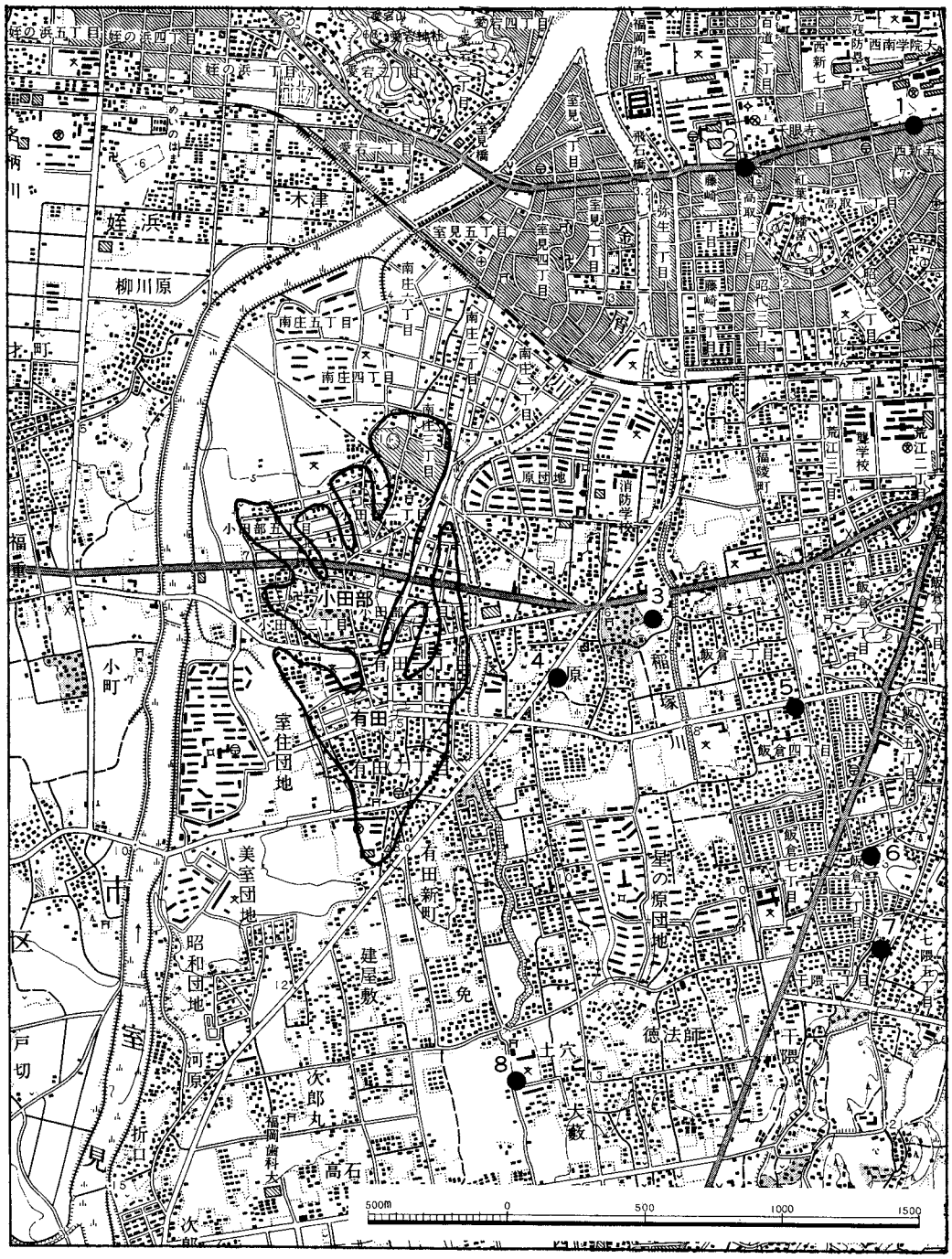
入江誠剛　中条正憲　谷口雅信　安岡洋二　尾倉渉　池松千富　花田由美　松口真利子　（西南学院大学郷土史研究会）

飛高憲雄　塩屋勝利　折尾学　山崎純男　力武卓治　沢皇臣　横山邦継　山口譲治　柳沢一男　二宮忠司　池崎譲二　浜石哲也　松村道博　田中寿夫　（福岡市文化課）

資料整理

宮本純子　森このみ（明治大学）　児玉健一郎　吉田富美子　石橋千恵　栗原由美子　花田早苗　湯浅美子　山中香欧里　堀内郁子　朝長幸子　藤田さゆり　原秋代

以上の他，発掘調査，資料整理期間中，土地所有者の方々や各方面，各分野の方々から，多くの援助をいただいた。また寺田勝幸氏からは，心よく事務所の敷地を提供していただき，中村勝氏からは調査関係資料の御助言を賜わった。これらの方々に深くお礼を申し上げます。また，調査期間中多くの見学者があり，特に，周辺の原北小学校，西福岡中学校，西福岡高校の課外授業として利用いただいた。今後共に，地元の方々，各方面の方々の御理解と御協力を得て，有田遺跡の発掘調査を継続していきたいと考えます。



1. 西新町遺跡　2. 藤崎遺跡　3. 原小園遺跡　4. 原談儀遺跡　5. 飯倉遺跡
6. 飯倉原遺跡　7. 干隈遺跡　8. 鶴町遺跡

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡（縮尺1/25,000）

第Ⅱ章　遺跡の立地と概要

立　地　福岡市西区有田・小田部の位置する台地は室見川の開析によって形成された早良平野のほぼ真中に位置し，長軸を南北方向に向けた標高15m前後を示す独立中位段丘である。台地の形成は，洪積世に位置づけられ，鳥栖，新期ロームの層位をなしている。旧地形は，有田1～2丁目を最高所にして標高約16mを測り，周辺の水田面との比高差は10m前後を測る。現在の比高差は5m～7mで，沖積化の著しさを示している。この丘陵は南北の長さ約1km，最大幅0.7kmを測り，北へ緩やかに傾斜している。台地の東側には金屑川が，台地の西には室見川が流下しているところから，台地の縁辺は浸蝕を受け，小断崖を形成している。また，台地内に深く切り込んだ比較的浅く，緩やかな谷も幾つか存在し，これらの谷が，北方向から切り込むことによって，台地は八ツ手状に分岐する。有田・小田部両地区共に昭和40年代の初めに区画整理事業によって，著しい現状変更が行われている。

概　要　遺跡は有田・小田部の台地上に広く，密に分布する旧石器時代から近世迄の複合遺跡である。第6次調査に於いて台地最高所の新期ロームより，ナイフ型石器や尖頭器が検出されたことから台地の歴史は，旧石器時代の新しい時期に始まる。縄文時代には，有田地区の西側に偏して中頃～後半に集落が営まれたようで，多くの貯蔵穴が発見されている。弥生時代前期には，夜臼式土器を伴うV字溝が第2次調査で検出されており，弥生時代の集落が，台地の中央寄りに移動していくことが伺える。有田地区では前期の溝と甕棺墓が検出されており，甕棺に伴い細形銅戈が検出されている。[註1] また，小田部地区から細形銅矛の出土も伝えられる。[註2] 中期も前代を踏襲し，有田地区で中期後半の円形住居跡群[註3]を検出しているが，台地内に数ヵ所の甕棺墓が存在し大形銅戈の出土も伝えられるところから，中期には集落の拡大が考えられる。後期末から古墳時代初頭の住居跡は台地上に点在し，6～7世紀代の住居跡に至ってはさらに前代より拡がりをもつ。この時期に小田部地区には古墳群[註2]が営まれ，弥生時代から潜在的に続いた勢力の集中がみられる。古代には，この両地区が律令時代の早良郡―田部郷[註4]に相当する位置にあるが，このことは古墳時代以降の掘立柱建物が有田・小田部台地の全域に拡がることからも言える。大型の柱穴をもった建物は，台地の最高所に存在し，田部郷の中心と考えて良いだろう。中世の時期には，小田辺城，或いは堀ノ内城（館跡）が有田地区に構築され，周囲に土塁，空堀のあったことが伺える。[註5] 以上，台地の歴史を概括したが，細かい年代，機能については，今後の調査の増加を待たねばならない。

註1　西福岡高校校庭内遺跡　福岡市教育委員会「有田遺跡」1968
註2　福岡市教育委員会「有田遺跡」1968
註3　福岡市教育委員会「有田周辺遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集　1977
註4　福岡県早良郡役所「早良郡志」　1973　復刻版
註5　青柳種信「筑前国続風土記拾遺」　筑前国続風土記拾遺刊行会　1973

第Ⅲ章　調　査　経　過

沿　革　有田遺跡の発見の端緒となったものは，昭和40年の秋に，有田地区の土地区画整理組合による宅地造成工事によってであった。

昭和41年には，福岡市教育委員会の依頼によって，九州大学考古学研究室が予備調査を行い，つづいて昭和42年には第1次調査を，昭和43年には第2次調査を行っている。

この調査では，計15ヵ所，総面積1,400m² にわたって発掘を行い，弥生時代V字状溝1本，後期U字溝1本，古墳時代前期の竪穴住居跡6棟，同じく前期溝2本，奈良時代炉跡3ケ所，同じく掘立柱穴1，同じく竪穴住居跡1棟，平安時代溝1本，中世の溝が1本などの弥生時代から中世に至る遺構を数多く検出し，以後の発掘調査の指標を与えている。しかしながら調査方法の大部分が試掘溝によったため，遺構の規模，遺構相互の関連は明らかにし得なかった。その後202号バイパス工事によって，夥しい遺物の出土を見たが，調査は行われず，有田遺跡が本格的な発掘調査対象の指定地となり，綿密な調査の継続化が計られるようになったのは昭和51年度の第3次調査に始まる。発掘調査は1,000m² 以上の開発を対象とした。しかし，有田・小田部地区の地理的環境からみて開発化の進行は早く，特に，大型の開発よりも専用住宅等の小規模開発が多いため，それらの開発は，1,000m² 以上の開発を発掘調査対象とした網の目を抜ける結果を生んだ。昭和53年1月には，綿密な調査の徹底化を計るため，調査対象地域を有田・小田部地区の台地上に限定し，この地域に限っては，細大もらさず全ての開発を調査対象とすることになった。

昭和54年度には現地に調査事務所を設置し，有田・小田部地区内遺跡調査の拠点として，また有田遺跡群の総合的な調査体制の端緒を築き今日に至っている。

調査方法　有田・小田部地区内の調査は，出発点の遅劣さから，既に住宅化が60～70%進行しており，空地，畑地のスペースは年々減少しつつある。今日の発掘調査の対象は，専用住宅の新築，改築等の100～300m²程度の開発面積であり，自ら調査上，作業上に多くの問題を含んでいる。調査整理上の問題として，調査次数と調査地点名がある。第1・2次調査は「街区」を地点名としているが，その後の調査では表1のように，地点名と調査次数の使用が混乱している。これは，調査体制の継続化が計られなかった結果，生じたものであり，調査整理作業を極めて困難にしている。今日，官報および他の出版物で使用されている呼称もあって，大幅な変更は不可能であるけれども，調査年次と地点名を整理，統一したいと思う。

調査地点名については，遺跡上に方眼を設定する方法もあるが，有田・小田部地区のように，住宅化による細分筆化した地域では，細かく，より複雑な地点名を与えかねない。そこで当地域に限っては，Fig. 1 に示したように，生活道路と台地，谷といった地形上の変換点を組み合わせて，地域を大きなブロック（A～Mの13地区）に分ける。さらにブロックを小区（a～

z）に分け，発掘調査毎に順次，調査次数と地点名を与えたい。尚，既に発掘調査終了分については第１・２次調査を調査方法から試掘調査とみなして，一括して扱い，以後は年度に関係なく調査地点毎に，順次に調査次数と地点名を付与し遺跡名としたい。調査地点名については，以下の対象表に調査年次と地点名を整理しているので参考にされたい。

遺構は，現在，各発掘調査地点毎に名称を与えており，統一呼称は与えられていない。小規模調査のため，特に溝遺構などは同一遺構の判定に困難を伴うが，他の遺構については，各発掘調査の報告書の整理を待って，順次に番号を付与していきたいと考えている。

調査次数	地点名	旧地点名	調査地域(地番)	調査面積	調査期間	備考
第1次		13. 14. 18. 24. 25. 27. 29. 31. 街区	8ヶ所	500 m²	42年2月20日～3月11日	弥生時代前期Ⅴ字溝1. 古墳時代前期住居跡2. 後期住居跡1. 奈良時代住居跡1.
〃 2 〃		13. 16. 17. 18. 27. 29. 31. 街区	7ヶ所	900 m²	43年2月20日～3月11日	弥生時代前期Ⅴ字溝1. 後期Ⅴ字溝1. 古墳時代前期住居跡4. 古墳時代前期溝2. 奈良時代炉跡3. 掘立柱建物1. 平安時代溝1. 中世溝1.
〃 3a〃	C-d-1	小田部地区	西区小田部1丁目427, 439-1 499-2	1,082 m²	50年12月8日～2月10日	
〃 b〃	I-a-1	有田地区	〃 有 田1丁目23-1	1,836 m²	51年2月16日～6月16日	弥生時代前期貯蔵穴2. 中期住居跡4. 井戸2. 後期住居跡1. 古墳時代住居跡8. 掘立柱建物1. 平安時代溝1.
〃 4 〃	G-a-1	小田部地区	〃 小田部2丁目139	1,691 m²	52年6月9日～8月19日	奈良時代以降の掘立柱建物40棟 製鉄炉跡
〃 5 〃	J-c-1	高畠遺跡	〃 〃 704	900 m²	〃 6月20日～11月23日	縄文時代中期～後期貯蔵穴群
〃 6 〃	I-u-1	31 街区	〃 有 田1丁目20-3	1,289 m²	〃 8月18日～10月20日	前期Ⅴ字溝2. 古墳時代住居跡2. 陶質土器出土 中世溝2. 奈良時代柵列跡
〃 7 〃	I-v-1	5次—1	〃 〃 〃 8-10	573 m²	53年3月8日～4月20日	弥生時代前期溝1. 中世掘立柱建物1. 溝2. 墓跡1.
〃 8 〃	I-d-1	〃—2	〃 〃 〃 13-12	191 m²	〃 3月17日～5月15日	掘立柱建物1. 古墳時代住居跡3.
〃 9 〃	D-i-1	53—9	〃 小田部1丁目174-2	211 m²	〃 5月29日～6月9日 6月15日～6月30日	古墳時代住居跡2. 土坑1.
〃 10 〃	F-g-1	〃—10	〃 〃 2丁目57	436 m²	〃 5月30日～6月14日	白磁
〃 11 〃	H-d-1	〃—11	〃 〃 168-3-4	186 m²	〃 5月27日～6月2日	磨製石鏃1.
〃 12 〃	J-g-1	〃—12	〃 有 田1丁目37-11	360 m²	〃 6月6日～6月29日	第1,2次調査13街区,同位置 古墳時代前期住居跡2. 奈良時代炉跡3. 掘立柱建物2.
〃 13 〃	F-d-1	〃—13	〃 小田部2丁目73-2	152 m²	〃 7月17日～7月21日	
〃 14 〃	H-j-1	〃—14	〃 〃 3丁目281-2	539 m²	〃 8月2日～8月21日	近世井戸跡3.
〃 15 〃	E-p-1	〃—15	〃 〃 5丁目54-1	275 m²	〃 8月29日～10月2日	古墳時代住居跡5. 掘立柱建物
〃 16 〃	I-n-1	〃—16	〃 〃 3丁目312	107 m²		弥生時代末～古墳時代初頭住居跡1. 弥生時代前期貯蔵穴
〃 17 〃	J-p-1		〃 有 田1丁目20-9	136 m²	54年3月9日～3月20日	中世溝1.
〃 18 〃	J-n-1		〃 〃 〃 32-1	248 m²	〃 4月16日～21日27日	夜臼式土器を伴う弥生時代前期溝
〃 19 〃	I-u-2	54—1	〃 〃 〃 24-4	250 m²	〃 6月16日～7月8日	古墳時代初頭住居跡1. 中世溝2. 弥生時代前期溝1. 井戸跡1.
〃 20 〃	K-c-1		〃 〃 2丁目14-20	〃	〃 6月3日	溝1. 掘立柱建物1.
〃 21 〃	I-d-2	54—2	〃 〃 〃 13-16	442 m²	〃 7月13日～7月18日	古墳時代初頭住居跡1. 掘立柱建物1.
〃 22 〃	E-j-1	〃—3	〃 小田部5丁目25	385 m²	〃 7月13日～7月26日	掘立柱建物12.
〃 23 〃	J-g-1	〃—4	〃 有 田1丁目27-2	485 m²	〃 7月27日～8月23日	中世溝2.
〃 24 〃	K-e-1	〃—5	〃 〃 2丁目10-7	143 m²	〃 8月3日～9月10日	中世溝状遺構1. 井戸跡2.
〃 25 〃	D-a-1	〃—6	〃 小田部5丁目237-1	298 m²	〃 8月8日～8月11日	中世掘立柱建物4.
〃 26 〃	D-c-1	〃—7	〃 〃 〃 219	245 m²	〃 8月23日～9月10日	掘立柱建物2. 平安時代土坑墓1.
〃 27 〃	D-a-2	〃—8	〃 〃 〃 241	244 m²	〃 9月10日～9月17日	弥生時代中期住居跡？1.
〃 28 〃	I-u-3	〃—9	〃 有 田1丁目20-2	179 m²	〃 9月14日～10月2日	弥生時代前期Ⅴ字溝1. 中世溝1. 道路跡？1.
〃 29 〃	J-e-1	〃—10	〃 〃 〃 33-2	280 m²	〃 10月5日～11月12日	古墳時代住居跡3. 奈良時代掘立柱建物1.
〃 30 〃	J-k-1	〃—11	〃 小田部3丁目288	586 m²	〃 10月16日～12月3日	弥生時代～中世掘立柱建物十数棟 古墳時代住居跡2. 火葬墓1.
〃 31 〃	J-h-1	〃—12	〃 有 田1丁目34-2	580 m²	〃 11月12日～12月1日	古墳時代住居跡1. 掘立柱建物2.
〃 32 〃	J-o-1	〃—13	〃 〃 〃 29-9	237 m²	〃 12月14日～2月10日 2月25日～3月17日	古墳時代初頭住居跡1. 掘立柱建物1. 中世溝2. 中世井戸1.

表 1. 有田・小田部発掘調査一覧表

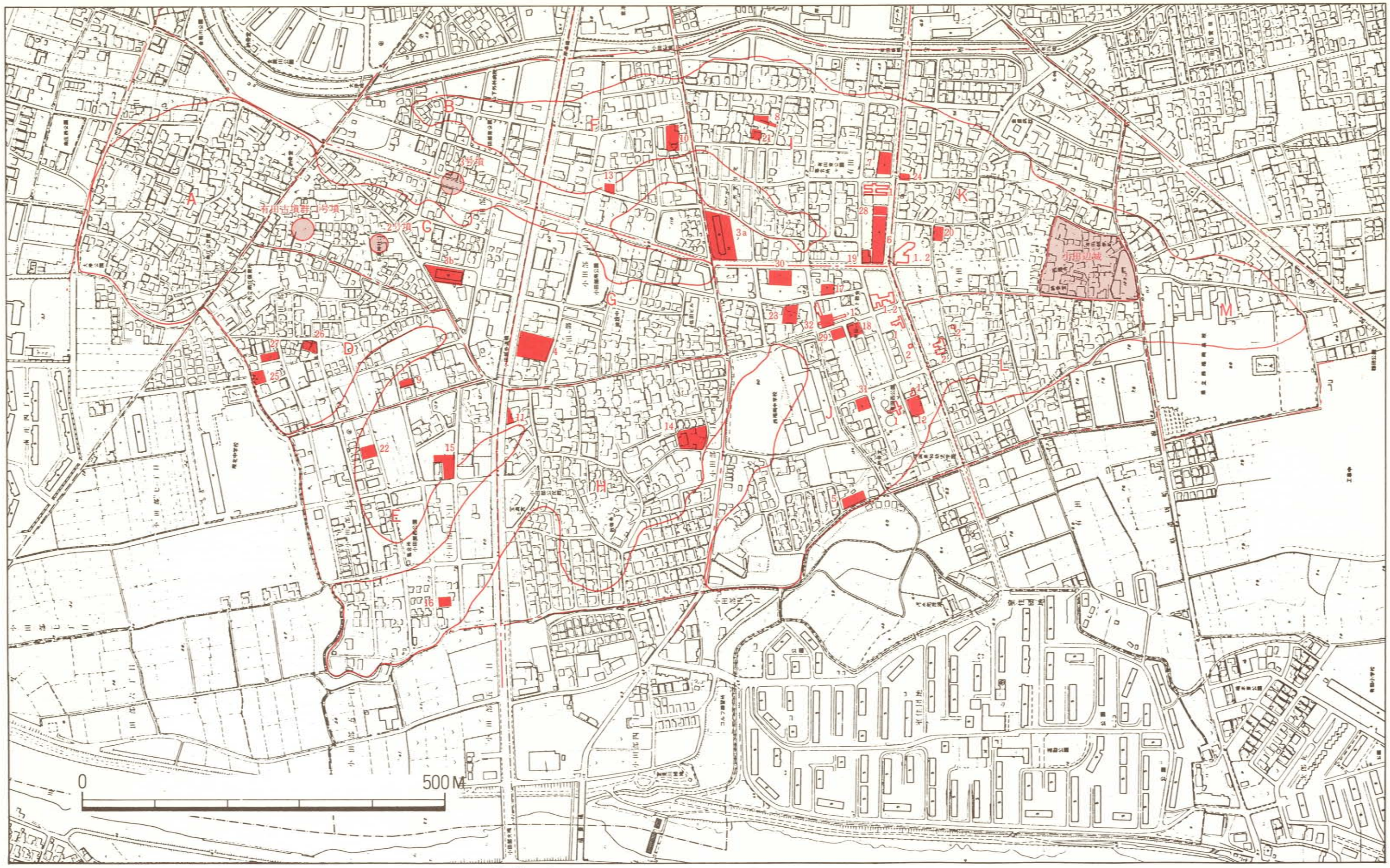


Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点　(縮尺1/5,000)※数字は調査次数を，アルファベットは地区名を表わす。

Fig. 2　有田・小田部台地の旧地形図　(縮尺1/5,000)※赤塗りは調査地点，数字は調査次数を表わす。

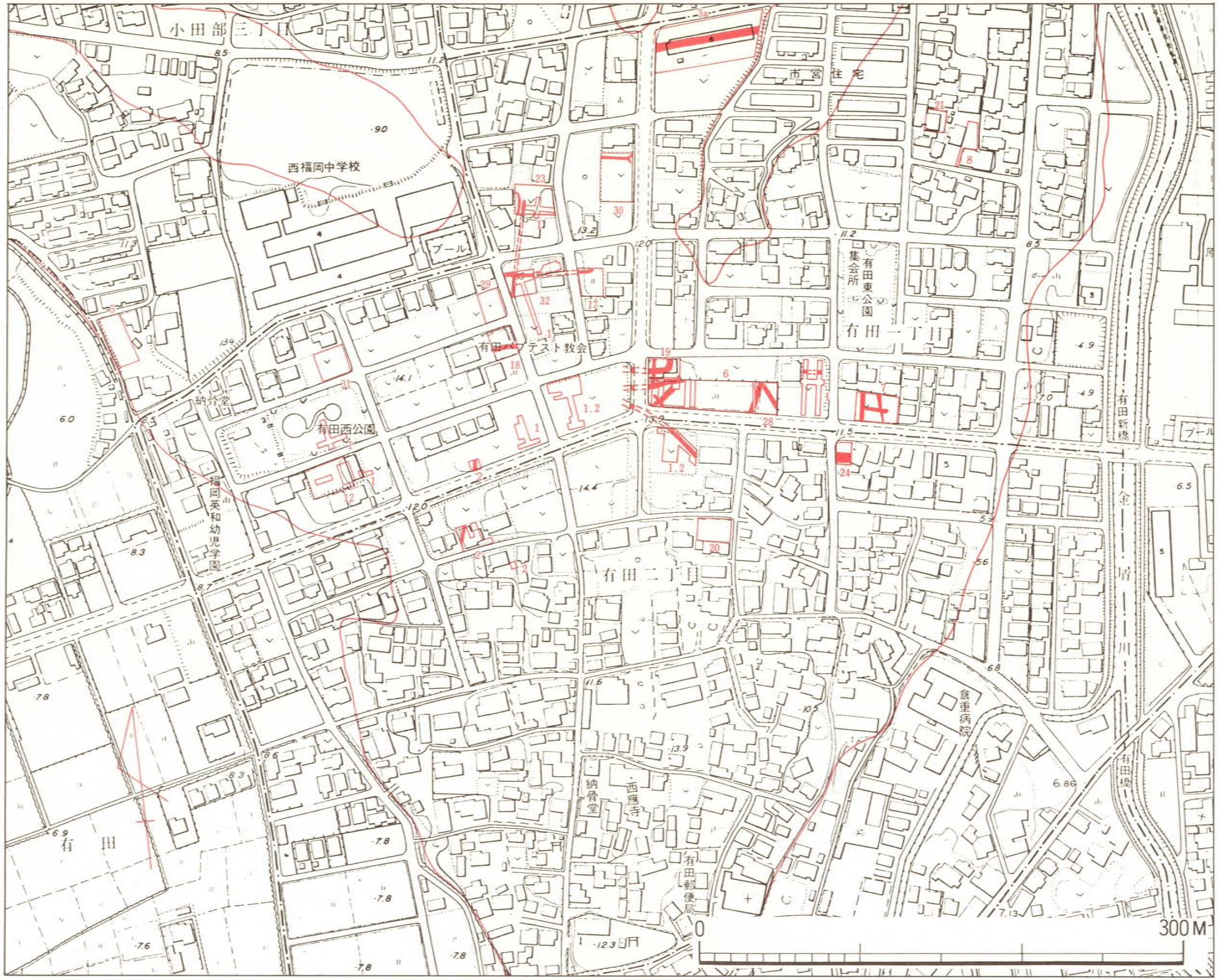


Fig. 4　有田地区調査地域図　(縮尺1/2,500)※数字は調査次数，赤塗りは遺構を表わす。

1. 第17次調査

調査の概要

調査対象地は，福岡市西区有田1丁目20-9番地に所在し，面積は 136 m^2 である。

九州大学によって第1次発掘調査が実施された25街区[註1]の東側に隣接する。有田地区では，ほぼ台地中央の高い地域に位置する。

25街区では奈良時代の住居跡1軒と，小溝が検出されているので，当該地でも同様な遺構の存在が予想された。建築確認申請に伴って試掘調査を行った結果，申請地の西半分に遺構の存在を確認したため，昭和53年度の事業として発掘調査を実施した。

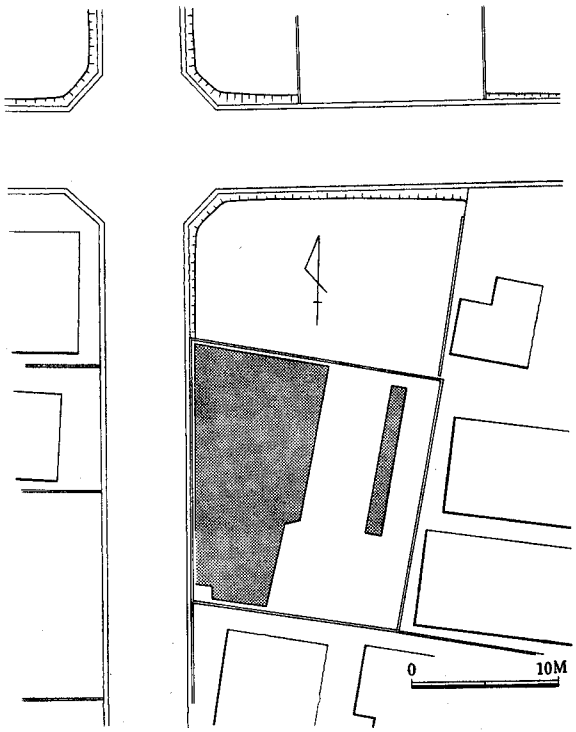


Fig. 5 調査地点現況図（縮尺1/500）

発掘調査は，昭和54年3月9日から20日迄の8日間行った。試掘調査の結果，東に緩やかに傾斜する台地は，東へ約8 *m*のところで急激な段落ちとなって，遺構は存在しない。この段落ちは，調査地の東端では深さ2 *m*以上あって，その覆土は客土と思われる。昭和初年の地形図（Fig. 3）には，この地域に幾つかの溜池が見られ，また北東方向から深く入り込んだ谷もあることから，元来，谷が地形図で観察できる以上に深く切り込んでいた可能性がある。

以上の試掘結果から，発掘調査は西半分にとどめた。表土を約20*cm*除去すると，褐色粘質土（ローム層）の遺構面が表われるが，かつての区画整理の影響で遺構の残りは悪い。

検出された遺構は東西方向へ伸びる溝と不整形土壙である。遺物は，細片ばかりで時期比定の資料とはなり得ない。

検出遺構

溝 (Fig. 6, 7, PL. 4)

調査地の北側に寄って検出されたもので，主軸を東西方向においている。二段掘りになった溝で，北側が一段浅く掘り込まれている。溝幅1.5*m*，深さは南側で30*cm*，北側で13*cm*を測る。溝北壁の掘り込みが緩やかなのに対し，南壁は，ほぼ直に立っている。この溝は南へやや傾斜

しているが，約10mのところで北へほぼ直角に曲がり，北側の未発掘部分へさらに伸びるものと考えられる。この溝は，昭和54年度の第32次調査で検出された溝２と接続するもので第32次調査地点からの延長は約35mを測る。またこの溝は削平を受けたにもかかわらず溝周囲には，

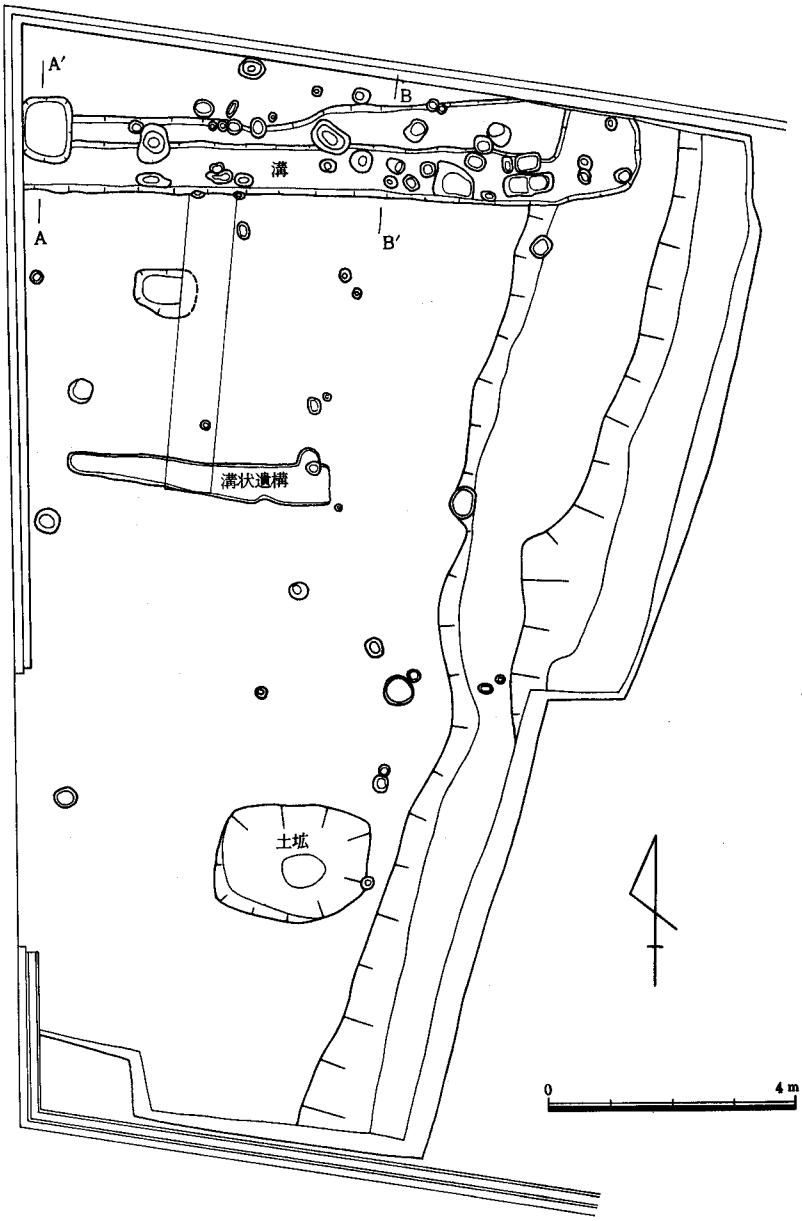
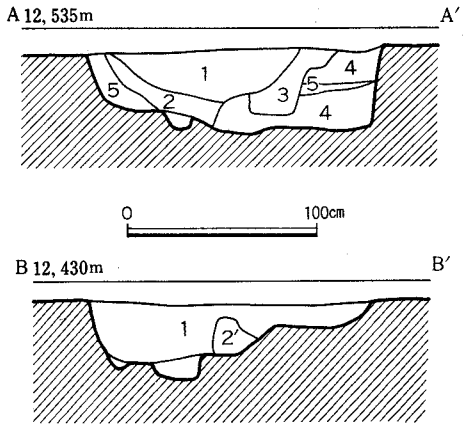


Fig. 6 遺　構　配　置　図（縮尺1/120）



土　層　説　明

1. 茶褐色粘質土層　3. 黒褐色土層
2. 暗茶褐色粘質土層　4. 黒色土層
2′. 2より暗い　5. 淡茶褐色粘質土層

Fig. 7　溝断面図（縮尺1/40）

径約40㎝の大きく，深い柱穴が不規則だが多く存在する。特に，溝の一段浅い部分にある柱穴は，部分的に規則性が認められる。時期を決定する遺物は検出できなかった。覆土は Fig. 7 に図示したとおり，茶褐色粘質土が主体である。この覆土から判断すれば，比較的新しい時代―歴史時代の遺構と考えられる。

土壙 (Fig. 6)

不整惰円形の浅い窪み状の遺構で，長径2.4*m*，短径2.0*m*，深さ10㎝を測る。覆土には黒色粘質土が充塡されており，土錘が1個出土している。

出　土　遺　物

土錘 (Fig. 8, PL. 4-2)　土壙出土。長さ4㎝，最大幅1.5㎝，孔径0.3㎝を測る。淡黒色を呈し，胎土には荒い砂を含んでいる。

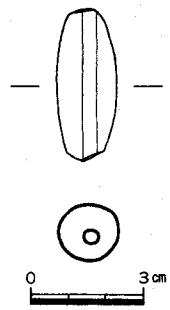


Fig. 8　土壙出土土錘（縮尺1/2）

小　　結

遺構年代の決め手になる遺物の出土に欠いてはいるが，第32次調査において，溝の延長と考えられる溝2が検出されている。この溝2は，中世室町時代の溝と井戸から切られており，それ以前の時期が与えられる。第32次調査では，溝2より瓦器片の出土もみられており，おおまかではあるが，溝の年代を鎌倉時代から室町時代迄の時期を考えている。

註1　福岡市教育委員会「有田古代遺跡調査概報」1967

2. 第 21 次 調 査

調 査 の 概 要

調査対象地は，福岡市西区有田１丁目13-16番地に所在し，対象面積は442m² である。

北に向って舌状に突出する狭長の台地上に位置し，昭和52年に発掘調査を実施した第８次調査地点[註1]の西側に隣接するもので，古墳時代の住居跡，および奈良～平安時代の遺構の存在が期待されるところであった。昭和54年度の当初に建築確認が申請されたので，試掘調査を行った結果，住居跡を検出したので，発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和54年７月13日から18日までの４日間実施した。調査は，対象地を東西の二つに区分し，前後に分けて行った。

対象地は，かつての区画整理により著しく削平を受けており，さらには西側に建物が存在していたためもあって，遺構の検出は少ない。遺構は表土下20*m*程で確認される。東側に集中して遺構が検出されたが，これは単に西側が後世の攪乱を受けたためではなく，本来西側が東側に比べて高かったものを区画整理で削平を受けたと考えられる。遺構は竪穴住居跡１軒，住居跡の痕跡と思われるもの１軒，掘立柱建物１棟を検出した。

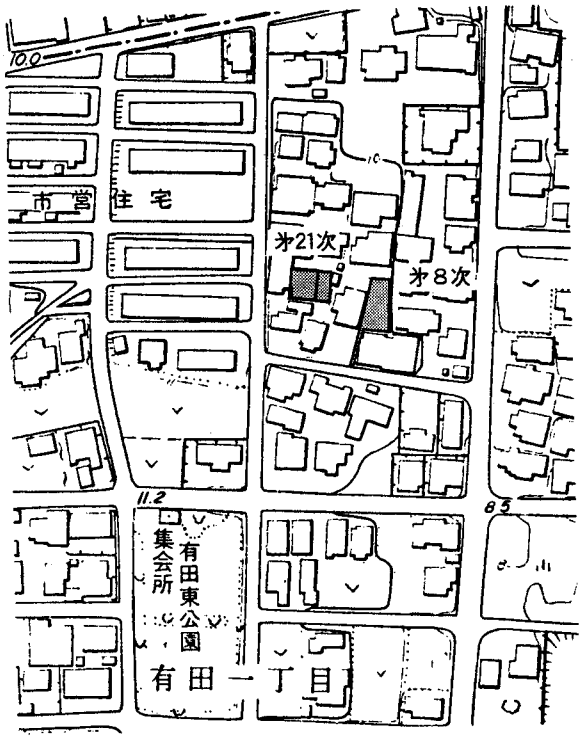


Fig. 9 調査地点位置図（縮尺1/2500）

検 出 遺 構

住居跡

住居跡１ (Fig. 11, PL. 6—1)

東北側を未発掘なので正確な平面形，法量は不明である。平面形は，東側隅にベッド状遺構の小構を検出しているので，長方形を呈するものと考えてよいだろう。法量は現状で，南辺４*m*，西辺2.2*m*を測る。壁高は26*cm*を残しており，壁下には周溝を巡らしている。床面は貼床で，タタキ状にしっかり固められているが，炉跡，及び主柱の検出はできなかった。Ｐ２は深さ20*cm*，Ｐ３は深さ31*cm*

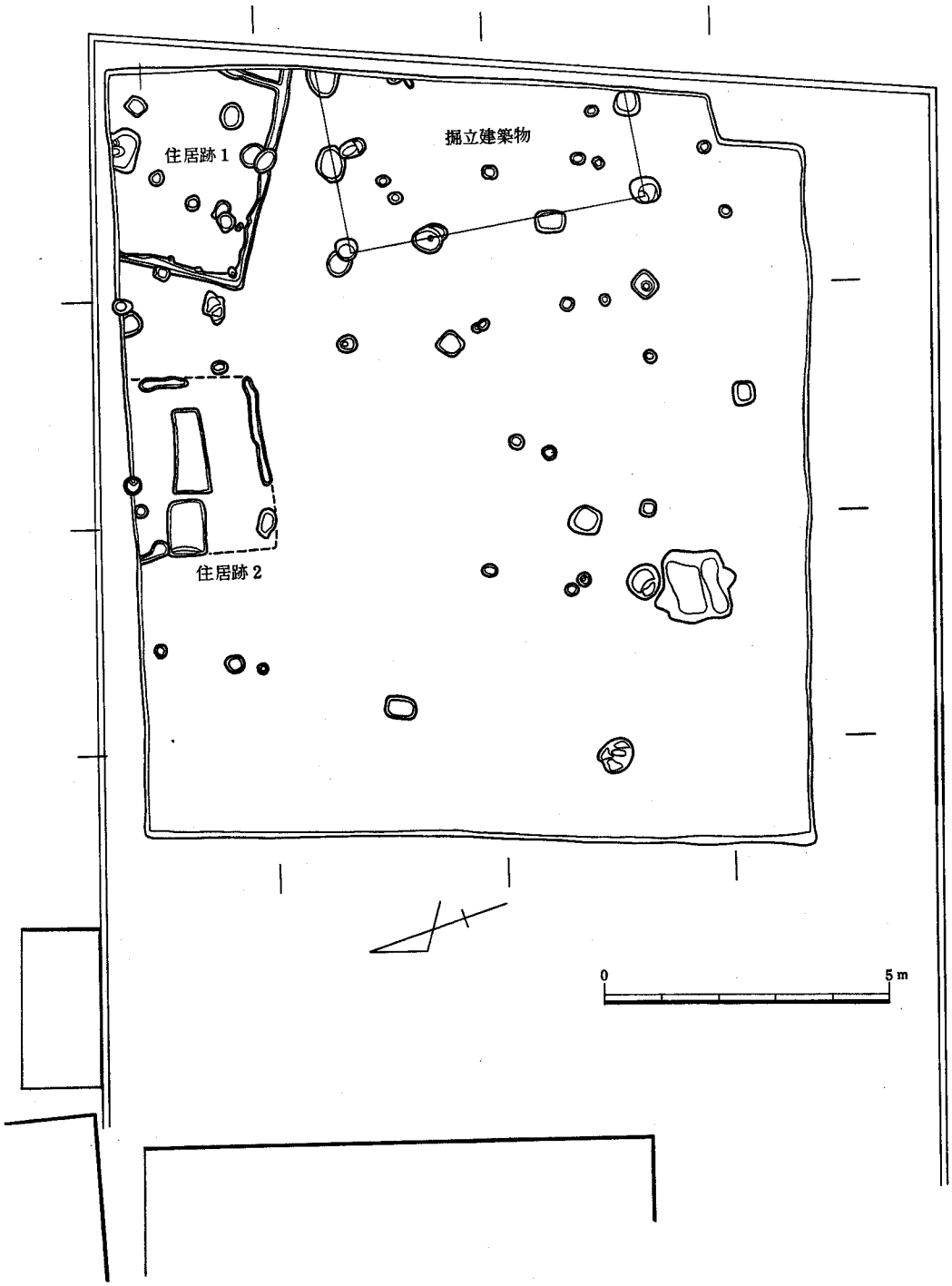


Fig. 10 遺 構 配 置 図（縮尺1/100）

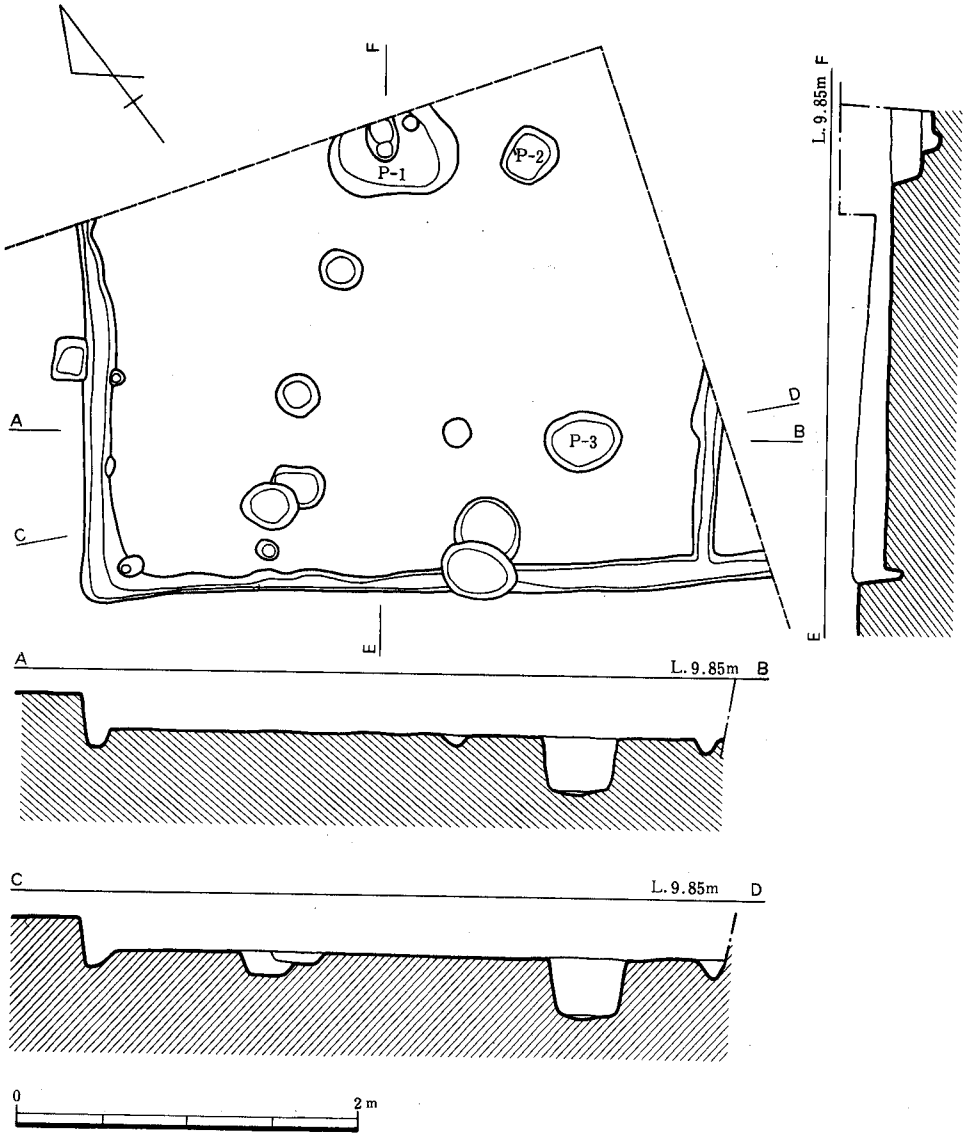


Fig. 11　住居跡 1 実測図（縮尺1/40）

を測り，他の pit よりも深く主柱としての可能性がある。P 1 は楕円形を呈し，長径72㎝，深さ 30㎝ を測るが，内部は黒褐色粘質土が充塡されている。他の pit に比べて規模も大きいので，ベッドをもった住居跡の壁面に沿って作られる貯蔵穴とも考えられる。遺物は全て細片であり，床面密着の土器は検出できなかったので時期比定が困難であるが，ベッド状遺構や，貯蔵穴等の存在から弥生時代後期末～古墳時代初頃が考えられる。

住居跡1　出土遺物(Fig. 12)　口径3.2*cm*，器高1.8*cm*を測る手づくね土器である。底部は尖がり気味の丸底をなし，口縁端部は丸味をもっている。内面には指圧成形痕を残している。色調は内外共に暗い黄褐色を呈しており，胎土に多くの砂粒を含んでいる。焼成は良好である。

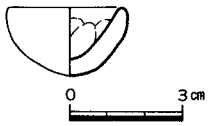


Fig. 12　住居跡1出土遺物（縮尺1/2）

住居跡2（PL. 6-2）　幅10*cm*～15*cm*，深さ5*cm*～10*cm*の小溝3本と，深さ3*cm*～4*cm*の長方形の pit で構成される。3本の小溝を延長してみると方形を形づくり，小溝幅および深さから住居壁下の周溝が残存したものと考えられる。さらに長方形状の pit は非常に浅く0.5*cm*～3*cm*程の深さしかなく，南側の小溝に並列し，また東，西の溝にほぼ直交する。発掘方法にも問題が残るが，この二列に並んだ二つの長方形状の pit の南側と北側には比高差があって北側に向って低くなるところから，住居跡内に段差が設けられていて，それが北側に低く傾斜するような削平を受けたために段差がわずかに残ったものであろう。つまりベッド下が残存したと考えて良いだろう。復元してみると南辺が約3*m*前後の長方形プランを呈し，壁下には周溝を巡らし，南辺壁には1.9*m*のベッドを設ける構造が推測できる。

掘立柱建物（Fig. 14，PL. 7-1）

東側が未発掘のため，東西の柱列数が不明だが，東側には余り延びないと考える。径50*cm*～60*cm*，深さ40*cm*～50*cm*の柱穴で構成される。桁行は3間，梁行は2間しか検出できなかった。桁行3間，梁行2間～3間の建物が考えられる。建物の方向は，ほぼ真北方向に設定されている。柱間寸法は図示したとおりである。遺物は土師器，須恵器片が出土しているが，P6から須恵器蓋（Fig. 13-2）が検出された。

出　土　遺　物

須恵器

杯蓋（Fig. 13-1, 2）

1.　P19の柱穴より出土した。約1/4の破片である。口径約14*cm*を測る。器高の深い杯蓋で，天井部と体部との境には有段をなして境としている。口縁端部内側は弱い段をなしている。天井部のヘラ削りは，せいぜい1/3迄のようで，削りの方向は時計回りである。

2.　P6より出土した。器形の約1/2の破片である。口径9.2*cm*，口縁端部径11.6

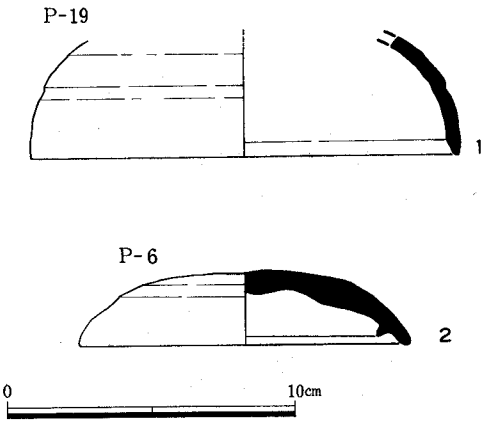


Fig. 13　出　土　遺　物（縮尺1/3）

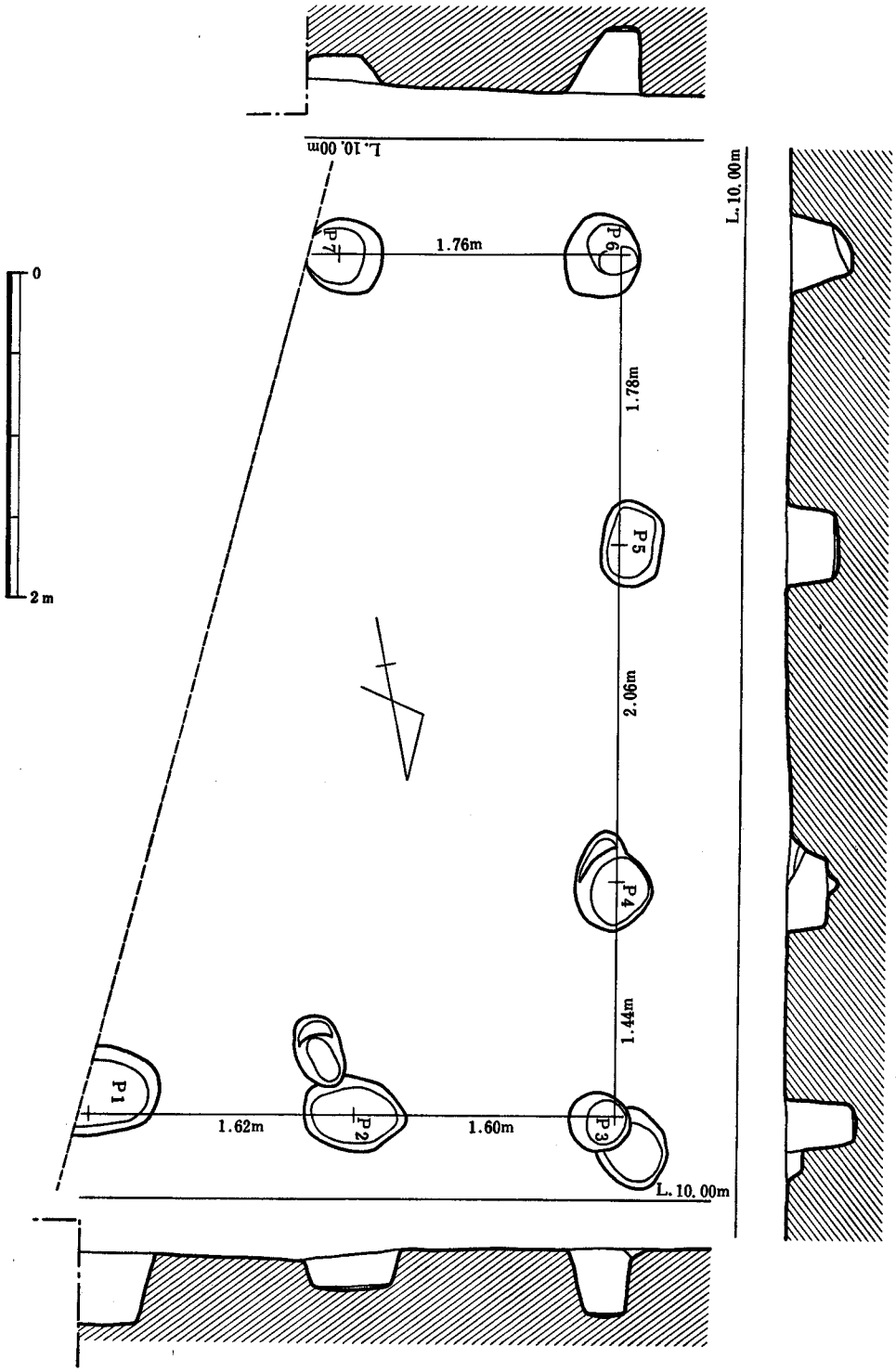


Fig. 14　掘　立　柱　建　物（縮尺1/40）

cm，器高2.5cm，かえりは0.4cmを測る。内面のかえりは小さく，わずかに突出するだけで，口縁端部より下方へ出ない。端部は鋭くおさめている。体部は緩やかな丸味をもっている。中央にはつまみをもたない。天井部から体部中位にかけて回転ヘラ削りが施されている。胎土に砂粒を多く含んでおり，焼成は堅く，色調は暗い灰青色を呈している。

小　　結

今回調査した遺構は，後世の削平を受けており，わずかにしか検出できなかった。調査地点は，わずか30m～40mの狭長な台地上に位置しており，西側には谷頭を接している。遺構は台地から北へ伸びる一支群の遺跡の構成を知るうえで重要である。昭和53年には隣接の第8次調査地点において，やはり古墳時代初頭の住居跡，歴史時代の建物を検出しており，この狭長な台地上に古墳時代初頃の集落跡が存在したことが理解される。さらには，奈良～中世の遺物の出土や，掘立柱建物の検出から歴史時代の建物群が存在することも推測される。

住居跡の年代は，先に述べたように，平面形態，ベッドをもつこと，小型手づくね土器の出土などから古墳時代初頃が考えられる。

掘立柱建物ＳＢ01は，Ｐ６出土の須恵器がＶ式に比定されるところから，７Ｃ時代以降の年代が与えられる。

註１　昭和53年度発掘調査。現在，整理報告書作製中。表１参照。

1間×2間	梁間(cm)	梁行間(cm)		桁間(cm)	桁行間(cm)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
P 1　P 2	162	322 ?	P 3　P 4	144	529	1	45	46 ?	54
2　3	160		4　5	206		2	24	63	46
6　7	176		5　6	178		3	44	38	38
平　均	166		2　7			4	32	52	48
			平　均	176.3		5	32	54	38
						6	42	36	46
						7	18	46	46
						平　均	33.8	48.1	45.1

表 2.　掘立柱建物計測表

3. 第22次調査

調査の概要

調査対象地は，福岡市西区小田部5丁目25番地に所在し，対象面積は385m² である。

有田・小田部台地の北端部分にあって，ゆるやかな谷の基部に相当する位置に所在する。対象地の南接地には，事前調査において削平を受けた柱穴群が検出されているため，当該地も遺跡の存在が予想された。昭和54年度の建築確認が申請されたので，試掘調査を行った結果，遺構の存在を確認したので，発掘調査を実施した。

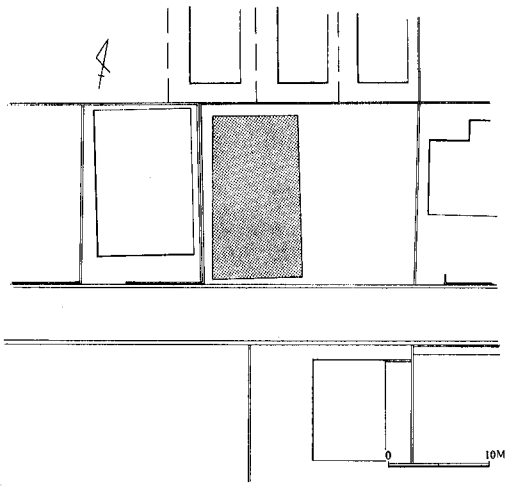


Fig. 15 調査地点現況図（縮尺1/500）

発掘調査は，昭和54年7月13日～26日迄の10日間実施した。

調査地の土層を観察すると，第1層―表土は約80cmの盛土で，その内，下部の約50cmは区画整理による客土である。第2層は，旧耕作土で区画整理以前の表土である。第3層は，茶褐色粘質土の遺構面となる。遺跡北側では，第2層，第3層の間に，淡黒褐色粘質土層の包含層が存在するが，南側は削平を受けている。

遺構は，数本の浅い溝と掘立柱建物12棟を検出した。その他，多くの柱穴群が検出されたが建物を構成するには困難である。

遺物は非常に少なく，時期の決定できるものは限られた。

検出遺構

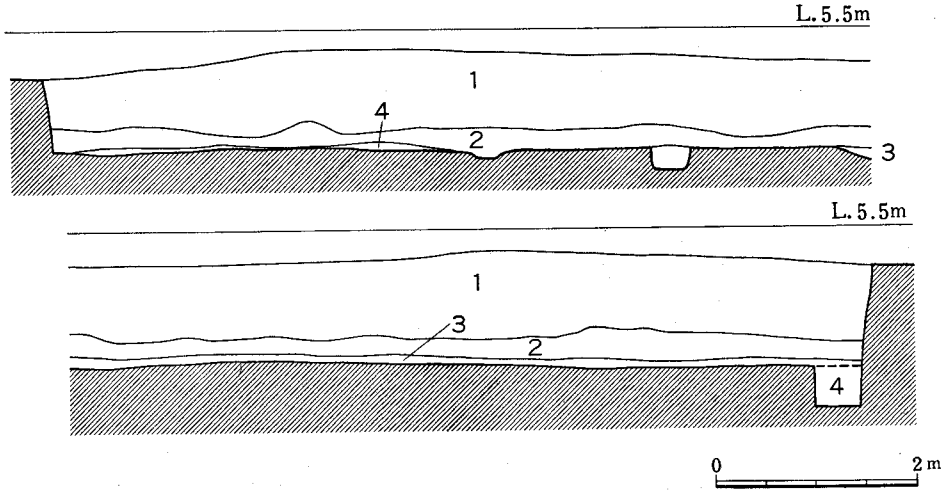
掘立柱建物 (Fig. 18～23)

柱痕の残ったものが少なく，また湧水によって遺構検出に困難をきわめたため，ほとんど図上復元を行った。

〔**SB 01**〕(Fig. 18) 梁行1間，桁行2間の建物と考えられる。柱穴径は26cm～30cm，深さ10cm～37cmを測る。柱間は梁間2.26m，桁間2.26m～3.34mを測る。主軸は，磁北より7°東へ振る。

〔**SB 02**〕(Fig. 18) SB 01と切合い関係にある，主軸をやや東寄りにおいた，梁行1間，桁行1間の建物である。梁間1.76m，桁間2.18mを測り，柱穴径30cm～40cm，深さ29cmを測る。主軸方位はN20°30′Eである。

〔**SB 03**〕SB 02，SB 04 と切合い関係にある。主軸をやや西にとった，梁行1間，桁行1



土 層 名 称

第1層	表 土	二次堆積層
第2層	旧表土	暗茶褐色粘質土層（褐色粘質土の小ブロック混入）
第3層	包含層	淡黒褐色粘質土層
第4層	地 山	明茶褐色粘質土（ローム層）

Fig. 16 西 壁 土 層 図（縮尺1/100）

間の建物である。梁間1.4*m*，桁間1.76*m*を測り，柱穴径30*cm*～40*cm*，深さ25*cm*を測る。柱痕を確認できたのは1ヵ所だけで，径13*cm*を測る。SB 05とは柱穴が切合っているが，前後関係は把握できなかった。

〔**SB 04**〕(Fig. 19) 梁行1間，桁行1間の建物で主軸は磁北より13°10′東へ振っている。梁間1.4*cm*，桁間1.74*m*を測る。

〔**SB 05**〕(Fig. 19) 梁行1間，桁行2間の建物と考えられ，梁間2.54*m*，桁間1.72*m*～1.76*m*を測る。主軸はSB 04と同じく東へ13°10′振っている。

〔**SB 06**〕(Fig. 21) SB 07，SB 05と切合い関係にある。ほぼ南北方向に主軸を定める。梁行2間，桁行2間の建物で，南側の桁間には各1本の間柱が存在する。桁間は北の柱間が南側の柱間に比べ短い。梁間1.3*m*～1.4*m*，桁間1.94*m*～2.26*m*を測る。主柱は35*cm*～40*cm*の径を測る。主軸方位はN4°Eに設定している。SB 01と同一方向の建物で，同時併行が考えられる。

〔**SB 07**〕梁行1間，桁行1間の建物で，梁間1.72*m*，桁間1.98*m*を測る。主軸をN84°40′Wに設定している。

〔**SB 08**〕(Fig. 22) 梁行，桁行の規模は不明，梁間1.4*m*～1.66*m*，1.3*m*～1.46*m*を測る。主軸を磁北より12°東へ振っている。

〔**SB 09**〕(Fig. 23) 梁行2間，桁間2間の建物で，梁間1.04*m*～1.34*m*，桁間1.3*m*～1.81*m*を測る。磁北より36°50′西に主軸を定める。

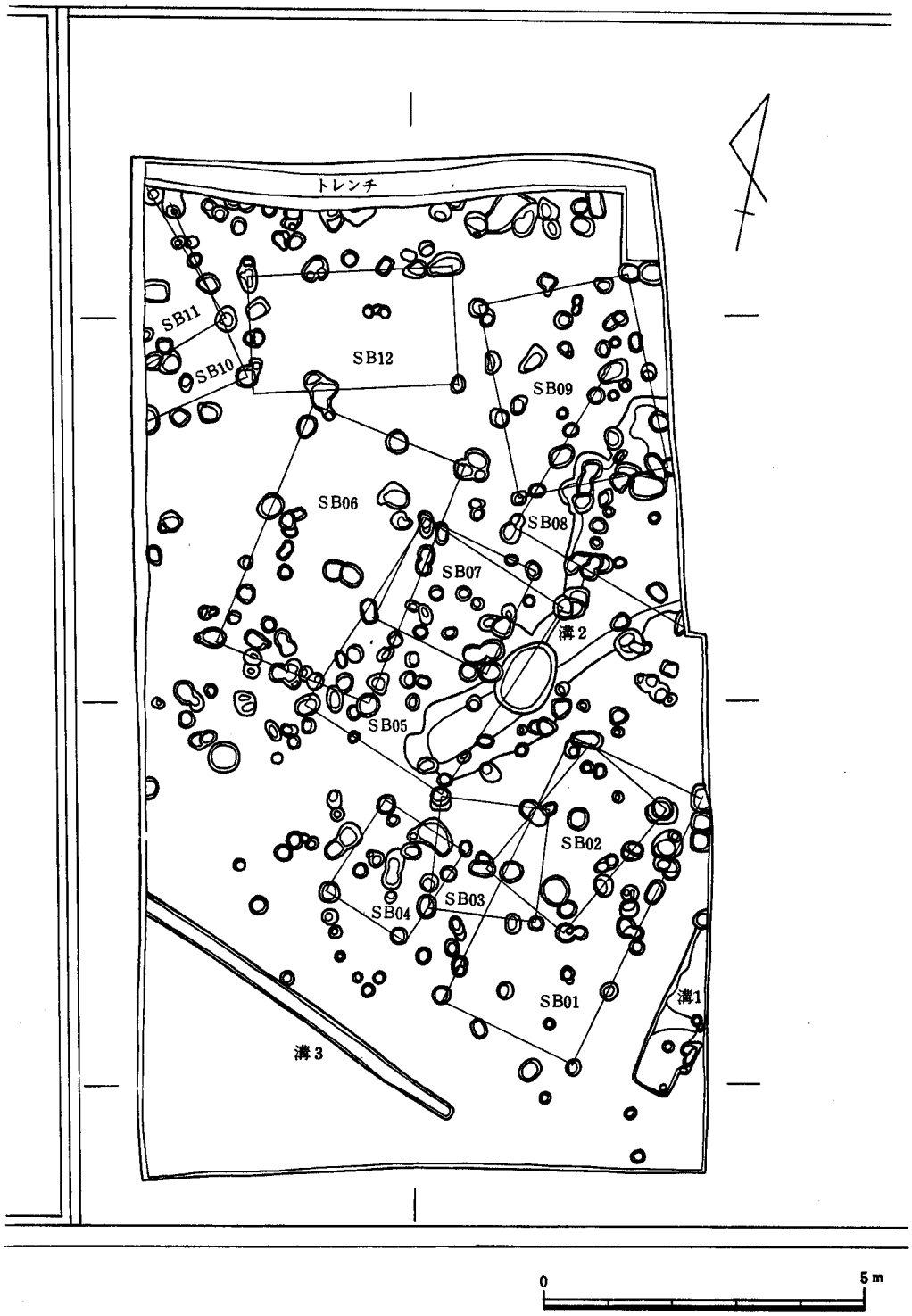


Fig. 17　遺　構　配　置　図（縮尺1/100）

〔**SB 10**〕(Fig. 20)　梁行，桁行の規模は不明であるが，現存では，梁行1間，桁行2間を検出している。梁間1.75*m*，桁行1.6*m*～1.68*m*を測る。主軸をN 39°10′Wに定める。

〔**SB 11**〕(Fig. 20)　梁行，桁行の規模は不明，梁間1.1*m*，桁間1.16*m*～1.2*m*を測る。主軸をN46°30′Wに定める。

〔**SB 12**〕(Fig. 20)　梁行1間，桁行3間の建物と考えられる。梁間1.9*m*，桁間0.98*m*～1.18*m*を測る。主軸は磁北より72°東へ振る。

溝 (Fig. 17)

〔**溝1**〕　溝幅80*cm*，深さ5*cm*～20*cm*を測る。ほぼ南北方向に主軸をおき，南へしだいに浅くなり溝は終る。SB 01と同一方向を保っており，SB 01と同時併行するのかもしれない。

〔**溝2**〕　発掘区のほぼ中央にあって，やや東より方向に主軸をおく 先端では溝幅1.2*m*を測るが北へ向かってしだいに広がり，溝としての形状を失っている。深さは先端部で10*cm*，北側では20*cm*を測る。

〔**溝3**〕　溝幅30*cm*，深さ15*cm*を測る。西方向に伸びる溝である。覆土からみて，近世のものであろう。

出　土　遺　物　(Fig. 24, 25, PL. 10-2)

甕形土器 (Fig. 25-1, 4)　1は口径15.7*cm*を測る。底部は欠損しているが，丸底をなすものと考えられる。球形胴部をなして最大径が中位にある。口縁部はやや外反しながら立ち上り，口縁端部では小さく内へ屈曲する。頸部と胴部の3ヵ所に接合部分がみられる。口縁部内面は指圧痕が残っており，その上を横方向のハケ目調整をする。胴部は斜め方向のヘラ削りを施こす。

	梁行	梁　間	桁行	桁　間	方　位	備　考
SB01	1間	2.26m	2間	2.26～2.34m	N 7° E	SB02と切り合い関係
SB02	1間	1.76m	1間	2.18m	N20° 30′ E	SB01と切り合い関係
SB03	1間	1.4 m	1間	1.76m	N12° 10′ W	SB02，SB04と切り合い関係 SB05と柱穴が切り合う
SB04	1間	1.4 m	1間	1.74m	N13° 10′ E	SB03と切り合い関係
SB05	1間	2.54m	2間	1.72～1.76m	N13° 10′ E	SB06，SB07と切り合い関係 SB05，SB07と柱穴が切り合う
SB06	2間	1.3 ～1.4 m	2間	1.9 ～2.28m	N 4° E	SB05，SB07と切り合い関係 SB01と同じ桁行
SB07	1間	1.72m	1間	1.98m	N84° 40′ W	SB05，SB06と切り合い関係 SB05と柱穴が切り合う
SB08	?	1.4 ～1.66m	?	1.3 ～1.46m	N12° E	SB09と切り合い関係
SB09	2間	1.04～1.34m	2間	1.3 ～1.81m	N36° 50′ W	SB08と切り合い関係
SB10	1間	1.75m	2間	1.6 ～1.68m	N39° 10′ W	SB11と切り合い関係 SB12と柱穴が切り合う
SB11	?	1.1 m	?	1.16～1.2 m	N46° 30′ W	SB10と切り合い関係
SB12	1間	1.9 m	3間	0.98～1.18m	N72° E	SB10と柱穴が切り合う

表 3.　掘立柱建物計測表

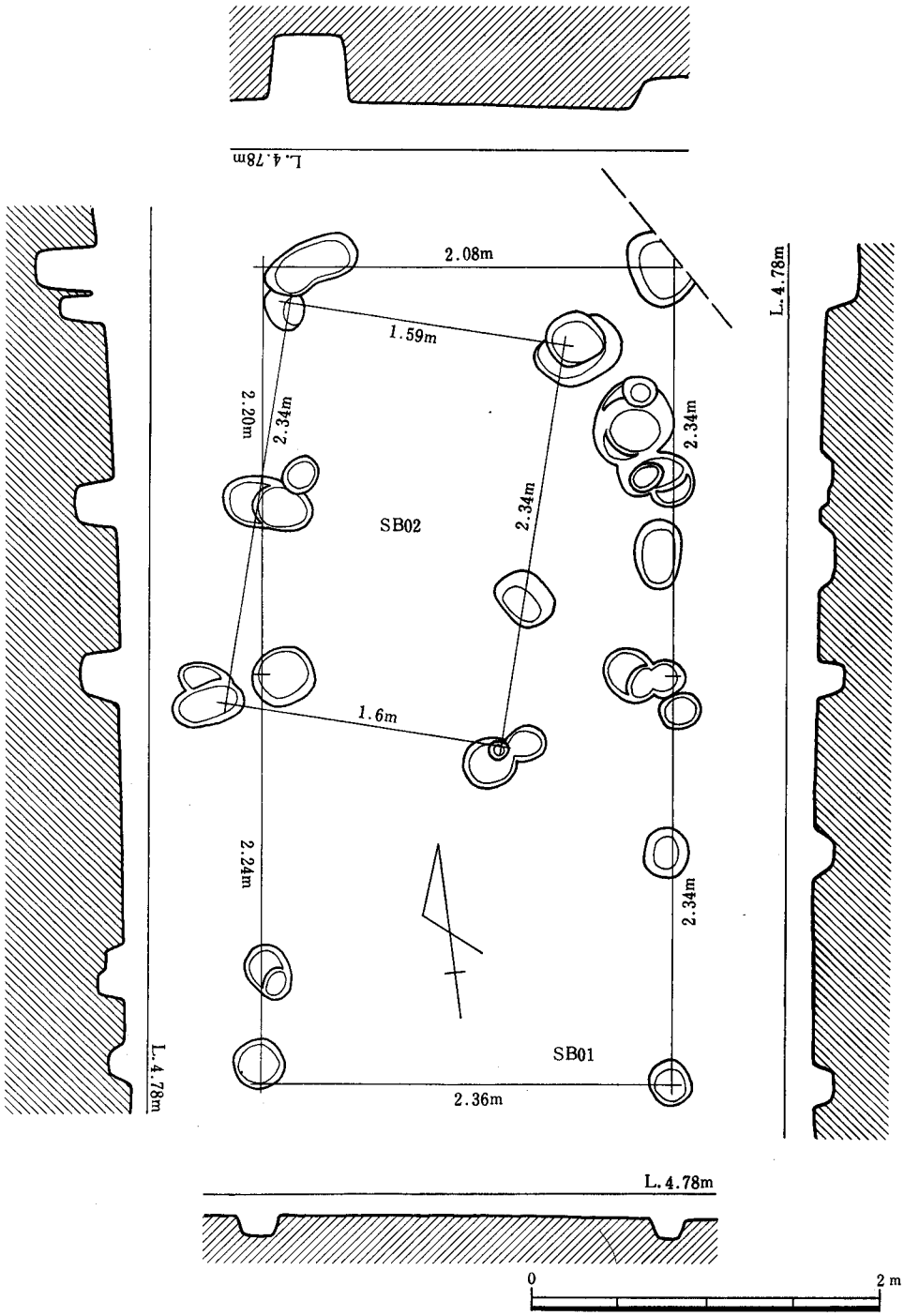


Fig. 18 掘 立 柱 建 物 SB 01, 02 (縮尺1/40)

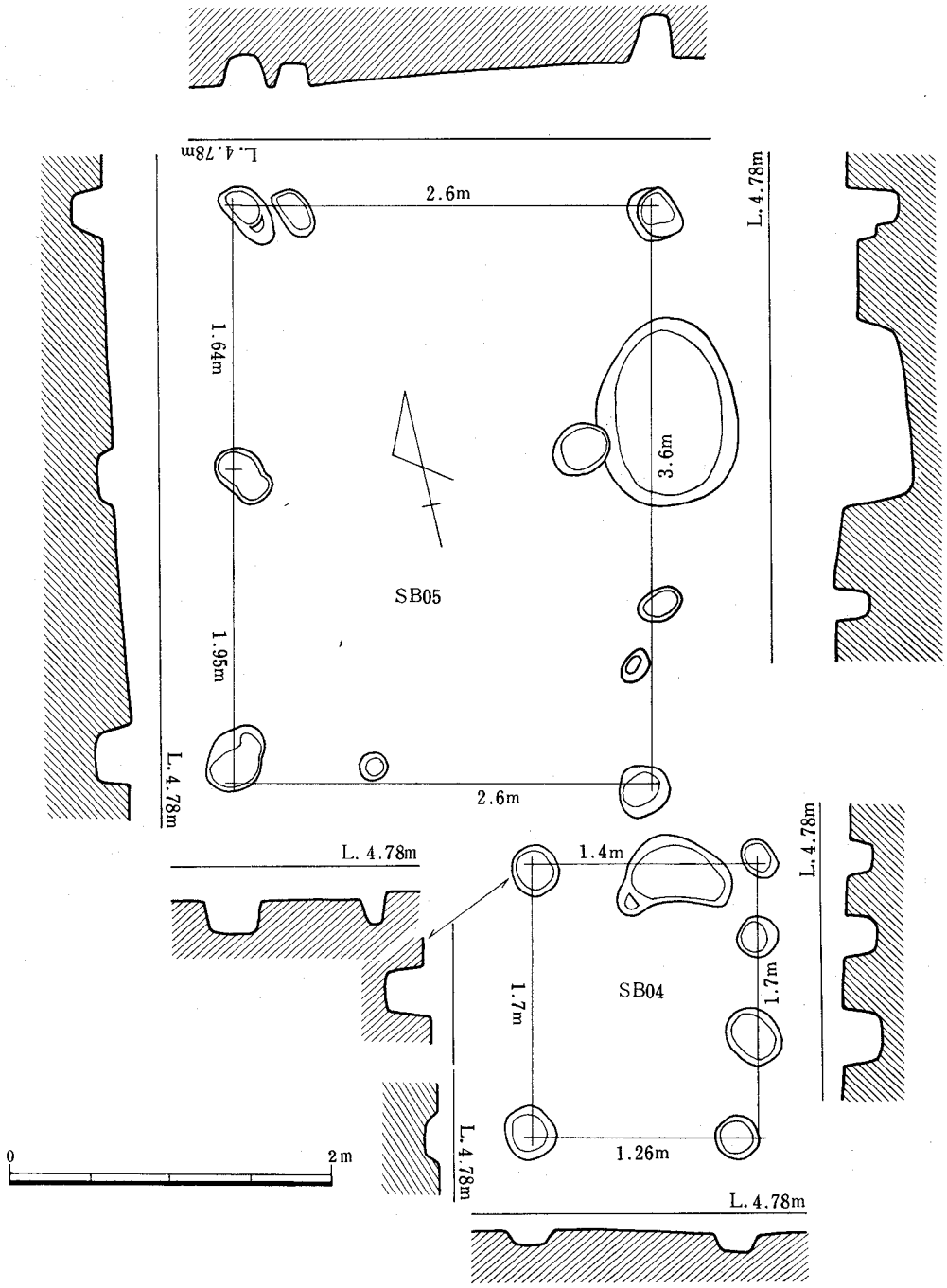


Fig. 19 掘 立 柱 建 物 SB 04, 05 (縮尺1/40)

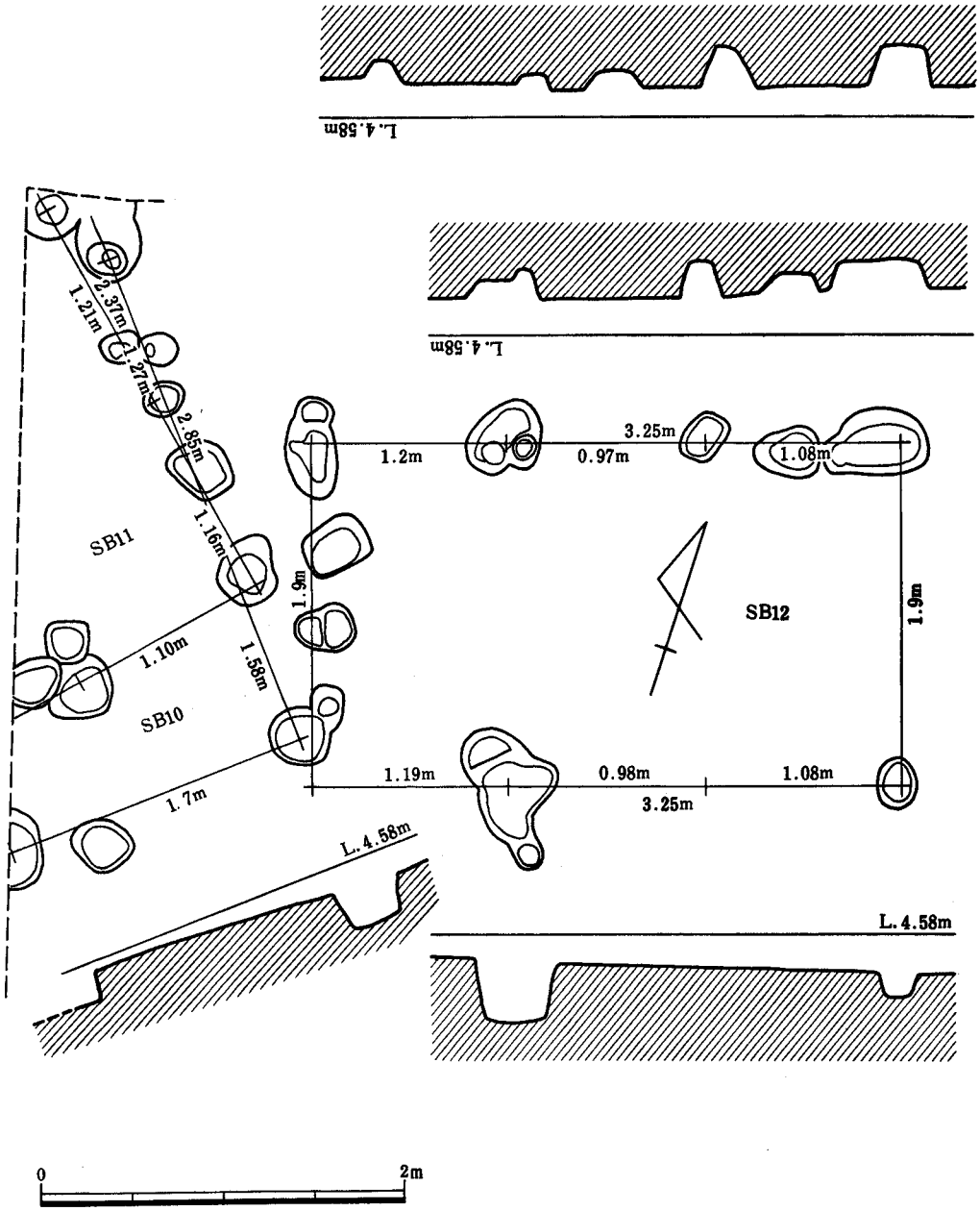


Fig. 20　掘立柱建物 SB 10, 11, 12（縮尺1/40）

外面は丁寧なナデ調整を施している。胎土は精選されており，砂粒を含まない。焼成は良好である。内外面共に暗い茶褐色を呈しており，胴部下半には煤の付着がみられる。4は包含層出土である。底径9 *cm*を測る甕形土器の底部で，底部から体部にかけて丸味を持っており，境が

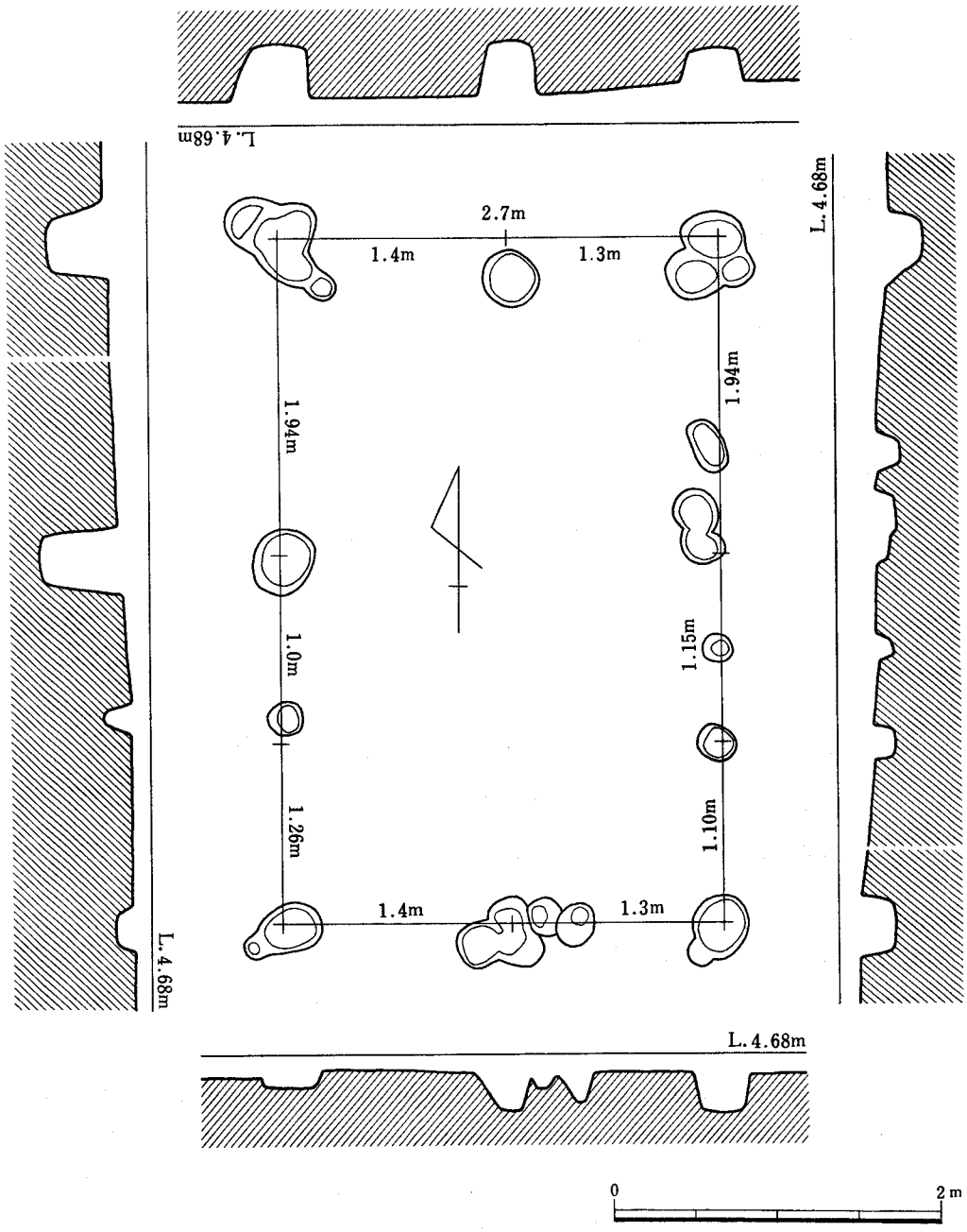


Fig. 21 掘 立 柱 建 物 SB 06 (縮尺1/40)

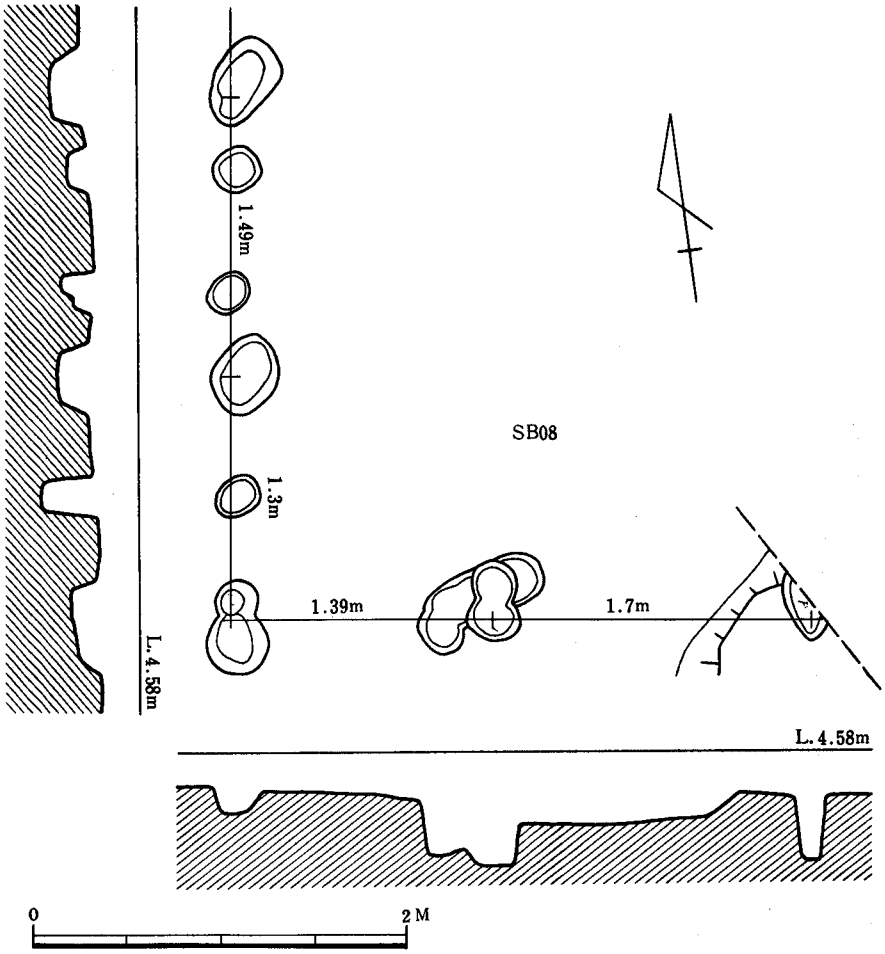


Fig. 22 掘立柱建物 SB 08 (縮尺1/40)

不明瞭である。 内外面共に磨滅が著しいが， 外面にわずかに縦方向のハケ目調整が観察できる。胎土には砂を多く含んでおり，焼成はやや弱い。色調は黄褐色を呈する。時期は弥生時代末が比定できる。

杯 (Fig. 25-3) 溝2より出土。脚部を欠損した高杯とも考えられるが，下底部に脚部接合の痕跡が認められないので，ここでは杯として報告したい。口径18*cm*，器高約5*cm*を測る。小さな丸底の底部から大きく開いて立ち上がり，口縁端はシャープにおさめる。内面下部は縦方向のハケ目調整が，上部は同じ工具による横方向のハケ目調整が施されている。外面は内面よりさらに細いハケ目調整が縦方向に施されている。器肉は薄く胎土は精選され，細い砂を少し含む。焼成はやや弱い。内外面共に暗褐色を呈している。

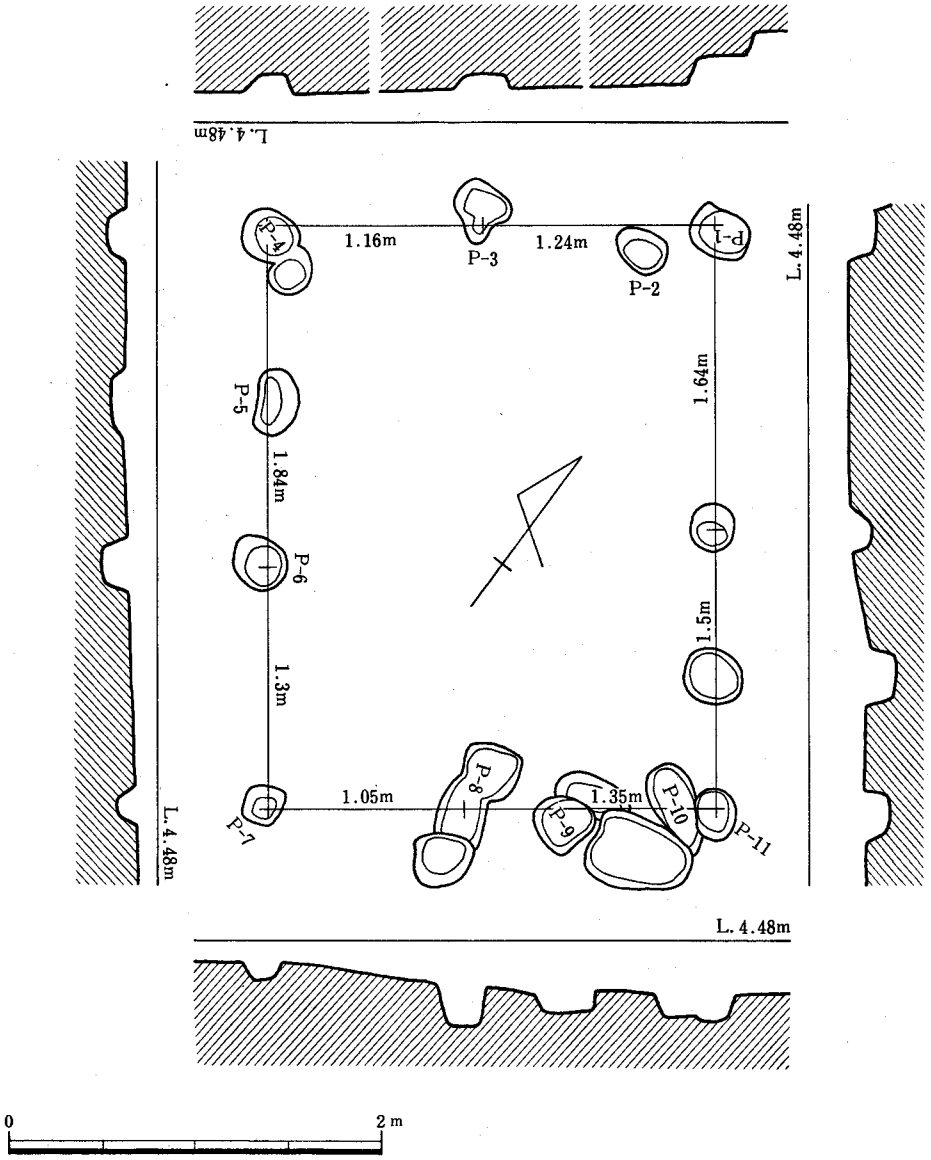


Fig. 23 掘立柱建物 SB 09 (縮尺1/40)

鞴羽口 (Fig. 25-2) 溝1より出土。鞴羽口の先端部である。二次的に熱を受けて非常に硬く，表面は灰色に変色しており，先端には鉄滓が付着している。外面はヘラによる調整がなされている。外面の胎土は細い砂粒を含み，精選されているようだが，孔周辺の内面は荒砂の混じった粘土を用いている。

小　　結

遺構面の標高は5 *m*未満で，周囲の水田面との比高差は1 *m*しかない。調査地点は深く切り込んだ谷の裾部にあたっており，湧水が著しい。そのため掘立柱建物と報告したものにも，考慮の余地は残る。掘立柱建物は，柱穴径，建物規模からみて小規模である。1間×1間，1間×2間，2間×2間の建物が主体をなし，それ以上の規模をもつものは少ない。1間×3間の建物は，未発掘地域にかかっており，桁柱が北へ伸びる可能性がある。掘立柱建物の内，主軸を同一方向に定めた建物は同時に存在したものと考えたい。SB 01—SB 06，SB 04—SB 05—SB 08が同時の関係にあるだろう。これらの建物の機能についてはSB 01に接した溝1より，鞴羽口が出土しており，工房跡として考えられるかもしれない。鉄滓の出土はわずかであるが，周辺の地域から多量に出土しており，その可能性は高い。時期は，出土遺物から古墳時代以降が考えられる。

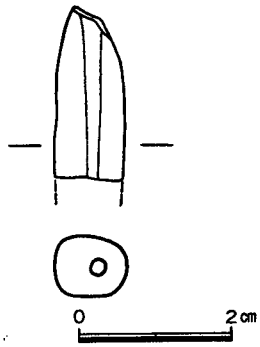


Fig. 24　土錘（縮尺1/1）

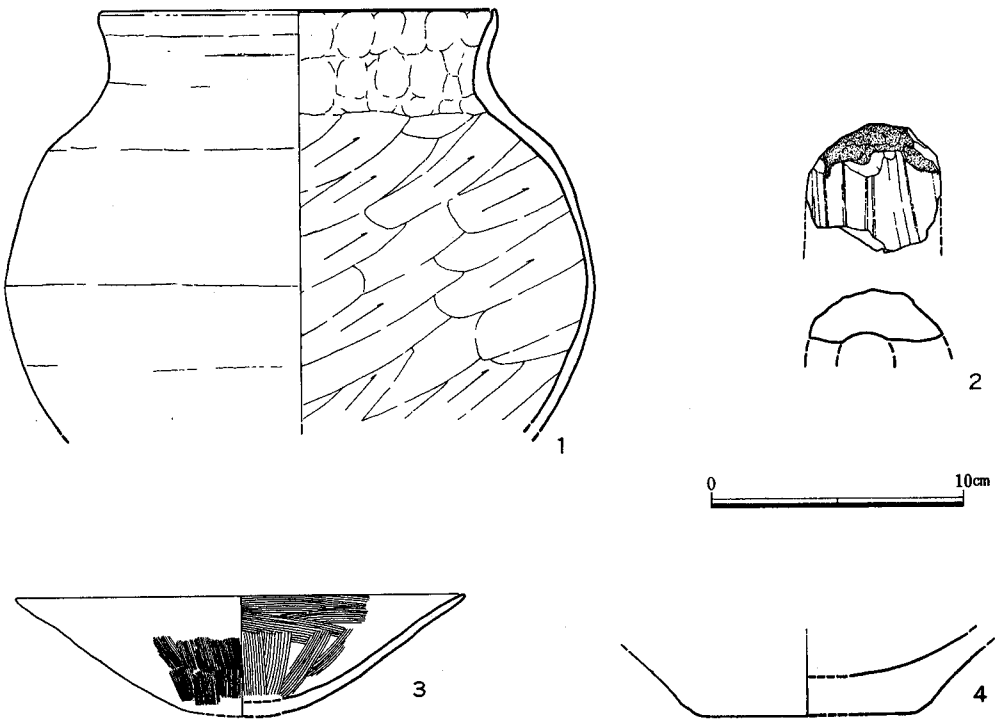


Fig. 25　出　土　遺　物（縮尺1/3）

4. 第 23 次 調 査

調 査 の 概 要

調査対象地は，福岡市西区有田1丁目27—2番地に所在し，対象面積は485m² である。

北西方向より深く切り込む谷の基部に近く，復元地形は東から西へ緩やかに傾斜していたものと考える。現標高は12*m*前後を測るが，かつては13*m*前後を測った様である。昭和42年の九州大学の発掘調査では24街区に相当し，トレンチによる調査が[註1]行われているが，詳細は不明である。この地点の南には25街区[註1]の住居跡，27街区[註2]の住居跡，および溝などの古墳時代から奈良時代の遺構が検出されており，関連遺構の存在が期待された。昭和53年度に埋蔵文化財の発掘調査願いが申請されたので，昭和54年度事業として発掘調査を実施した。

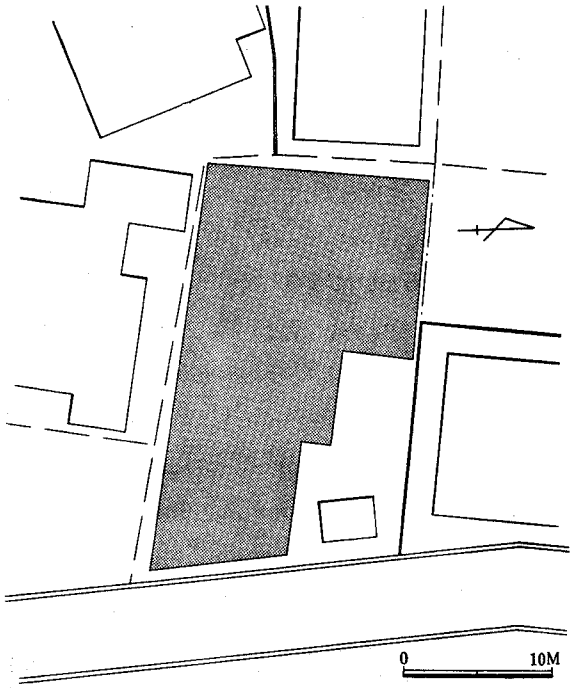


Fig. 26 調査地点現況図（縮尺1/500）

発掘調査は，昭和54年7月27日から8月23日迄の19日間実施した。排土作業の関係から対象地を南北の二区に分割して，南側より調査を順次行った。表土下約20*cm*前後で地山のローム層が露呈するが，西側の谷頭に近いところでは約15*cm*～16*cm*の黒褐色粘質の包含層が残存し，弥生時代から中世の遺物を含んでいる。西側隅には区画整理以前の切り通しの農道があって，多くの礫および遺物が含まれていた。溝1の以東は包含層および遺構面の削平を著しく受けており，遺構の検出は少なく，しかも柱穴は下底部を残すだけであったため，期間の関係から調査を最小限にとどめた。

遺構は，東側に掘立柱建物 SB 01～03を検出し，西側には溝1～3，掘立柱建物SB 04，住居跡1軒を検出した。

検 出 遺 構

住居跡 (Fig. 29, PL. 16-2)

溝1によって切られており，北東のコーナーを残すだけで，法量は不明である。平面形は方

形および長方形を呈するものと考える。残存壁高は14cm程度で，壁下には深さ13cm，幅6cm～7cmの周溝が巡らされている。遺物は細片のため時期の判断材料とはなり得ない。

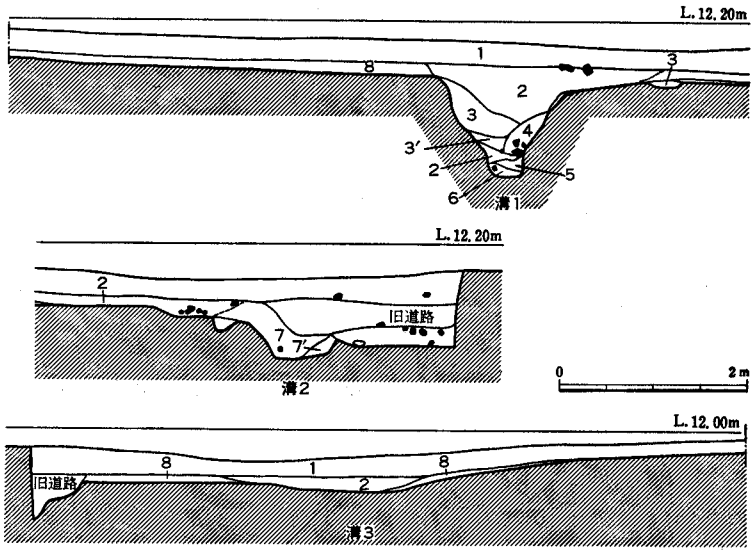
掘立柱建物

〔**SB 01**〕(Fig. 31) 調査地の東側で検出された。著しい削平を受けており，充分に柱穴を検出し得なかった。梁行2間，桁行3間の建物と考えられ，梁行，桁行ともに間柱を有している。主柱径30cm～40cm，深さ20cm，間柱径約20cm，深さ約10cmを測る。床面積約90.86m²で，約30坪程の建物と考えられる。主軸をS68°Eに定めている。時期はP10より瓦器，土師片，P12より瓦片，土師片が出土しているので中世の時代が考えられる。柱間の法量は図示したとおりである。

〔**SB 02**〕SB 01に重複して検出された。削平によって，柱穴の検出は充分ではないが，N66°E方向に配置された梁行1間，桁行2間の建物である。柱径は40cm～50cm，深さ15cmを測る。時期はP17より土師器の細片を検出しているので，古墳時代以降と考えられる。

〔**SB 03**〕SB 01の南側にあって，東西方向に配置された3本の柱列で，規模，構造は不明，柱穴径は40cm～50cm，深さ20cm，柱間約150cmを測る。

〔**SB 04**〕(Fig. 30) 住居跡の南に位置し，主軸をN11°Eに配置された建物だが，削平の



土　層　名　称

第1層　耕作土
第2層　黒褐色粘質土層（ローム粒子を多く含む）
第3層　黒褐色粘質土層（ローム粒子少ない）
第3′層　第3層のローム粒子が大きい
第4層　暗茶褐色粘質土層(ローム粒子を少し含む)
第5層　黒色粘質土層（炭化物を含む）
第6層　暗褐色土層（ロームブロックを含む）
第7層　第3層に，赤褐色土のブロック混入
第7′層　第7層に比べ明るい
第8層　地山（ローム層）

Fig. 27　南　壁　土　層　図（縮尺1/100）

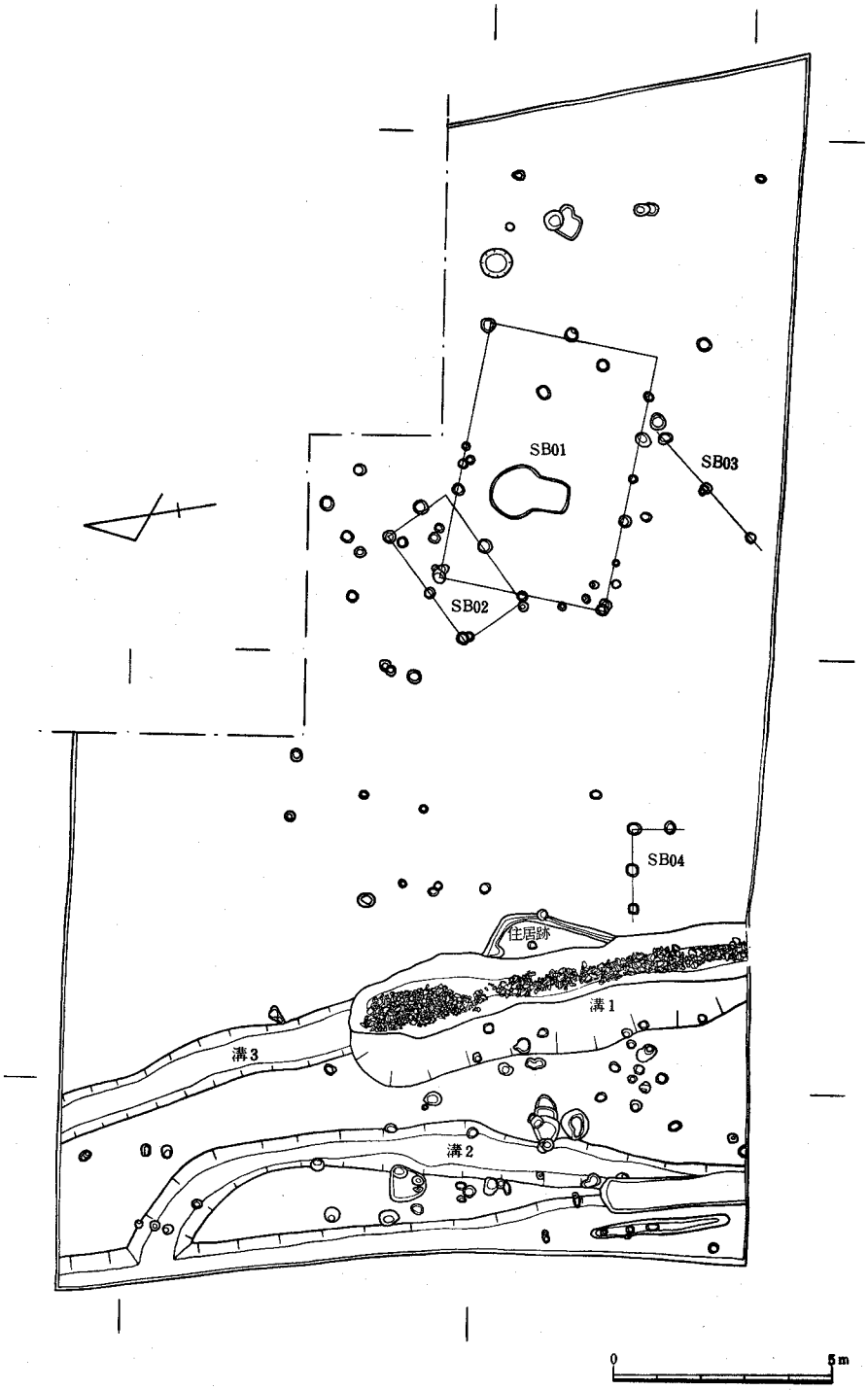


Fig. 28 遺 構 配 置 図（縮尺1/150）

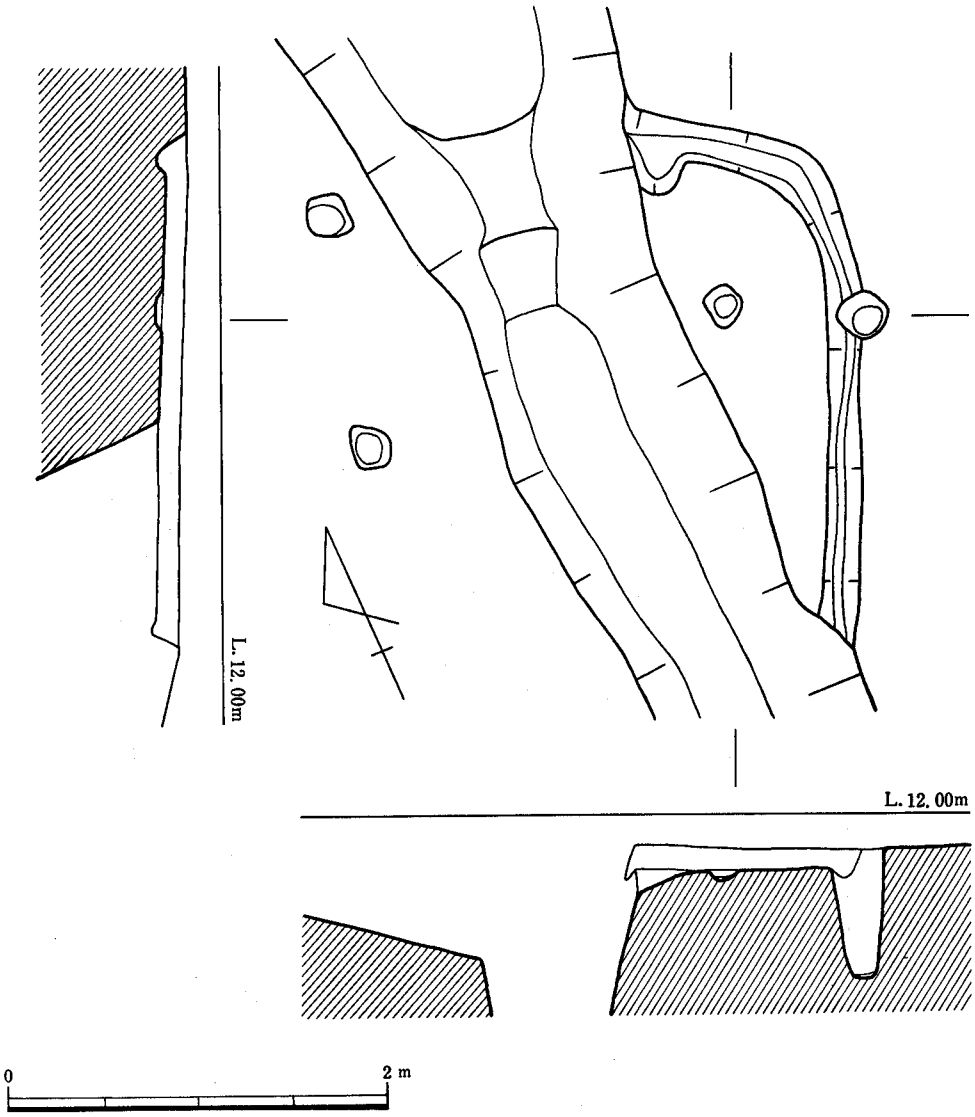


Fig. 29 住 居 跡 実 測 図（縮尺1/40）

ため，南側，或いは西方向にのびるとしか判断できない。柱穴径20*cm*～30*cm*，深さ10*cm*～15*cm*，柱間は全て90*cm*で配置されている。時期は不明。

溝

遺構面西側において，南北方向に延びる3本の溝を検出したが，機能上，直接的に結びついていた可能性がある。

〔**溝1**〕(Fig. 32, PL. 13) 幅1*m*～1.5*m*，深さ1.5*m*を測るU字状溝で，遺跡地の南方（27街区）方向より延びてきており北へ延長6*m*で袋部を形成して終る。

この溝底は北に向かって緩傾斜し，底面には礫が敷かれている。礫は，全体に荒く浮き上がっており，先端の袋部だけ丁寧に，しかも密に敷きつめられている。袋部以南の敷石の荒れは，水の流れなどにも原因するものであろうか，検討の余地がある。礫群には多くの遺物が含まれている。また，二次的に火を受けた礫が多く存在した。溝の肩を観察すると，東側は標高12*m*を測り，真直に立ち上がっているが，西側は幅 2.5*m*の緩い段落ちになり，標高10.5*m*前後の高さしかない。西側の肩のみが段落ちなのは，溝の機能に関係するものであろう。

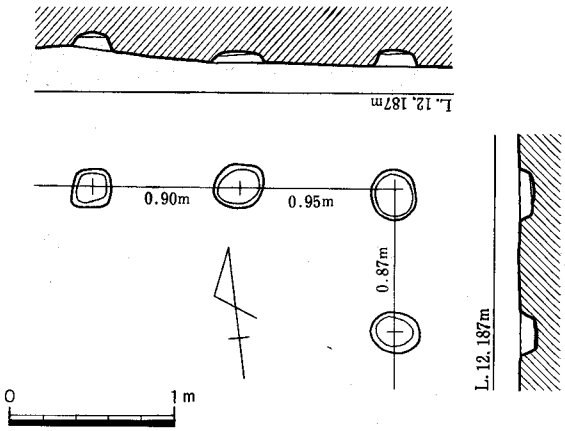


Fig. 30 掘立柱建物 SB 04（縮尺1/40）

〔**溝 2**〕(Fig. 33, PL. 11) 幅 2 *m*，深さ50*cm*を測るU字形の溝で，北へ10*m*のところでは溝幅は一旦狭まって，北西に広がりながら，谷方向へ曲る。溝内には，溝 1 と同じ黒褐色粘質土層が充塡しており，礫をまばらに含む。溝底には敷石等の施設はない。高低差もほとんどなく，同一レベルを呈している。溝の南側は近世道路によって削平を受けている。

〔**溝 3**〕(Fig. 33, PL. 11) 南北に延びる溝で，南は溝 1 の先端に接続する。切合部分が調査地の区境に相当したため，溝 1 との前後関係が明確ではないが，溝 1 の覆土同様の黒褐色粘質土層の単純層であり，溝 1 に連続する遺構の可能性がある。幅 1 *m*前後，深さ10*cm*～20*cm*程で，北へ緩く傾斜する。遺物をほとんど含まない。

出　土　遺　物

弥生時代から中世に至る各時代の遺物を含んでいるが，ここでは各遺構に関連するものや，主な遺物を選んで報告する。

溝 1 出土遺物 (Fig. 34-41)

弥生式土器

弥生時代中期に比定される高杯脚と甕形土器底部が出土している。

土師器 (Fig. 34-1, 2, 3, 4, 5, 6, PL. 17)

「杯」（1・2・3）溝の先端袋状部の礫群中で検出したもので，三例共に糸切り離し底である。1 は口径12.7*cm*，底径 8 *cm*，器高2.6*cm*を測る。2 は口径12*cm*，底径8.6*cm*，器高 2.5*cm*を測る。内外面に横ナデ調整が，内底部にナデ調整が施してある。1 は板目が残っている。やや暗い黄褐色を呈しており，胎土に砂粒を少し含む。3 は口径13*cm*，器高 3 *cm*を測る。体部は直線的

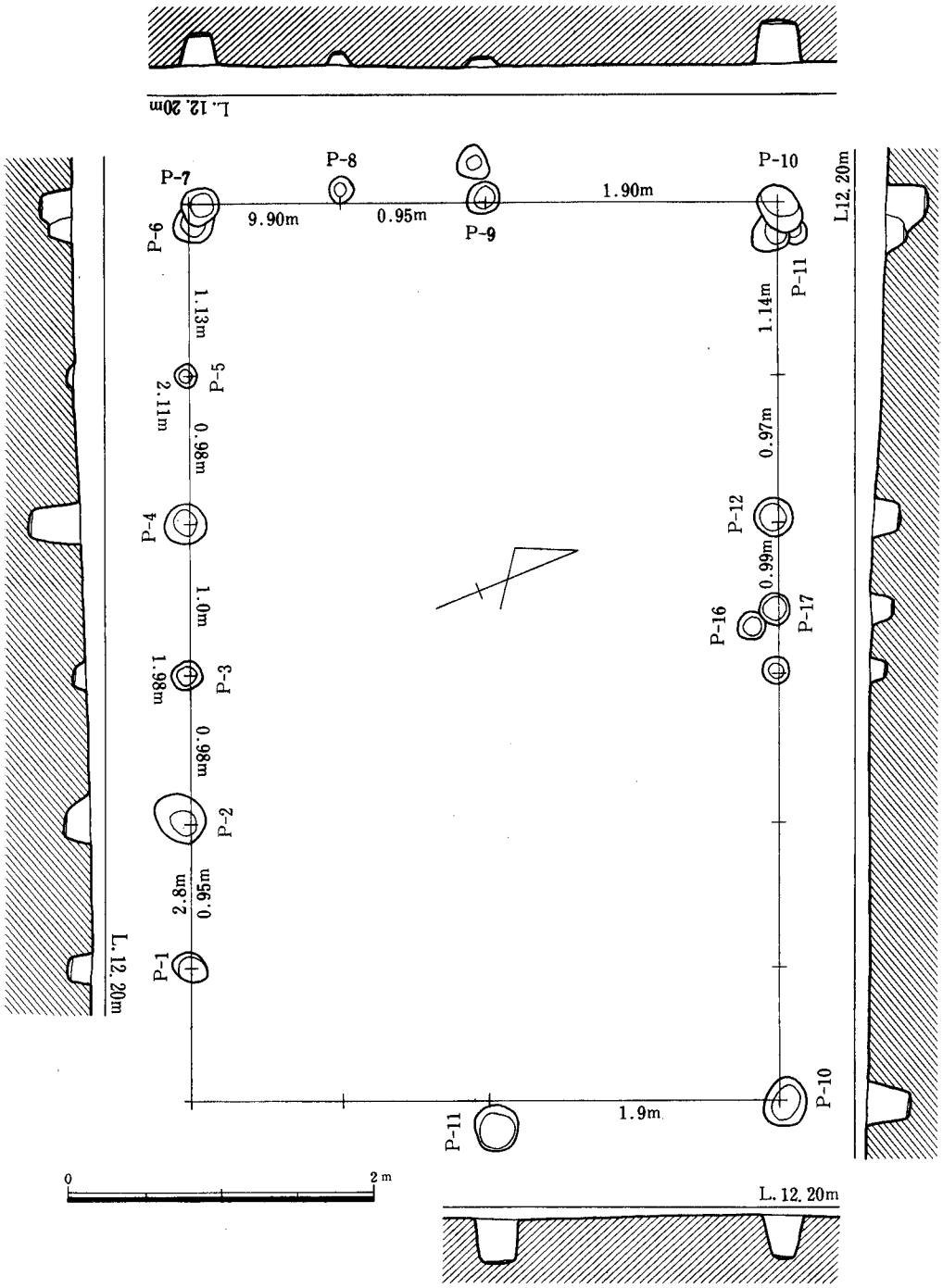


Fig. 31 掘 立 柱 建 物 SB 01 (縮尺1/40)

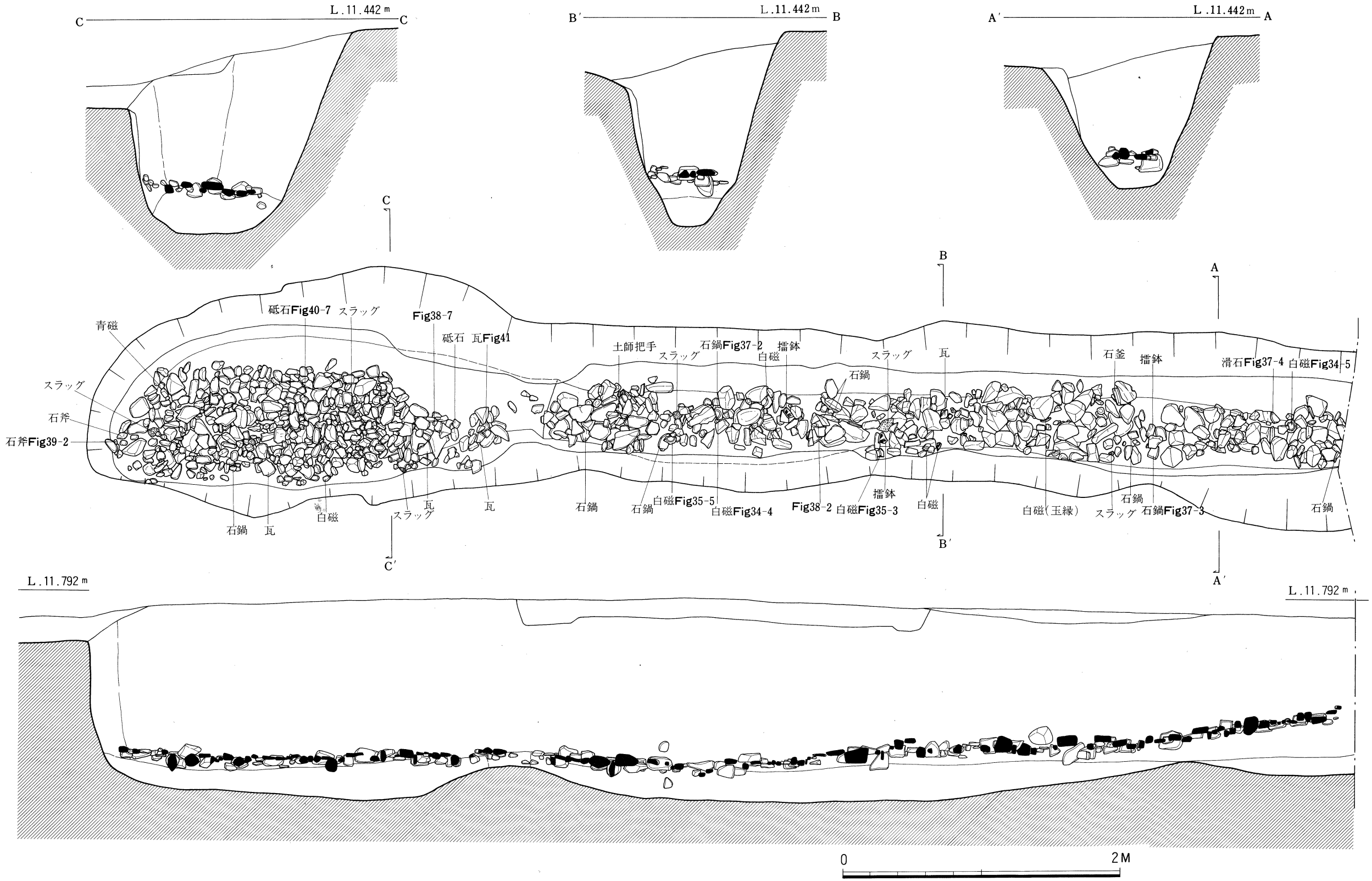


Fig. 32　溝 1　実測図　（縮尺1/30）

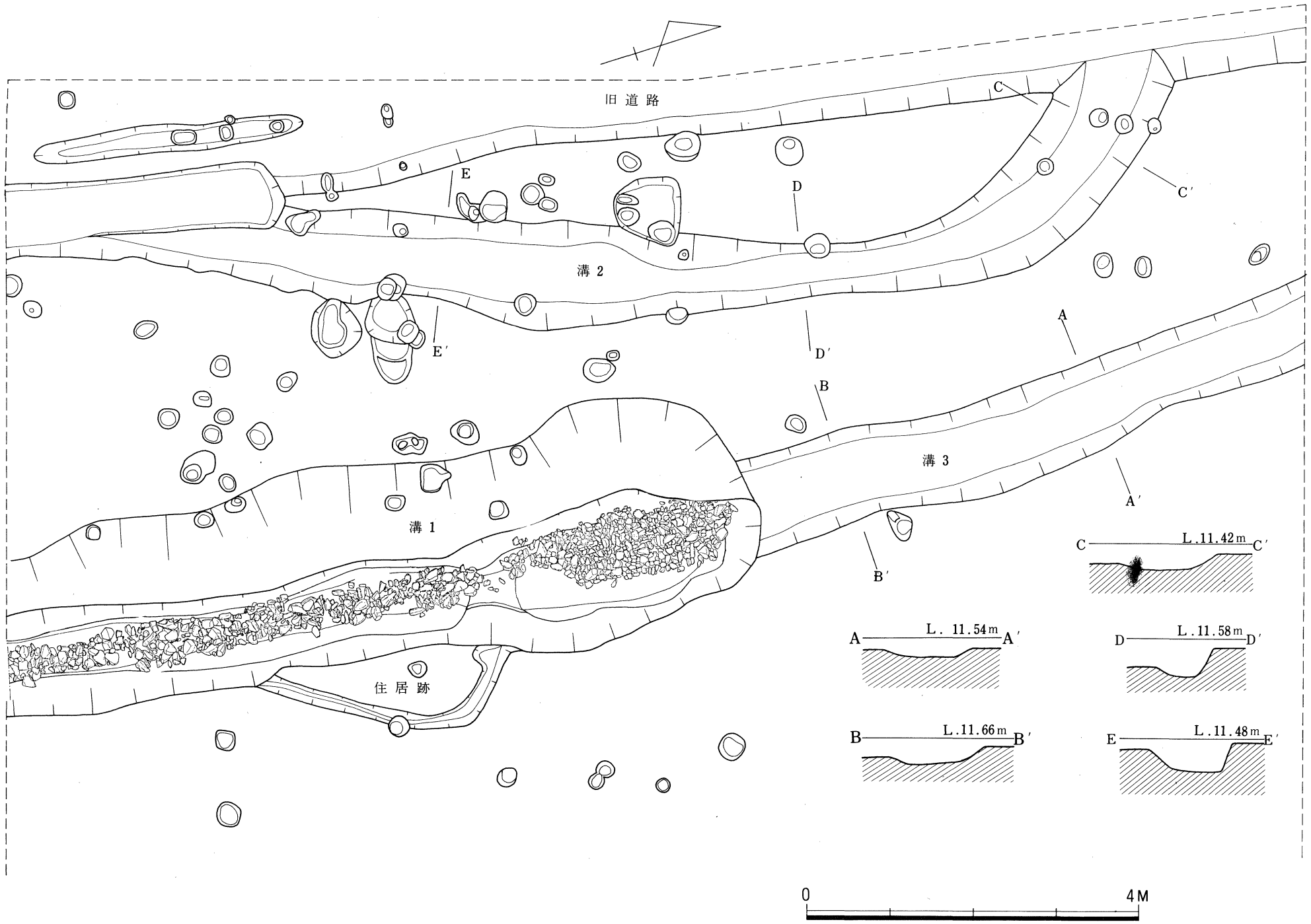


Fig. 33　溝1. 2. 3 実測図 （縮尺1/60）

に立ち上がり，口縁端部はそのままおさめる。器肉は厚い。胎土には細い砂を含んでいる。焼成は良好で，色調は暗褐色を呈する。

「皿」(4・5)　底部は回転糸切り離しである。4は口径7㎝，器高1.5㎝を測る。体部は直線的に立ち上がっている。胎土に細い砂を含む。焼成は良好で，色調は黒灰色を呈す。5は口径5㎝，器高1.9㎝を測る。胎土は精選されており焼成は良好。色調は淡い赤褐色を呈す。

「椀」(6)　口径18㎝，器高5.8㎝を測る。底は丸底をなし，ヘラ削り整形が施される。体部は丸味をもって立ち上がり，端部は小さく外反する。体部外面はヘラ研磨が施されている。内面は磨滅している。胎土は精選され，細かい砂を少し含む。焼成は良好で，体部内外面は暗い黄褐色を，底部外面は黒色を呈している。

白磁 (Fig. 34, 35, PL. 17)

「椀Ⅱ類」(Fig. 34-7・8・9・11～19)　7～9は玉縁口縁を有するもので，口径18㎝～17㎝を測る。胎土は白色を呈す。9は灰白色の釉が薄目に施され，8の施釉は体部の上半迄である。11～19は底部の破片で高台は幅広く，外面を直に，内面を斜目に浅く削り出したもので，底部の器肉も厚くなる。体部外面下半はカンナ目調整し，内面見込みに段，或いは沈線の圏線を巡らす。高台，体部下半には施釉されず，全体に薄目の施釉が行われている。口縁部は欠損しているが，大きな玉縁を持つものと考えられる。胎土は灰白色を呈し，灰白色および乳白色の釉がやや厚目に施される。17の胎土は非常に軟質で，陶質である。釉は黄灰色を呈するが，風化が著しい。16の釉はやや淡い緑色を帯びている。11，18には内外共に貫入がみられる。

「椀Ⅳ類」(Fig. 34-10, Fig. 35-1) 10は口径16㎝を測り，口縁端部で外側へ軽く屈折する。体部上位には小さな段を有している。胎土は精選されており，釉は灰白色を呈している。底部は1と同じく，高く細い高台がつくものである。1は基部の厚く高い高台を有するもので，内面見込みには段を有する。胎土は淡い褐色を呈し，胎土に多くの砂を含む。焼成は弱く陶質である。釉は灰褐色で風化が著しい。

「椀Ⅴ類」(Fig. 35-2) 内底見込みに段を有しており，段の内側の釉を環状にカキ取っている。釉はやや青味をもった灰色で，高台部分迄施されている。体部と高台の境には段を有しない。直線的に伸びる体部をもち，口縁部は先端を外方へ曲げ，端部を平坦にしたものがつくと思われる。

「椀Ⅵ類」(Fig. 35-3, 4) 高台は外面を直に，内面を深く削っている。内面見込みには段を有しており，段の内側の釉を環状にカキ取っている。体部は直線に外方へ伸び，そのまま口縁端部をおさめるものと考えられる。体部と高台との境は，明瞭な段をなしている。やや緑味を帯びた灰色釉を施す。釉は底部下位，高台には施されない。胎土は精選されている。

「皿Ⅰ類」(Fig. 35-7) 内底見込みの釉を環状にカキ取ったもので，釉はやや緑を帯びた灰色で，体部下半迄厚目に施釉される。体部から口縁部にかけてシャープな作りである。

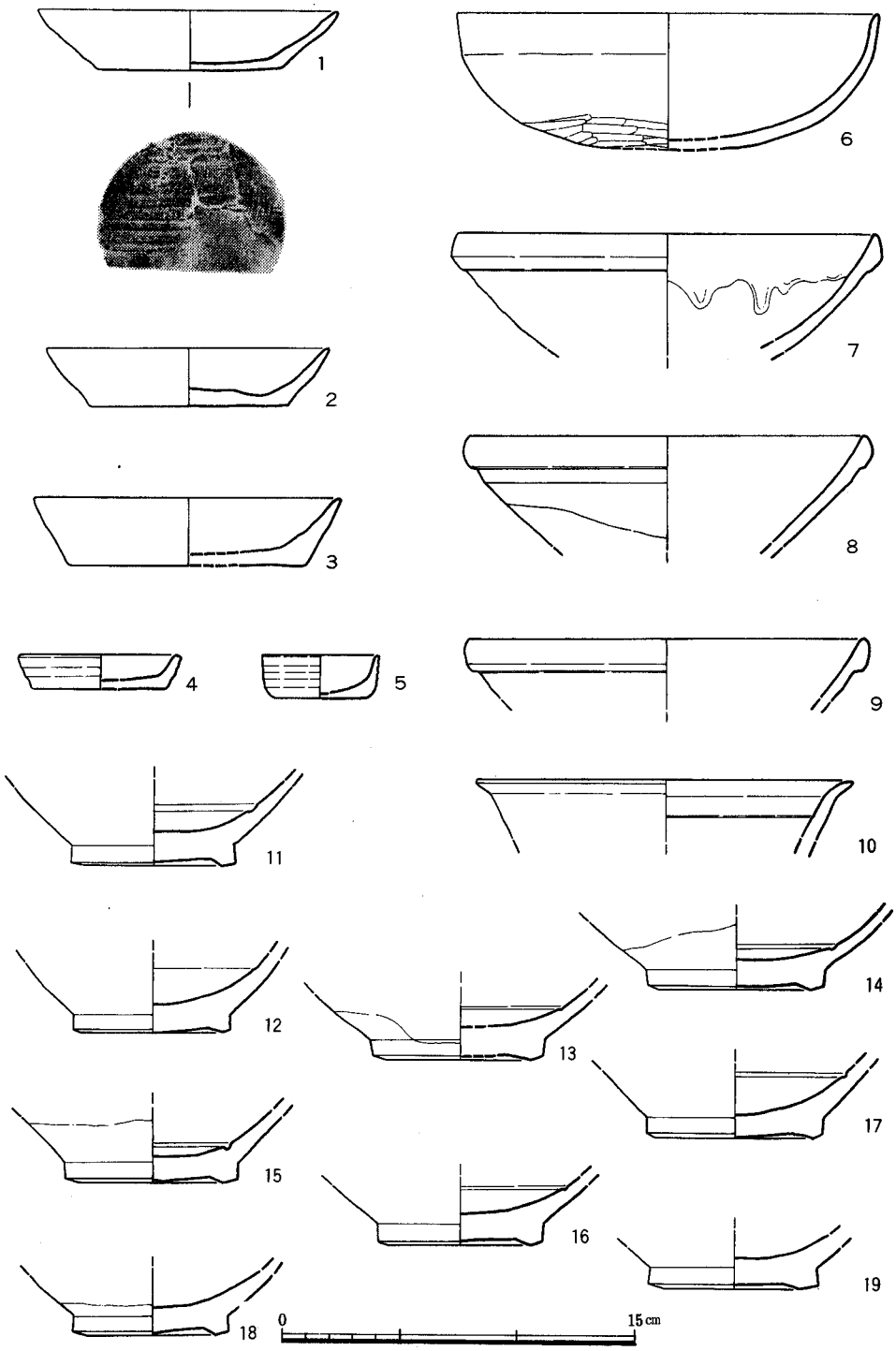


Fig. 34 溝 1 出 土 遺 物（縮尺1/3）

青磁

「椀Ⅰ類」(PL. 18-2) 細片のため図示し得ないが，太宰府の青磁分類[註3]における椀Ⅰ類2bに属する破片の出土がある。黄味を帯びた緑色釉を施される。龍泉窯系の青磁である。

その他の陶磁器 (Fig. 35-5, 6, PL. 18)

5は高台が外方へ張ったもので，体部と高台部との境は明瞭ではなく，小さな段を二つ有している。釉は灰白色を呈し，全体に施されている。釉が風化したようにもみえるが，白化粧を施されたものかもしれない。胎土は淡い赤褐色を呈し，細かい砂粒を含んでいる。陶質である。6は口径26*cm*，復元高4*cm*を測る盤である。高台のつくものと考えられる。体部は丸味をもって立ち上がり，口縁端部は玉縁の口縁を作る。釉は厚く施され，貫入が内外にみられる。釉色は明緑色で，胎土の色調は灰白色である。内面には白色の釉によって陽紋が描かれている。紋様は3～4枚単位の花弁を連続させるものである。

雑器 (Fig. 35-8, 9, 10, PL. 18)

8は幅広い高台をもつものである。外底面を除いて釉がかけられており，外面および内底面はオリーブ色を呈し，内面は釉が薄く，黄土色を呈している。外底部は，やや暗い灰色を呈する。

9は褐釉陶器で，肩衡の茶入であろう。口径6*cm*，復元高12.5*cm*を測る。肩部が強く張り，頸部はすぼまって小さく外反した口縁部をもっている。口縁端部は口ハゲである。胎土は明灰色を呈す。10は溝1の覆土より出土。高台内面の削りは深いが，外面の削りは緩やかで，小さな屈折を持つ。底部外面を除き灰緑色の釉が厚目にかけられる。胎土精良で，焼成は堅い。

日本製陶器 (PL. 19-9)

備前焼と思われる甕の破片が，4点出土しているが，図示し得ない。

瓦器 (Fig. 35-11, 12, 13, PL. 7, 8)

11は内面が淡黒色，外面は黄灰色を呈しており，表面は磨滅している。11・12は三角形の高台を，13は角のとれた「コ字形」の高台を貼りつけている。12・13は外面に横ナデ調整を，内面には研磨が施されている。内面は黒灰色を，外面はやや暗い灰色を呈す。13の焼成は良好で，胎土には砂粒を含まない。11・12の底部は同心円上に削り調整を施し，その後，三角形の高台を貼付けている。

瓦質土器 (Fig. 35-14, 16, Fig. 36-1～5, PL. 19)

14は擂鉢の底部である。外面は指圧成形痕を残し，ナデ調整をされる。内面体部は横方向のハケ目調整の後，4本単位の櫛工具による縦方向の櫛目が入る。胎土に大粒の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で，内外面共に黄灰色を呈す。16は土釜の耳である。体部への貼付け後，穿孔を施す。内外面共にナデ調整を施す。胎土に細い砂粒を含んでおり，焼成は良好。外面は黒灰色，内面は暗黄灰色を呈す。Fig. 36—1・2・3・4は片口である。1・2は擂鉢である。1は口径25.5*cm*，復元高11*cm*を測る。片口部分は欠損しており，口縁端部は肥厚する。外面には指圧痕が

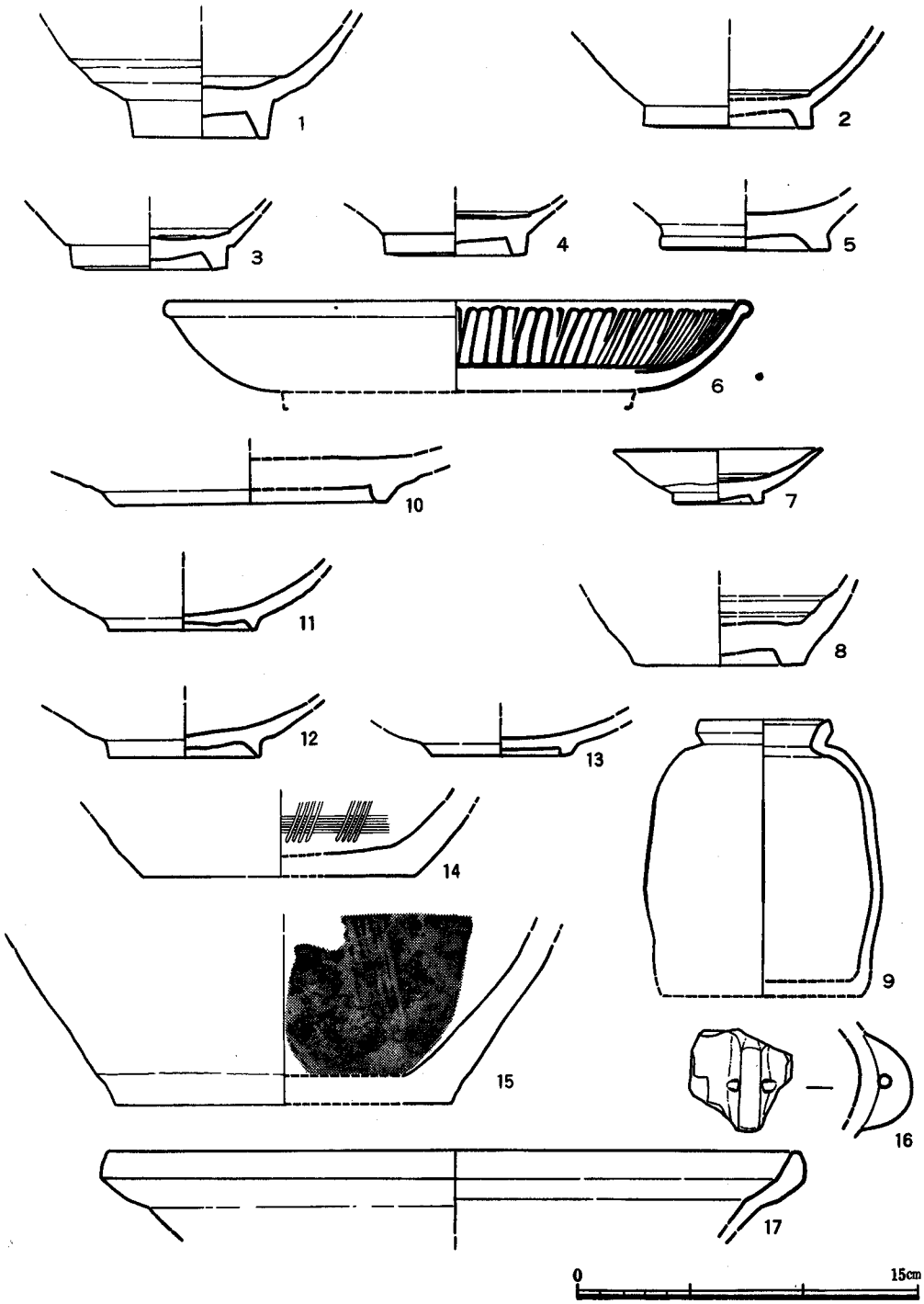


Fig. 35　溝 1 出 土 遺 物（縮尺1/3）

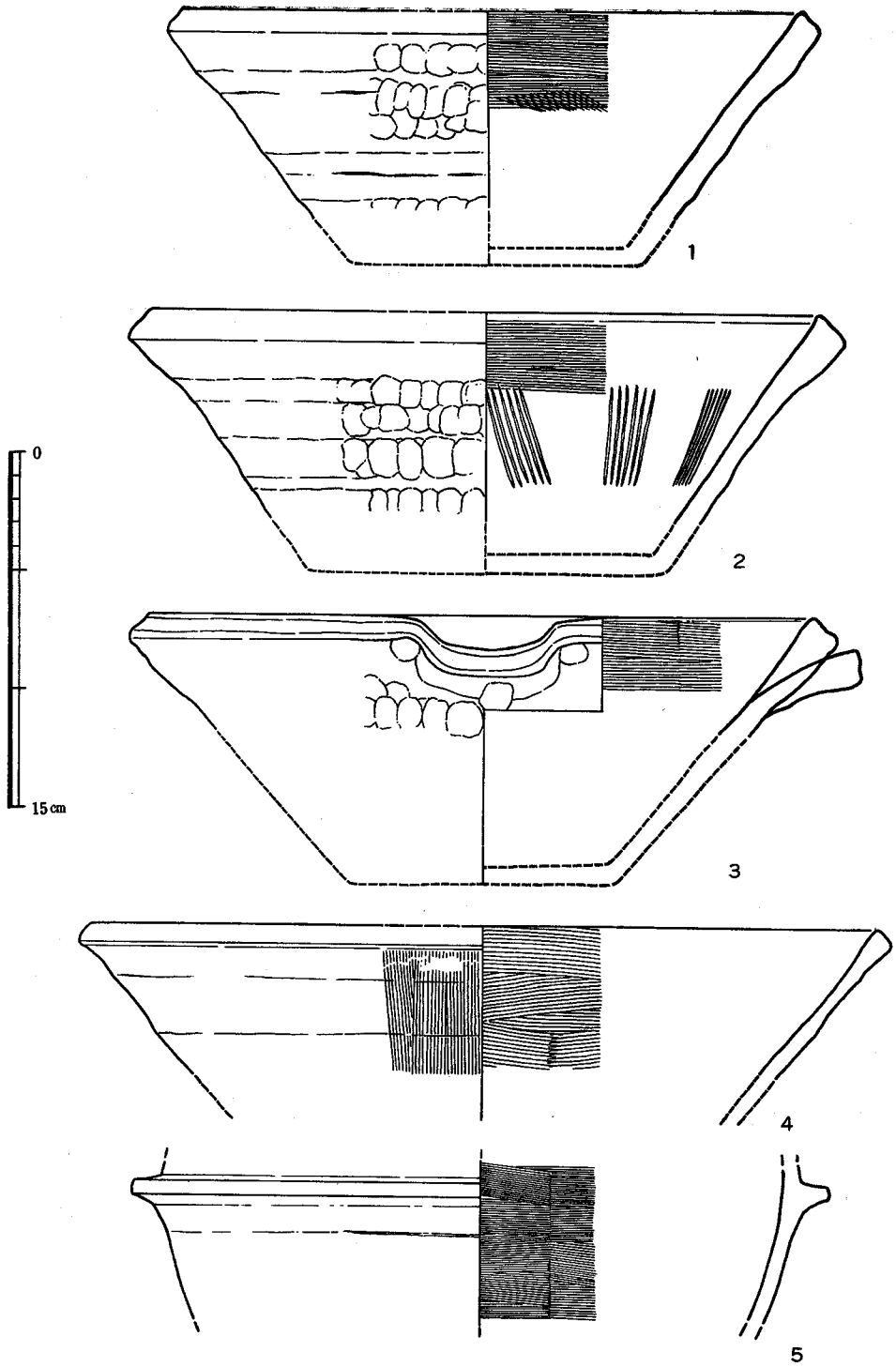


Fig. 36 溝 1 出 土 瓦 質 土 器 (縮尺1/3)

残っており，ナデ調整を行う。内面上位は横方向のハケ目調整痕を残し，下方はナデ調整を施している。胎土に大粒の砂を含む。焼成は弱く，内面は桃灰色，外面は黄灰色である。2は口径28cm，復元高11cmを測る。やはり片口部分を欠失している。口縁，口唇部は肥厚し，外面はナデ調整を行う。内面上位は横方向のナデ調整を施し，内底部から体部上位に縦方向の荒い櫛目を施す。この櫛目は5本を単位とする。内外面共に黄灰色を呈す。外面下部に煤が付着。3は口径30cmを測る。内面上位には横方向のナデ調整を施し，外面は指圧痕を残して，ナデ調整が施されている。内外面共に黄褐色を呈し，外面の一部には煤が付着している。4は口径34.5cmを測る大きなもので，片口である。器肉は薄く，端部は肥厚する。外面は縦方向のハケ目調整を，内面は横方向のハケ目調整が施される。磨滅しており，内外面共に黄灰色を呈す。5は直口した口縁を有し，口縁下に鍔を貼付けた器形である。鍔部分の径は29.5cm，復元口径27cmである。内外共に横方向の細いハケ目調整が施される。胎土に大粒の砂粒を多く含む。焼成は良好で，内外共に黒灰色を呈す。

須恵質土器 (Fig. 35-15, 17, PL. 19)

15は擂鉢の底部である。体部より直線的に立ち上がる。内外共に横ナデ整形を施すが，器面の凹凸は著しい。器肉は厚い。内面には幅2mm～3mmで6本単位の浅い櫛目が施される。胎土に大粒の砂粒を多く含み，焼成は堅緻である。外面は茶褐色，内面は灰青色を呈す。17は片口である。口径31cmを測る。内外面共に横ナデ調整で，指圧痕を消している。口縁端部は硝子質化している。胎土に砂粒を含む。内外面共に灰色を呈し，焼成は堅緻。

滑石製品 (Fig. 37-1, 2, 3, 4, 5 Fig. 38-1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, PL. 20)

「石鍋」(Fig. 37-1, 2, 3, 4, 5 Fig. 38-1, 2, 9) 形態は瘤状把手付2例，鍔付3例，縦長の把手付1例が認められ，総個体数29個である。

1は口径32cm，器厚1.3cmを測る。外面は規則的な削り痕が残っており，内面は削り痕を残さない丁寧な仕上げである。2・3は石鍋の底部であるが，外面は縦長の規則的な削り痕を残し，底部も削り痕を残す。内面は丁寧な仕上げである。2の底径は17cm，器壁1cmを測る。胴部下位に2個，底部に1個の穿孔があり，これらは対をなすものであろう。孔径8mmを測る。胴部の穿孔は把手，或いは蓋との関連をもつものだろうが，底部穿孔は，再生利用の可能性が強い。下部には煤の付着がみられる。3は底径13.5cm，器厚1cmを測り，瘤状の把手をもつ。体部下位に把手をつけた形態だろう。或いは器高の低いものかもしれない。底部は黒く焼けている。4・5は底部を失っているが，口縁が内彎する形態をもつ。外面は縦長の規則的な工具痕を残し，5は内面丁寧な仕上げである。4は口縁端部内側に削り痕を残している。把手は鍔以外のものが考えられる。底部は，3のように把手が下位にあるものが接続するだろう。Fig. 38-1は瘤状把手である。器厚1.2cm，把手の高さ2.5cm，幅4.5cmを測り，四角錘形に削り出している。材質が悪く気泡が多い。2は縦長の把手の破片で，器厚1.7cmを測る。外面は規則的な削

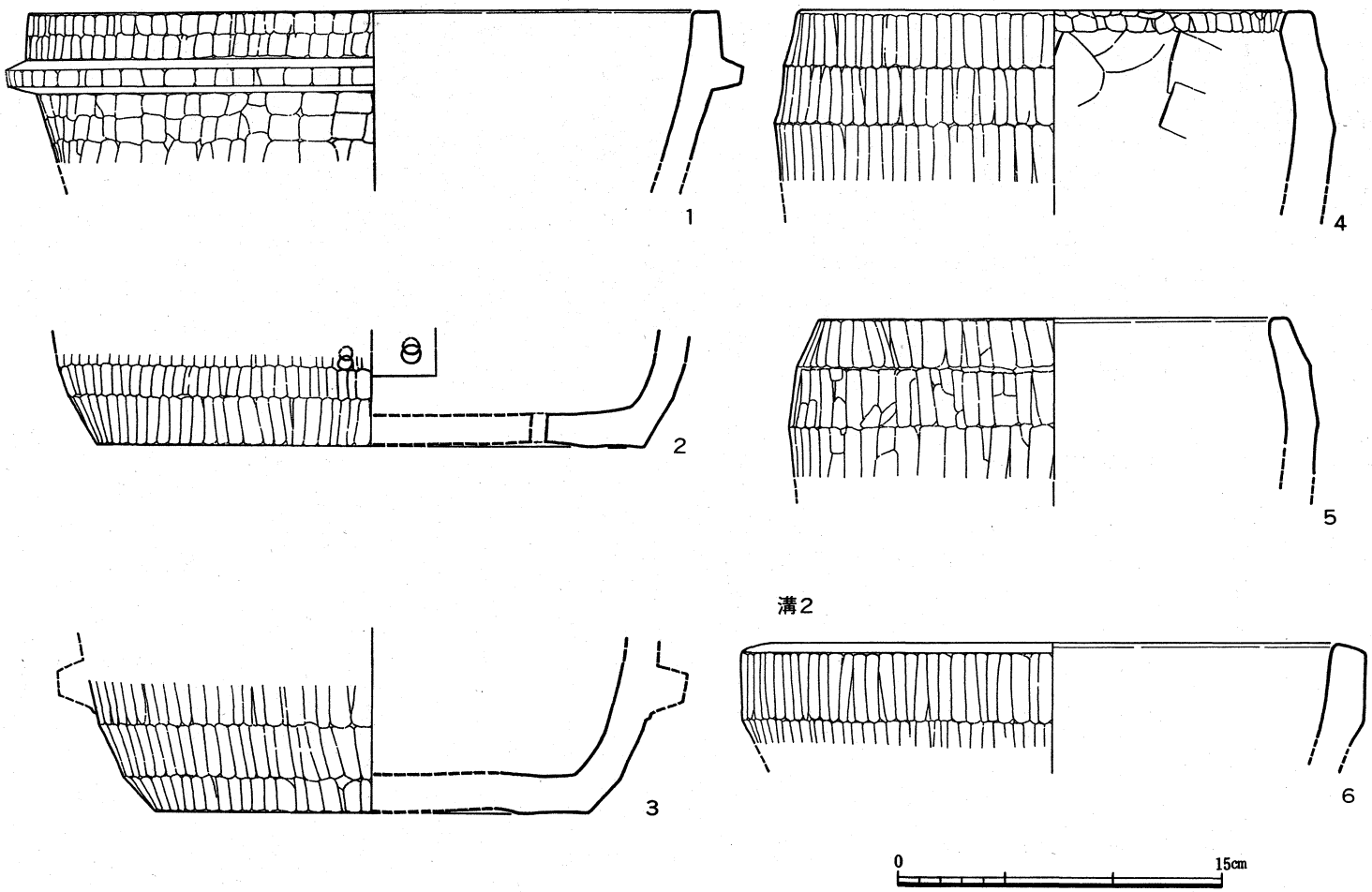


Fig. 37　滑　石　製　品（石鍋）（縮尺1/3）

り痕を残し，内面は丁寧な仕上げである。把手は幅2.7cm，長さ7cm，厚さ2cmを測る。9は明灰色を呈す。鍔は細く高い。内外共に丁寧な仕上げである。

「滑石製品特殊品」(Fig. 38-3,4,5,6,7,8) 3は石鍋蓋である。復元径19cmを測り，4ヵ所に2個ずつ孔を有する。器厚1.4cm，身受けの厚さ0.8cmを測る。周縁部分は1.5cm～2.0cm幅で，厚さは蓋の中央部分より0.3cmほど薄くしてある。この周縁には中心に対し放射状の細く縦長の工具痕を残す。端部の削りも細かい。中央部および裏面は丁寧な仕上げである。4は石鍋底部の破片で，外面は削り痕を残している。底面に径6mmの穿孔がある。孔以外の加工はなく，再加工中途と考えられる。5は厚さ1cm，孔径6mmを測る。A・B面の削りは完了していないが，側辺は丁寧に削りを施している。6は石鍋の口縁部破片で，復元形は内彎する口縁をもつ器形であろう。厚さ1.5cmを測り，径8mmの穿孔を施す。A・B面共に丁寧な仕上げで，側辺は口縁に直交する一辺のみ加工を行う。7は石鍋の口縁部破片を用い，片方の側辺を面取りしている。外面は縦長の削り痕が残り，内面は丁寧な仕上げである。外面の一部に鋭い刃物の痕が残る。8は石鍋の口縁部破片である。口縁はやや内傾する器形をもつもので，口縁直下に，径8mmの穿孔がある。外面は縦長の削り痕が残り，内面は丁寧な仕上げである。

石器類 (Fig. 39,40, PL. 21,22)

4・9・13を除き全て敷石内出土。1・2共に玄武岩製である。柱状礫を利用した磨製石斧の未成品である。1は現存長11cm，幅8cm，厚さ5cmを測り，基部は欠損している。A面は刃部，及び両側辺の打撃調整は細かく施される。B面は刃部及び左側辺におおまかに調整を加えるだけである。側辺の一部に敲打痕がみられる。2は大型蛤刃をもつ石斧で，刃部は欠損している。現存長11.7cm，最大幅6.3cm，最大厚3.8cmを測る。刃部の幅が大きな形態である。全面に敲打痕を残しており，全面の研磨は完了してはいない。使用によって刃部を欠損したものだろう。3は玄武岩の剝片である。長さ12cm，最大厚1.3cmを測る。B面には打瘤を残している。縁辺には打撃痕が残っており，未成の段階と考えたい。4・6は蛇紋岩製の石斧である。4は長さ10.5cm，最大厚2.5cmを測る。刃部は蛤刃を形成し，その幅は基部の2倍に相当する。A・B面共に入念な研磨が施されているが，側辺部の研磨作業は行われていない。使用も可能だが，刃部の研ぎ出しは完了していない。5は小型蛤刃石斧の未成品である。長さ8.5cm，最大幅3.7cm，厚さ1.5cmを測る。A・B面及び縁辺に敲打痕，剝離痕を残しており，研磨は完了していない。研磨は縦方向であり，基部は未整形である。刃部は研ぎ出しを始めている。基部に比べて刃部幅が広い蛤刃である。6は粘板岩製の石鎌である。現存長14.3cm，幅4.75cm，背部の厚さ0.9cmを測る。基部は欠損し，表面も著しく磨滅風化している。背部はやや丸味をもつが，体部との境は稜をなす。刃部は片刃で幅広く，緩やかに内彎する。7は中粒砂岩製の砥石である。不整方形に形作られたもので，6面が利用されている。長さ11.7cm，厚さ4cmを測る。一部欠損している。全面に敲打痕が残っており，特にA面の中央部分に集中するが，これは整形時の敲

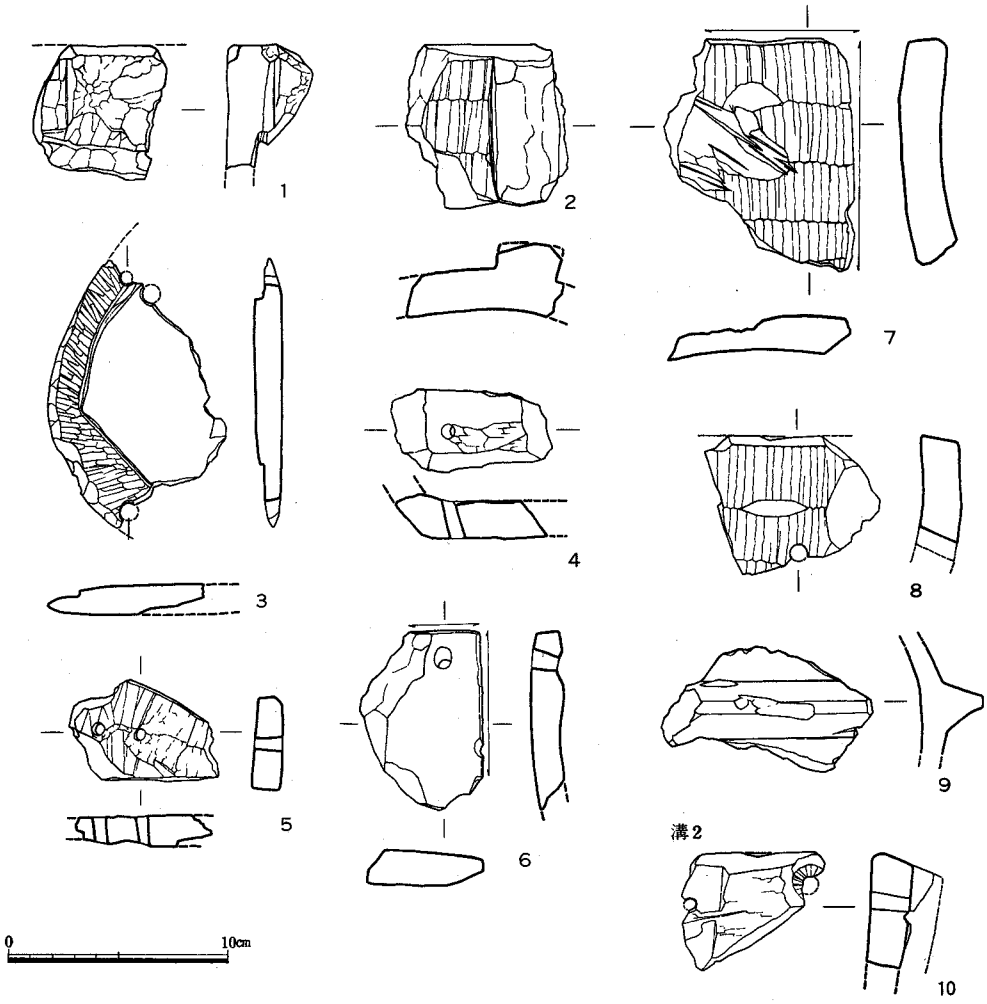


Fig. 38 滑　石　製　品（石鍋他）（縮尺1/3）

打痕とみて良いだろう。8は長さ7.5cm，幅2.5cm，厚さ2cmを測る。粘板岩質の石材を用い，方柱状の形態を示す。荒成形のままで，A面は研磨を施す。研磨面はやや内弯し，強い条痕を残す。柱状石斧の未製品の可能性も残るが，条痕等のあることから，一応砥石として報告する。9は溝の上層出土。中粒砂岩製である。現存長5.5cm，幅6.7cm，厚さ2cmを測る。下半を欠損しいるが，A・B面側辺共に面取りを行ない，研磨を施す。A面は断面凸状をなし，研磨使用される。B面は研磨は荒く，中央に敲打痕が残っている。砥石として利用されたものだろう。10は硬質砂岩製である。現存長11cm，現存幅9.3cm，現存厚5.3cmを測る。自然礫の2面を砥石として利用している。二次的に火を受け，欠損，剝離が著しい。11は硬質砂岩製である。現存長7cm，現存幅5cm，現存厚4.5cmを測る。自然礫を利用したもので，礫の平坦面は研磨を受けている。10

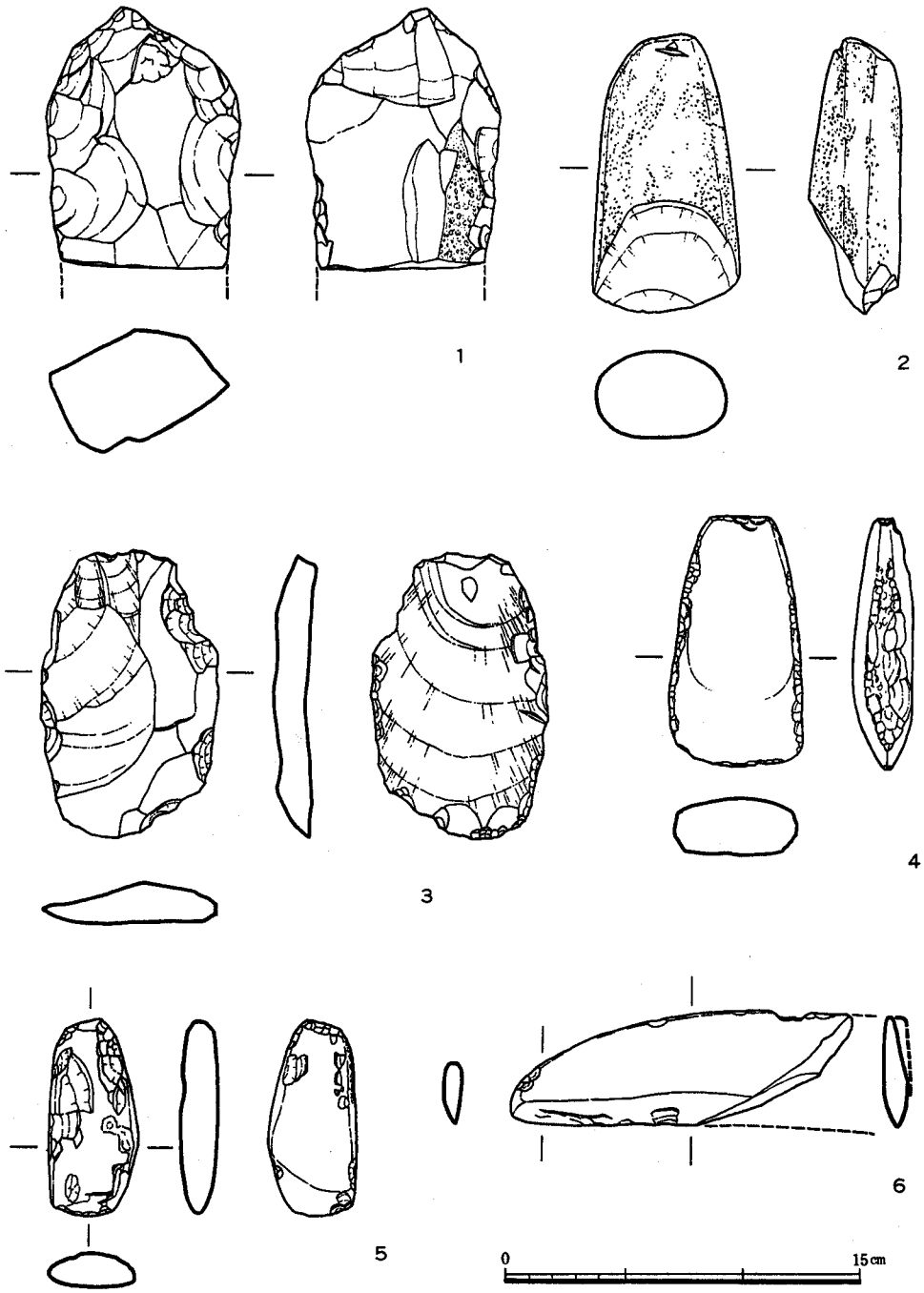


Fig. 39　溝 1 出 土 石 器（縮尺1/3）

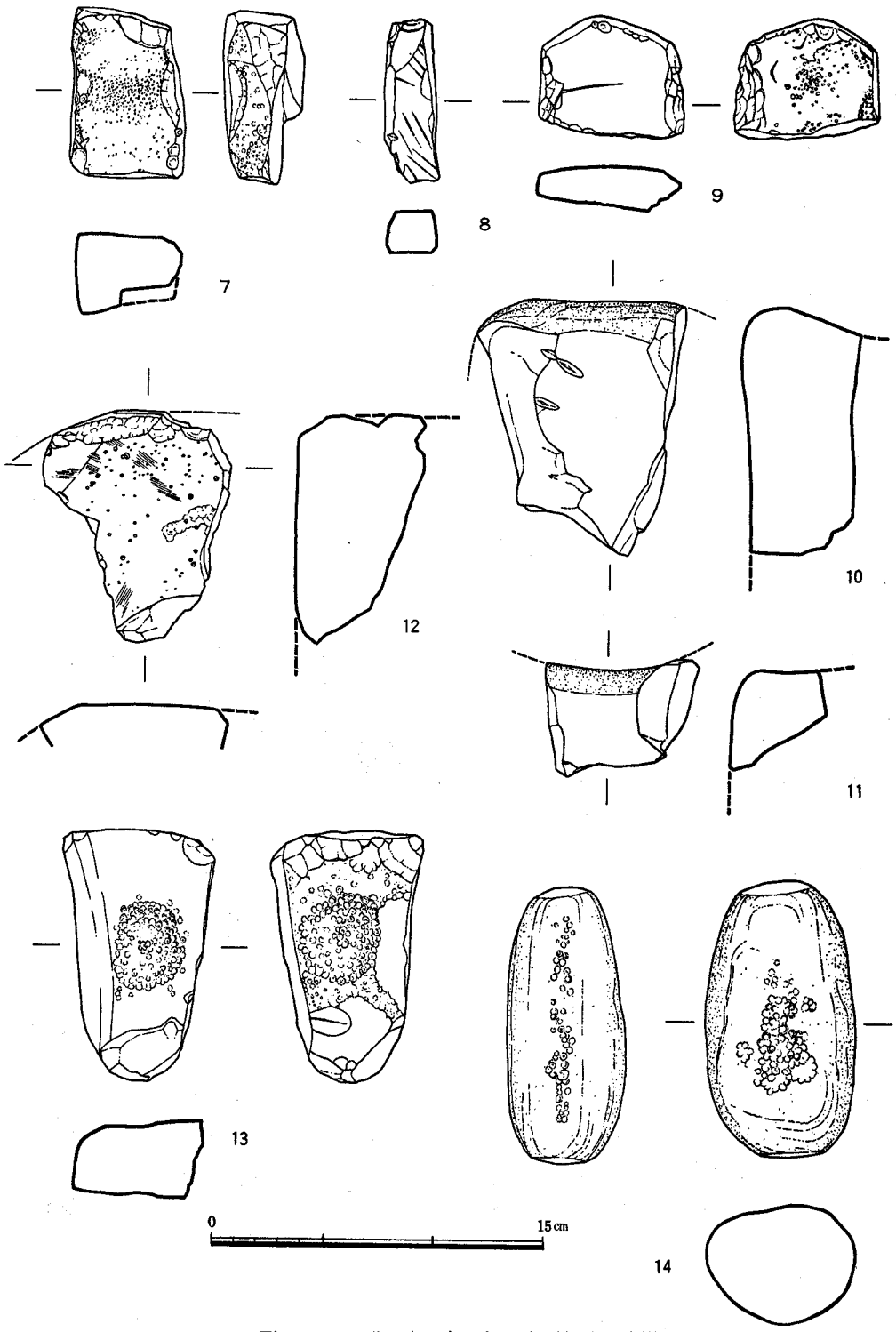


Fig. 40　溝 1 出 土 石 器（縮尺1/3）

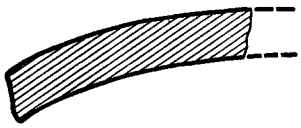
と同一個体と考えられる。12は硬質砂岩製で気泡が多い。A面と上側面の2面が研磨を受けている。二次的に火を受け，黒変する。砥石として利用されたものか，用途は検討の余地がある。13は溝底出土。中粒砂岩で，長さ11.5cm，幅7cm，厚さ3.5cmを測る。4側面の面取りも行われている。A面及び左側面は砥面として利用され，中央部が凹面をなしている。B面は研磨は完了していない。A・B面共に敲打が中央に集中しており，くぼみ石としても利用されている。

14は玄武岩質の自然礫を利用した擦り石である。長さ12.7cm，最大幅7cm，最大厚5.5cmを測る。平面は楕円形，断面は不整円形を呈す。上下の先端部は平坦に擦り減っており使用が認められる。A・B面の側辺は手擦れによる磨きがかかっている。A面の中央部には敲打痕が集中し，ごく浅い凹みをつくるので，くぼみ石としての利用も考えられる。側辺に敲打痕がわずかに残ることから部分的に整形を施したのであろう。

瓦類 (Fig. 41, PL. 19)

溝1の覆土及び底より9点の瓦が出土。いずれも細片である。Fig. 41 は破片のため長さ，幅共に不明だが，厚さは2cmを測る。凹凸面共に丁寧なナデ仕上げが施され，糸切痕，叩痕は残っていない。ナデ調整の方向は不明。側辺は削りによる面取りが丁寧になされ，凹面の先端は，斜めに浅く，3cm～4cm幅で面取りが行われる。削り後はナデ仕上げを施す。凸面には細い砂粒が多く付着する。色調は暗褐色を呈し，焼成は良好である。胎土には1mm～5mm程度の砂粒を多く含んでいる。凸の磨滅著しい。

その他数点の平瓦片が出土しているが，いずれも同様な形態と思われる。



溝2　出土遺物

土師器

杯，皿，椀の細片が出土しているが図示し得ない。

須恵器 (Fig. 42-1)

「杯身」口径15.5cm，器高3.5cmを測る片口の杯である。体部は丸味をもって立ち上がり，端部は内反する。内外共に横ナデ調整が施される。胎土には砂粒を含み，焼成は堅い。淡い灰褐色を呈す。

白磁

「椀Ⅱ類」(Fig. 42-3) は体部下半

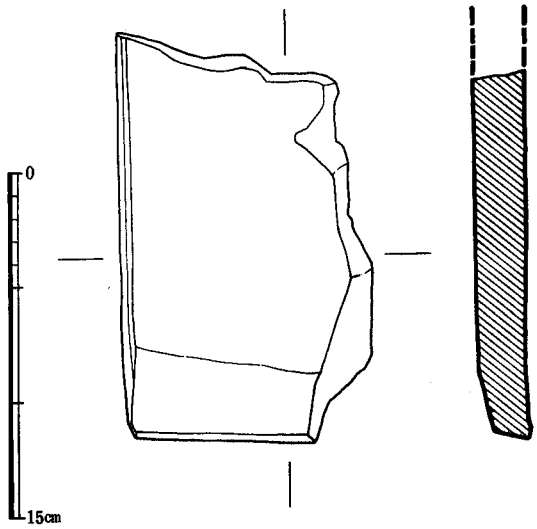


Fig. 41　溝1出土　瓦（縮尺1/3）

に削り調整が施される。高台の外面を直に，内側を浅く削るため器肉が厚い。釉は高台を除いて薄くかかる。胎土は良質であるが，焼成は軟質である。釉は黄白色を呈す。

「椀Ⅲ類」(Fig. 42-2) は玉縁口縁の椀で，口径15cmを測る。胎土は良質で灰白色を呈す。釉は緑味を帯びた乳白色を呈す。削りの深い高台がつづくものである。

「椀Ⅳ類」(Fig. 42-4) は高く長い高台をもつもので，内面見込みには段を有する。外面は高台迄化粧土がかけられ，青味を持った灰白色釉が，高台を除いて施される。胎土は，良質で灰白色を呈している。外面には貫入がみられる。口縁端部が小さく外反する口縁をもつ器形である。

「椀Ⅶ類」(Fig. 42-6) の胎土は黄白色を呈し，良質の胎土である。焼成は軟質である。体部外面はカンナ目調整される。高台外面は，体部との境で外へ張り出す段を有す。内面は浅い削りである。釉は黄灰色を呈し，体部下半には施されない。内面に貫入がみられる。

「椀Ⅷ類」(Fig. 42-7) の胎土は良質で，乳灰色を呈する。体部は削り整形された後，青味をもった白色釉をやや厚目に，全体に施している。高台は細く，畳付は，やや尖がり気味のものだろう。内底部が環状に釉をカキ取られている。

青磁 (Fig. 42-5, PL. 18-1)

「椀Ⅱ類」いわゆる龍泉窯系の青磁である。低い高台を有し，高台の内側は平坦で胴部はやや丸味をもつ。胎土は灰青色で良質である。釉は黄味を帯びた濃緑色で，高台迄施される。内底部にはヘラで飛雲状文が描かれる。

「椀Ⅳ類」(Fig. 42-8) の胎土は良質で釉は黄味を帯びた暗い緑色を呈す。釉は全体にやや厚めに，高台は薄く，畳付部はかき取られている。見込みに沈線を巡らす。高台は細く，畳付部はやや丸味を持っている。

瓦器 (Fig. 42-9, 10)

胎土は良質で焼成は弱い。底部は三角形の貼付高台である。9は内外面共に暗灰色を呈す。10の内面は黒灰色を呈し，研磨が施されている。外面は灰色を呈し，全体に磨滅している。

滑石製品 (Fig. 37-6, Fig. 38-10)

「石鍋」(Fig. 37-6) 口径29cmを測る。やや外開きの口縁で，端部は丁寧に面取りされている。外面は縦長の工具痕を残す。内面は丁寧な仕上げである。

「石鍋再生品」(Fig. 38-10) 縦長の把手をもった口縁部破片である。復元器形は口縁部が内傾するものである。口縁下に径6mmの穿孔がある。この孔に対して，把手の破損部分に抉りが施される。孔と抉りは対として利用されたものであろう。内外共に丁寧な仕上げである。

瓦類

平瓦，丸瓦の破片である。6点出土している。破片のため図示し得ないが，溝1・2と同じつくりのものがある。

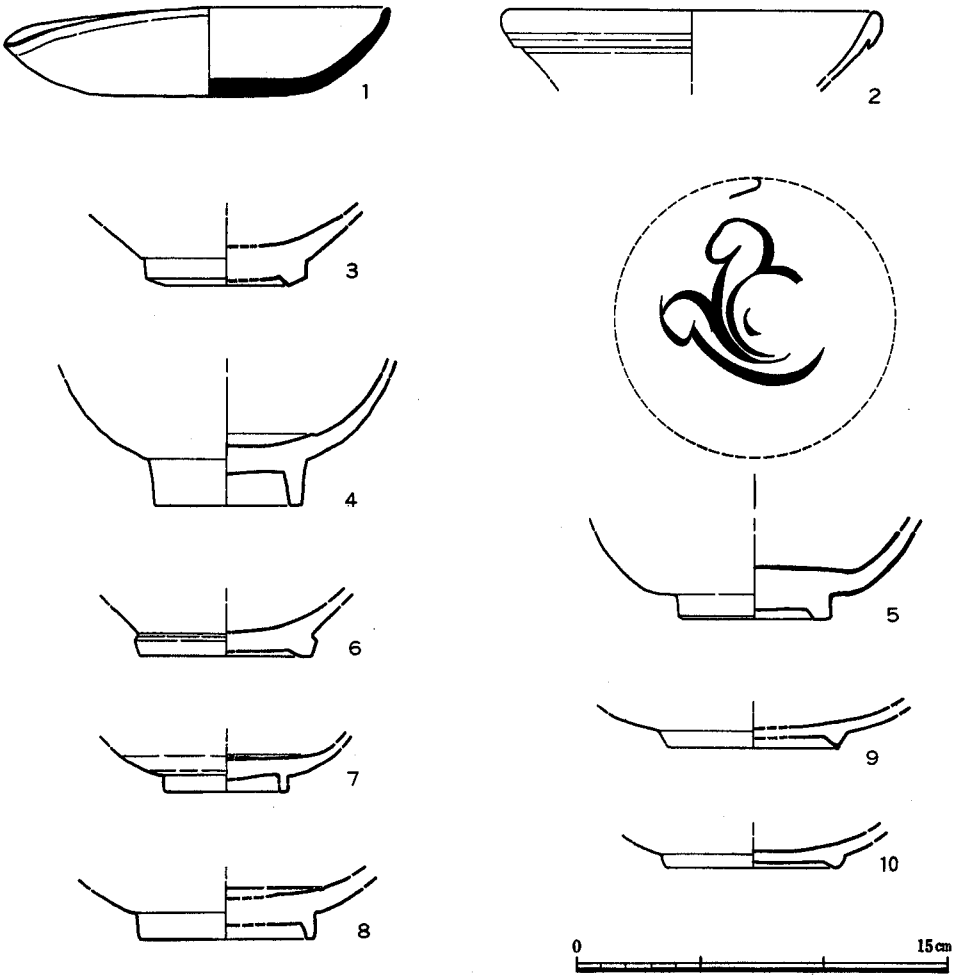


Fig. 42　溝 2 出 土 遺 物（縮尺1/3）

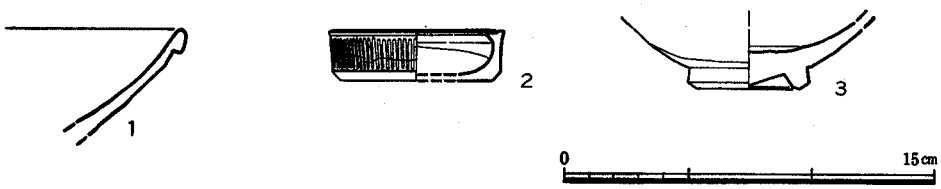


Fig. 43　包含層及び pit 出土遺物（縮尺1/3）

包含層出土遺物 (Fig. 43)

白磁

「椀Ⅰ類」 (Fig. 43-1) P28より出土。小さな玉縁口縁を作るもので，胎土は良質である。釉は灰白色を呈す。削りが深く，器壁の薄い高台が接続するものであろう。

「椀Ⅵ類」 (Fig. 43-3) 体部に削り調整がなされ，高台を除いて，灰色釉が施される。無文で，内底面には環状に釉の描き取りがなされている。高台内面の削りは深く抉り込まれる。畳付部は両端を削り落とされ，先端が尖がる。

合子 (Fig. 43-2)

身である。口径7㎝，器高2㎝を測る。胎土は灰褐色を呈し，良質である。体部外面には縦方向の沈線が施される。内面には黄味を帯びた灰褐色釉を体部下半に施し，外面は黄緑色釉を体部上半に施す。焼成は良好。胎土は精選されているが，陶質である。

その他の出土遺物

鉄滓

溝1－9点，溝2－3点，表土及び包含層より3点出土している。

小　　結

溝1・2・3の機能については，今後の調査を待たねばならないが，溝1・2・3の時期差はほとんど無く，出土した土師器，瓦質土器，瓦から検討すれば，14～16世紀の年代幅が考えられる。

白磁，青磁の分類は資料の増加を待って検討の余地があるが，以下のように太宰府の分類に[註1]対称する。白磁椀Ⅰ類→Ⅲ，Ⅱ類→Ⅳ1a，Ⅲ類→Ⅳ2a，Ⅵ類→Ⅴ2a，Ⅴ類→Ⅷ1，Ⅵ類→Ⅷ2，皿Ⅰ類→Ⅲに相当する。青磁椀Ⅰ類→Ⅰ2，椀Ⅱ類→Ⅰ4bに相当する。

石鍋は石材，製法，器型から幾つかに分類できる。石材から見ると①灰黒色を呈し，気泡の無いもの，②暗灰色を呈し，気泡の多いもの，③淡灰緑色を呈し，砂質的なもの，④明灰色を呈し，気泡の無いものがある。製法からみると，Ⅰ．内外共に丁寧な仕上げを行うもの，Ⅱ．内面は丁寧に仕上げ，外面は規則的な縦長の削りを残すもの，Ⅲ．不整方形の削りを残すもの，Ⅳ．不規則な削りものがある。器形は，A．鉢状に口縁が開くもの，B．口縁が内弯し，丸い体部をなすもの，さらに把手は，a．口縁直下に鍔をもち細く高いもの，a′．口縁直下に鍔をもち厚く台形のもの，b．方形の把手をもつもの，c．縦長の把手をもつもの，d．体部の中，下位に鍔をもち，厚く台形のものに分類できる。

以上を分類構成すると，1－Ⅲ－Aa′，1－Ⅱ－Bc，1－Ⅱ－Bc，2－Ⅳ－Bb，3－

Ⅱ－Ba′，4－1－Aa，4－1－Bbの7タイプに分類できる。以上の内，1－Ⅱ－Bの器形に各種の把手をつけるものが多く，8点を数える。他の例は少ない。1－Ⅱ－Bと1－Ⅲ－Aa′は材質，製法上，同時存在が考えられる。こうしたタイプが時期差を表わすのか単なる産地別，或いは工法の差であるのか，資料増加を待って検討してゆきたい。

註1　福岡市教育委員会「有田古代遺跡調査概報」1967
註2　福岡市教育委員会「有田遺跡」1968
註3　青磁・白磁分類図　九州歴史資料館「太宰府史跡」昭和52年度発掘調査概報　1978

5. 第24次調査

調査の概要

発掘調査対象地は，福岡市西区有田2丁目10-7に所在し，面積143m² を測る。

旧地形では標高12*m*前後を測り，台地の東斜面に位置しているが，現高は区画整理によって10*m*前後にとどめる。この地点は九州大学による調査地点に近接しており，夜臼の土器を共伴した弥生時代初期の溝を検出した29街区（第2次調査）[註1]は西側50*m*に，昭和52年度調査で陶質土器を出土した第6次調査（31街区）[註2]は西北方向50*m*に，同じく昭和52年度調査で中世館跡を検出した第7次調査地点[註3]は道を挟んで北に位置している。しかしながら，この地点は周囲の地形に較べて削平が著しく，また，対置する第7次調査地点では削平によって鳥栖ロームが露呈しており，南側にはほとんど遺構が検出されなかったことから，当該地も遺構の存在はあまり予想されなかった。昭和54年7月に建築確認申請が提出されたのに伴い，発掘調査に先立って試掘調査を行った結果，対象地の南半分に遺構を検出したので，昭和54年度の事業として発掘調査を実施した。

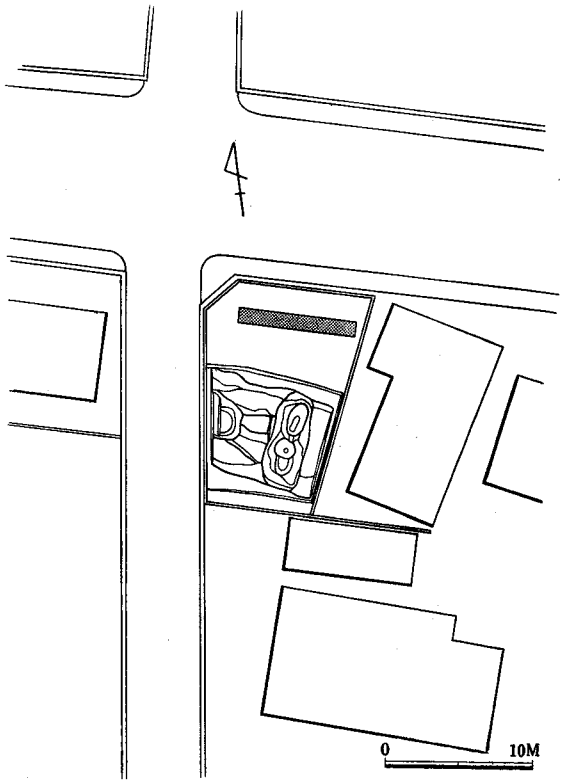


Fig. 44 調査地点現況図（縮尺1/500）

発掘調査は昭和54年8月3日から9月7日迄の25日間実施した。試掘調査によって，対象地が鳥栖ローム層迄削平を受けていることや，南半分においてのみ遺構の存在することが確認されていたので，調査は南半分を対象に行った。表土は20*cm*～30*cm*程の厚さで，旧耕作土である。

表土下直ぐに鳥栖ローム層に掘り込まれた遺構を検出した。遺構は，調査範囲一杯に入る濠状遺構と，それに伴うと考えられる井戸跡3基である。

検出遺構

濠状遺構 (Fig. 46, PL. 23. 27)

濠状遺構としたのは全長9*m*程しか確認しておらず，更に上部削平のため遺構本来の規模，

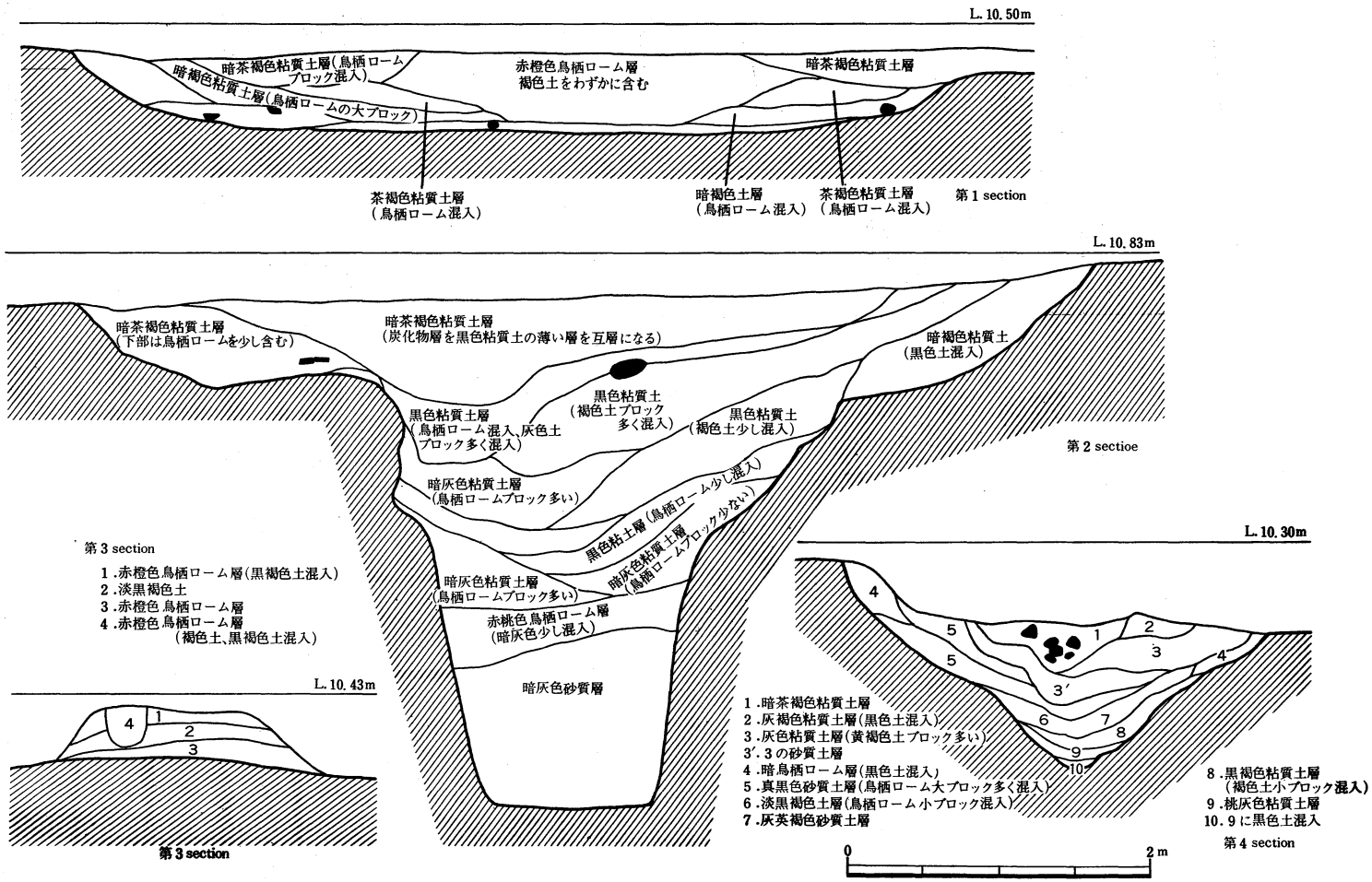


Fig. 45　濠状遺構及び井戸土層図（縮尺1/40）

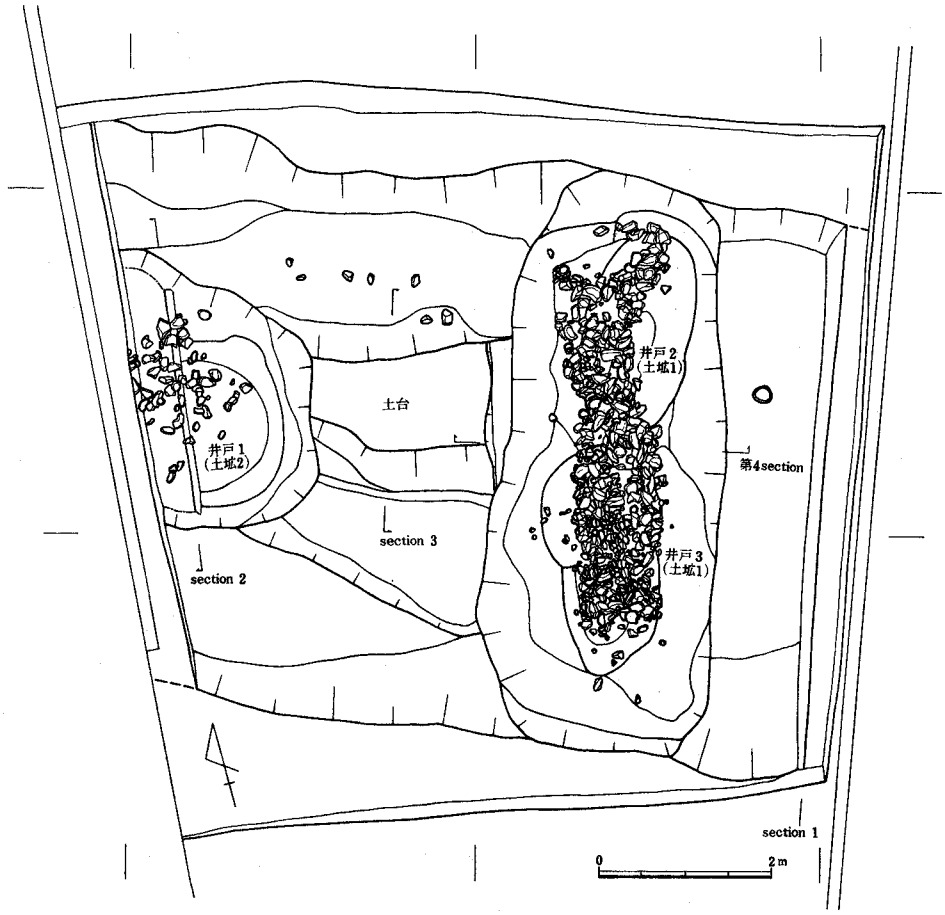


Fig. 46　遺 構 配 置 図（縮尺1/80）

形状が確認できず，濠としての決め手に欠けるためである。現存長9 *m*，現存幅6.5*m*，深さ約87*cm*程で，南肩は浅く約30*cm*程度である。断面形は緩かなU字状をなしており，底のレベルは標高9.80*m*～10*m*を示し，ほぼ一定である。中央寄りには，長さ3.4*m*，幅2 *m*，高さ約45*cm*を測る隅丸長方形状をした土台が残されている。この土台は鳥栖ロームの版築によって作られたもので，土台頂部には長軸方向に幅20*m*，深さ20*cm*の小溝が存在する。この土台を境にして，西に井戸1（土壙2）が，東に井戸2，3（土壙1）が存在する。この井戸と本遺構の関連については後述したい。

遺構内覆土は，(Fig. 45) の通り，1・2層の暗褐色土層以外は，全ての層に鳥栖ロームのブロックが大量に含まれている。溝の終末が土砂の投棄によって埋没したことが伺える。

遺物は少なく，上層の1・2層より主に出土した。青磁，白磁，土鍋，滑石製品，及び板碑が出土している。

検 出 遺 構

井 戸 (Fig. 47, 48)

〔**井戸1**〕（土壙2）(Fig. 47, PL. 24) 溝の西側底に作られたもので，上端径約3*m*，下端径約1*m*，深さ3*m*を測る。上端は不整円形，下端は円形をした逆裁頭円錐状の素掘りの井戸である。井戸の層位観察では下部2*m*迄は，やはり鳥栖ローム塊，褐色粘土塊を混じた層が折りなしており，さらに上部には礫を充塡しているので，井戸の埋め戻しが行われた様子が伺える。出土遺物は上部の礫群に混って，馬歯，青磁，白磁，須恵質土器，及び鴻臚館系の軒丸瓦が出土している。

〔**井戸2・3**〕（土壙1）(Fig. 48, PL. 25) 濠状遺構内の東側に，濠状遺構に直交する形で隅丸長方形の土壙が検出された。この土壙上には長方形状に礫群が存在した。この礫群は濠状遺構の底に敷かれ，断面「弧形」状に配列された2～3段の不規則な積み石である。この礫群の大部分が二次的な火を受け，赤変或いは黒変を呈している。この石積み内には，大量の遺物を含んでおり，磁器類，須恵質土器，土師質土器，鉄滓等を含んでいる。井戸2・3は，この礫の長軸直下に，並んで配置されており，井戸2・3共に素掘りである。井戸2は隅丸長方形をなし，径120*cm*×160*cm*，底径40*cm*×110*cm*，深さ200*cm*を測る。井戸3は，ほぼ正円形に近く，逆裁頭円錐形を呈し，上端径140*cm*，下端径30*cm*，深さ200*cm*を測る。出土遺物は少なく，井戸2より瓦質土器，陶器，磁器類が出土している。上記の長方形状配置礫群との関係は，井戸2・3共に層位および埋土が共通しており，粘質土を含んだ多量のブロックの混在から，井戸の埋め戻しの完了と共に井戸上部の塡圧に利用されたものと考えられよう。

出 土 遺 物

土師器 (Fig. 49-1)

「高杯」井戸2より出土。流れ込みである。高杯の脚部で，裾部分と杯部を欠損している。3ヵ所に径6*mm*の穿孔がある。外面は縦方向の細いハケ目調整，内面は裾部分に細い縦方向のハケ目調整がみられる。色調は淡褐色を呈す。

白 磁 (Fig. 49, PL. 28)

「椀Ⅱ類」(Fig. 49-2, 4, 5)　4，5共に高台の削りが浅い。釉は青味を持った灰色で高台は施釉されない。4は包含層出土。砂粒を含み，気泡が多い。5は井戸2・3上部礫群出土。胎土が良質で，灰白色を呈す。5の見込みは小さな段をなす。2は濠状遺構内出土。玉縁の口縁を作るもので，やや厚めに施釉される。灰白色の釉である。胎土は良質である。

「椀Ⅵ類」(Fig. 49-3, 6, 7)　3・7は濠状遺構内出土。3は黄灰色の釉をやや厚目に施す。口縁端部は小さく外反する。7は高台迄黄灰色の釉が施されるが，内面見込みは段をなし，釉

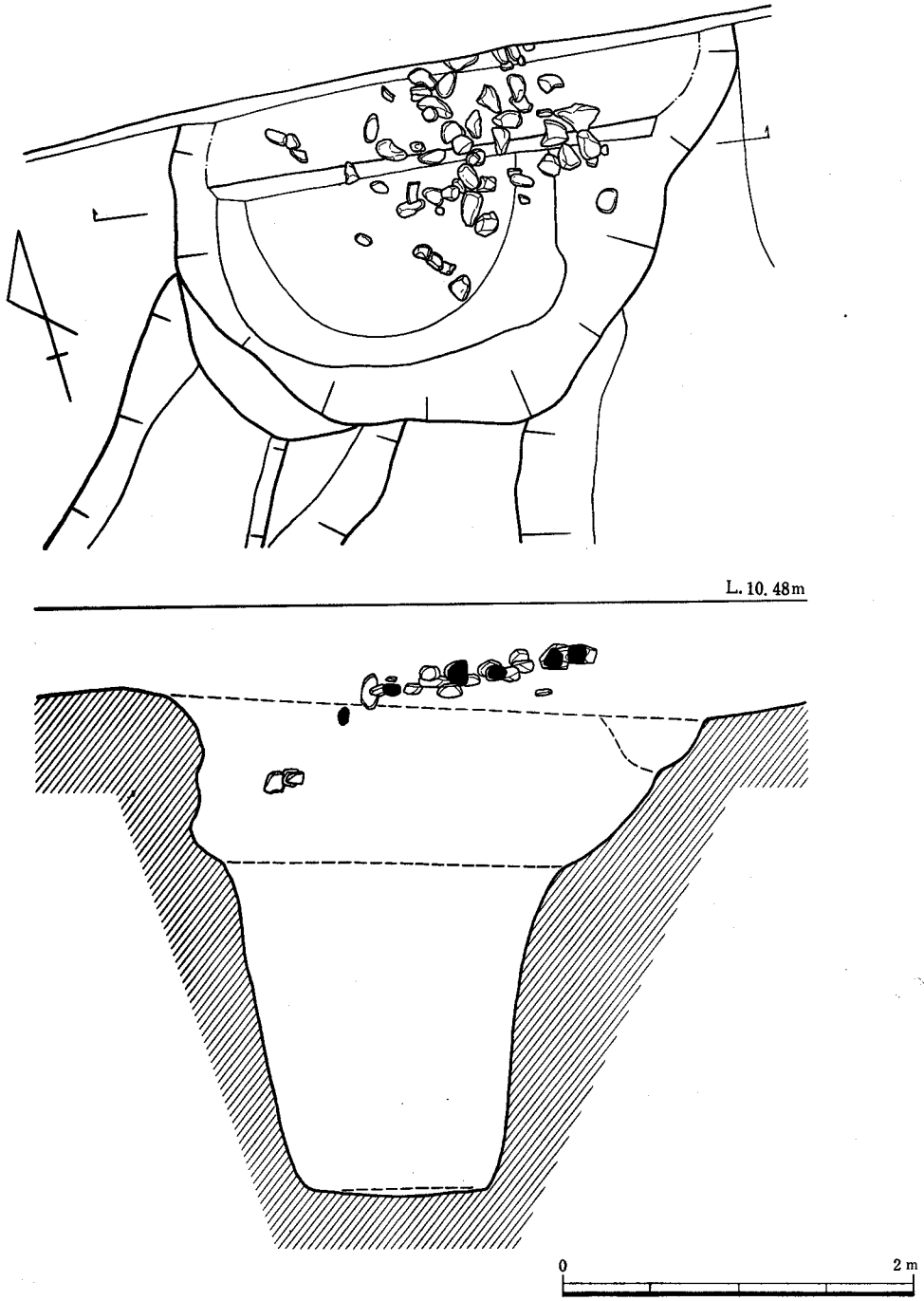


Fig. 47　井 戸 1 実 測 図（縮尺1/40）

が環状にカキ取られる。高台の削りは深く，高台は高い。

青　磁 (PL. 28)

「椀Ⅲ類」 (PL. 28-8) 濠状遺構内より龍泉窯系の青磁が出土。太宰府の青磁分類で，椀Ⅰ—5 b に属するもので，青緑色の釉が厚目にかけられる。

「皿Ⅰ類」(Fig. 49-8)　井戸2・3上部礫群出土。龍泉窯系の青磁皿である。胎土は良質で，灰白色を呈す。緑色の釉が体部にかけられ，見込みにはヘラ描きの草花文と櫛描き文を配している。

青白磁(Fig. 49-9, PL. 28)

「椀」井戸2・3上部礫群内出土。小さな高台で高くはない。胎土は良質で灰色を呈す。明るい空色の釉で高台迄施釉される。身込みに段を有す。内底に重ね焼痕がある。

その他の陶磁器 (Fig. 49, PL. 28, 29)

「椀」(Fig 49-10, 11, 12) 10～12共に濠状遺構内出土。11. 釉は黄白色で，全体にやや厚めに施釉される。高台は三角形状の尖ったもので，削りは浅い。内底見込みに重ね焼きの細長い粘土が付着している。胎土に細い砂を含み，やや陶質である。荒い貫入が見られる。10. 胎土は黄灰色で良質である。灰色を帯びた釉を全体に施す。見込みに重ね焼きの粘土が3ヵ所付着。畳付にも目痕が残っている。内外面には荒い貫入が見られる。12. 暗い濃緑色の釉を全体に施す。内底部は，刷毛で新たに白釉を塗り込めている。見込みと畳付に重ね焼痕が見られ，細身の高台を有す。胎土に細かい砂を含み，黒灰色を呈す。10・11・12共に高麗茶椀であろう。

「天目」(Fig. 49-15)　包含層より出土。天目釉の破片である。釉は体部内上位から外面に施され，高台と体部下半は暗茶褐色の露胎である。釉は飴色をしており，部分的に黒色をなす。厚目の施釉である。

「皿」(Fig. 49-13)　体部内面上位と外面が露胎の小皿である。露胎は灰色を呈し，胎土には微砂を含む。釉は黄緑味を帯びた暗い茶褐色である。見込みには小さな菊花文を配す。

「青花（染付)」(PL. 29-1)　濠状遺構内第Ⅰ層出土。淡灰色を呈し，内面の身込みと，外面に青灰色の図案を施こす。16世紀の年代が与えられる。

日本製陶器 (Fig. 49-16, 19, Fig. 50-1, PL. 29)

16・19共に褐釉陶器である。同じく，濠状遺構内出土。胎土に砂を含む。16. 口縁は折り曲げて形成している。19. 部分的に釉が風化しており，外面には押印がある。内面は，指圧痕が残っており，ナデ消される。16・19共に備前焼であろう。図示した他に井戸2・3上部礫群より備前焼と思われる褐釉陶器片が5点出土している。Fig. 50-1 は井戸2と濠状遺構内出土の破片が接合したものである。外面は淡い赤褐色を，内面は灰褐色を呈す。釉は内面に薄く，外面には施されない。器肉の厚い大型の甕である。形態は不明。

瓦　器 (Fig. 49-14)

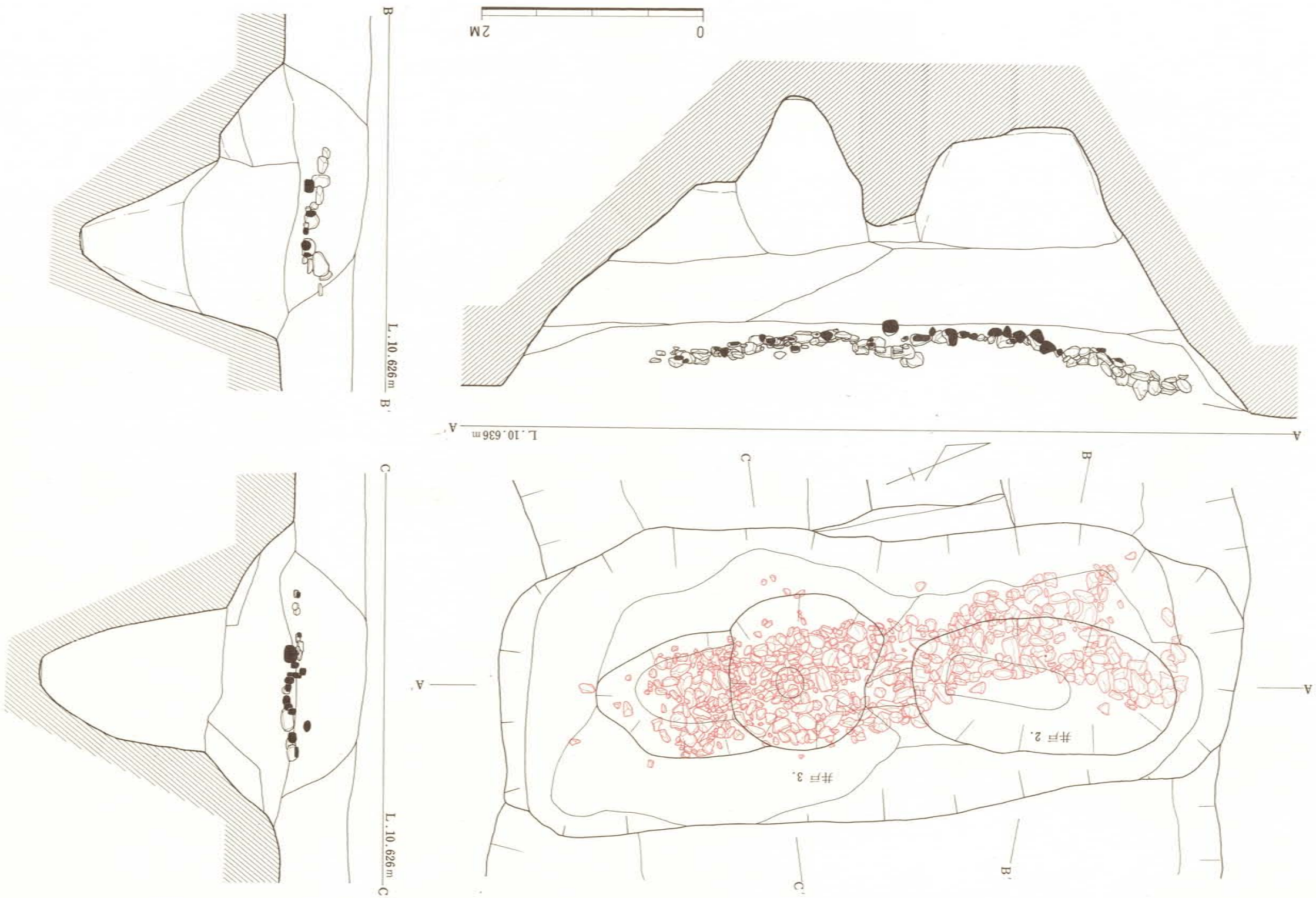


Fig.48 土坑1-井戸2・3 実測図（縮尺1/40）

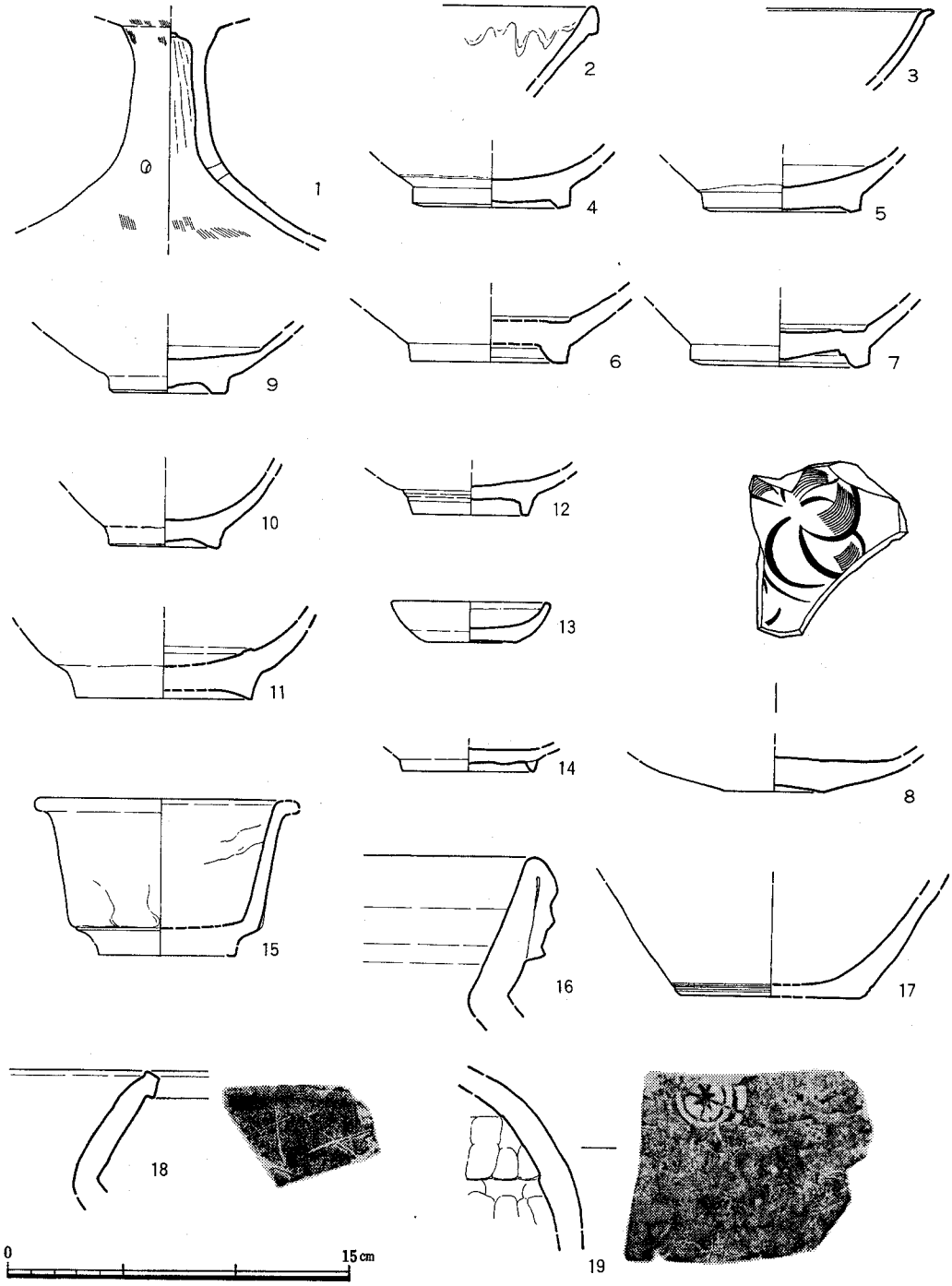


Fig. 49 出 土 遺 物（縮尺1/3）

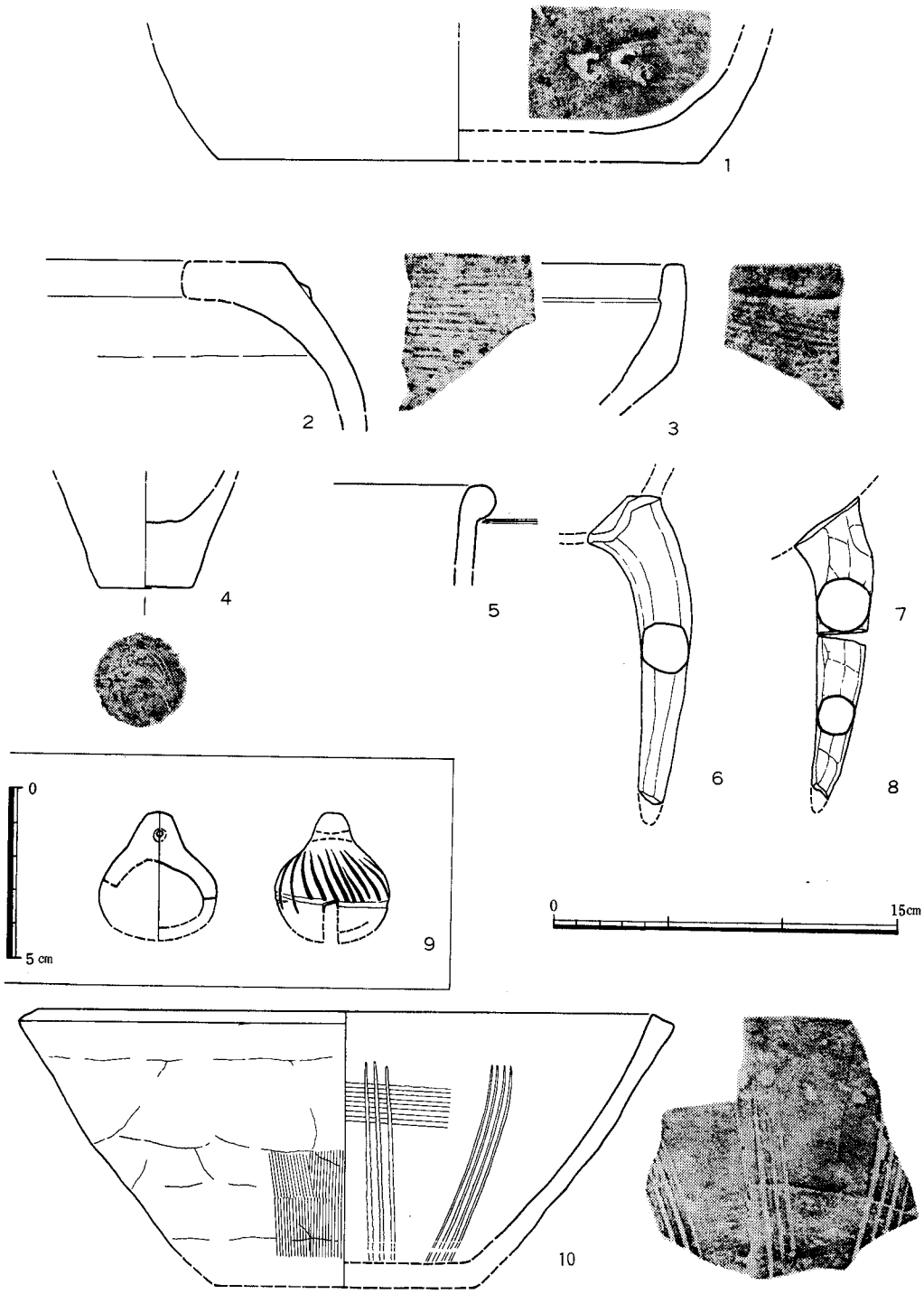


Fig. 50 出　土　遺　物（縮尺1/3）

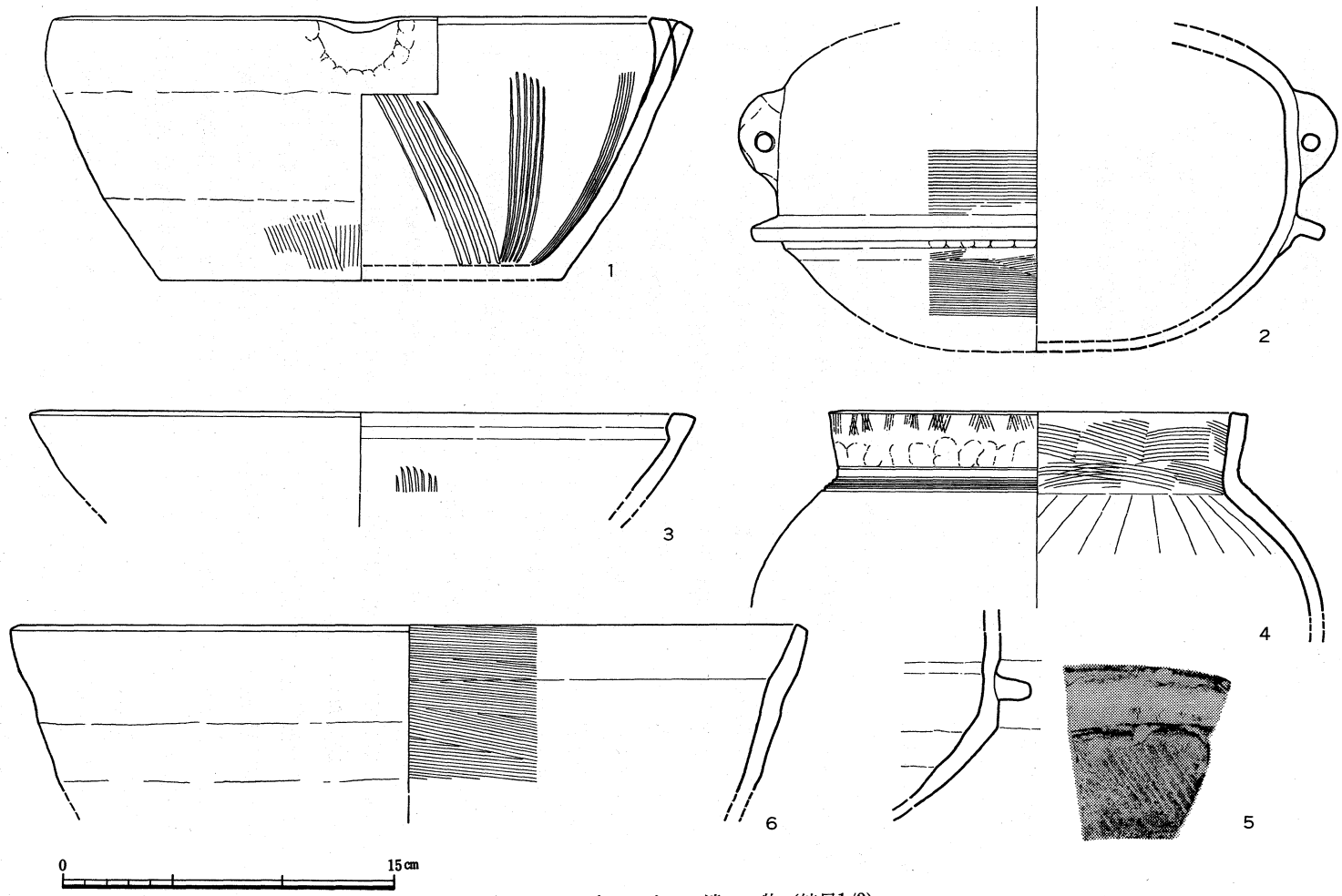


Fig. 51 出　土　遺　物（縮尺1/3）

井戸2・3上部礫群出土。 底部は三角形の貼付高台を有す。 内外面の調整は磨滅のため不明。胎土は良質である。内面は黒色を，外面は暗灰色を呈す。

須恵質土器 (Fig. 49-17, 18, PL. 29)

17・18共に濠状遺構内出土。17は鉢形土器である。内外共に灰褐色を呈し，胎土には石英粒を少し含む。内外面共にナデ調整を施し，下部には3～4条の広く，浅い沈線を入れる。下部に煤が付着する。18は甕形土器である。内面暗灰色，外は黒灰色を呈す。胎土に砂を含む。外面には「×字形」のヘラ描き紋を連続させる。

瓦質土器 (Fig. 50-2, 3, 5, 6, 7, 8, 9, 10, Fig. 51-1, 2, 3, 4, 5, PL. 30)

「火舎」(Fig. 50-2)　口縁部の破片である。井戸2・3上部礫群出土。内外黒色を呈し，胎土に細かい砂を含む。内面には横方向のハケ目調整を，外面はナデ調整を施す。口縁部外面に小円形の乳を配す。

「鉢形土器」(Fig. 50-3, 5)　濠状遺構内出土。3は直口する口縁部を有す。胎土に砂粒を多く含み，黄灰色を呈す。口縁部を除いて，内外共に荒いハケ目調整を横方向に施す。5は内外黒色を呈し，ナデ調整がなされる。外面には化粧塗りが施されている。玉縁の口縁を作る。

「土釜」(Fig. 50-6, 7, 8, Fig. 51-2, 5)　6・7・8は共に土釜の足である。7は井戸1上部礫群出土。8は井戸2・3上部礫群出土。9は濠状遺構内出土。いずれも淡黒色を呈し，煤の付着がみられる。共に指による成形痕が残っており，7はナデ調整を行う。7・9には砂粒を含む。2は井戸1出土。内外共に黒色を呈す。鍔は体部下半に貼付られる。鍔下半は細いハケ目調整を，上半は荒いハケ目調整を行う。耳はハケ目調整後に貼付けられる。内面は横ナデ調整だが，耳の貼付け部分には指圧痕が明瞭に残る。直口する口縁部がつく器形であろう。煤の付着が著しい。5は濠状遺構内出土。鍔下はやや斜の方向の荒い描き目が残る。煤が著しく付着し，全体に黒灰色を呈す。内面はナデ調整を行う。

「擂鉢」(Fig. 50-10, Fig. 51-1, 3) 10は口径28*cm*，復元器高12.2*cm*を測る。外面はナデ調整し，指圧痕を消している。内面は磨滅しているが，横方向のハケ目調整を施す。内面には3～4本単位で，縦方向の描き目を下方より上に向けて施す。胎土は精選され，焼成は弱い。赤橙色を呈す。1は濠状遺構内出土である。口径24.7*cm*，器高11.5*cm*を測る。胎土に砂粒を多く含む。外面は暗灰色を呈し，下部には煤の付着がみられる。内面は黄灰色を呈す。外面の下手にはハケ目調整を，上部にはナデ調整を施す。内面は6本単位の荒い櫛描き目を配す。3は井戸2・3上部礫群出土。黒灰色を呈し，外面には煤が付着。内面には5本単位の櫛描き目がみられる。口径29*cm*を測る。

「甕形土器」(Fig. 51-4)　井戸2・3上部礫群出土。口径18.3*cm*を測る。黄褐色を呈し，砂粒を多く含む。口縁は直口する。口縁部外面は指圧痕が残り，縦方向のハケ目調整と横ナデ調整で消している。内面は横方向の荒い刷毛で調整。胴部内面の下位は横ナデ調整，上位は板状の

井戸2.3 上礫群

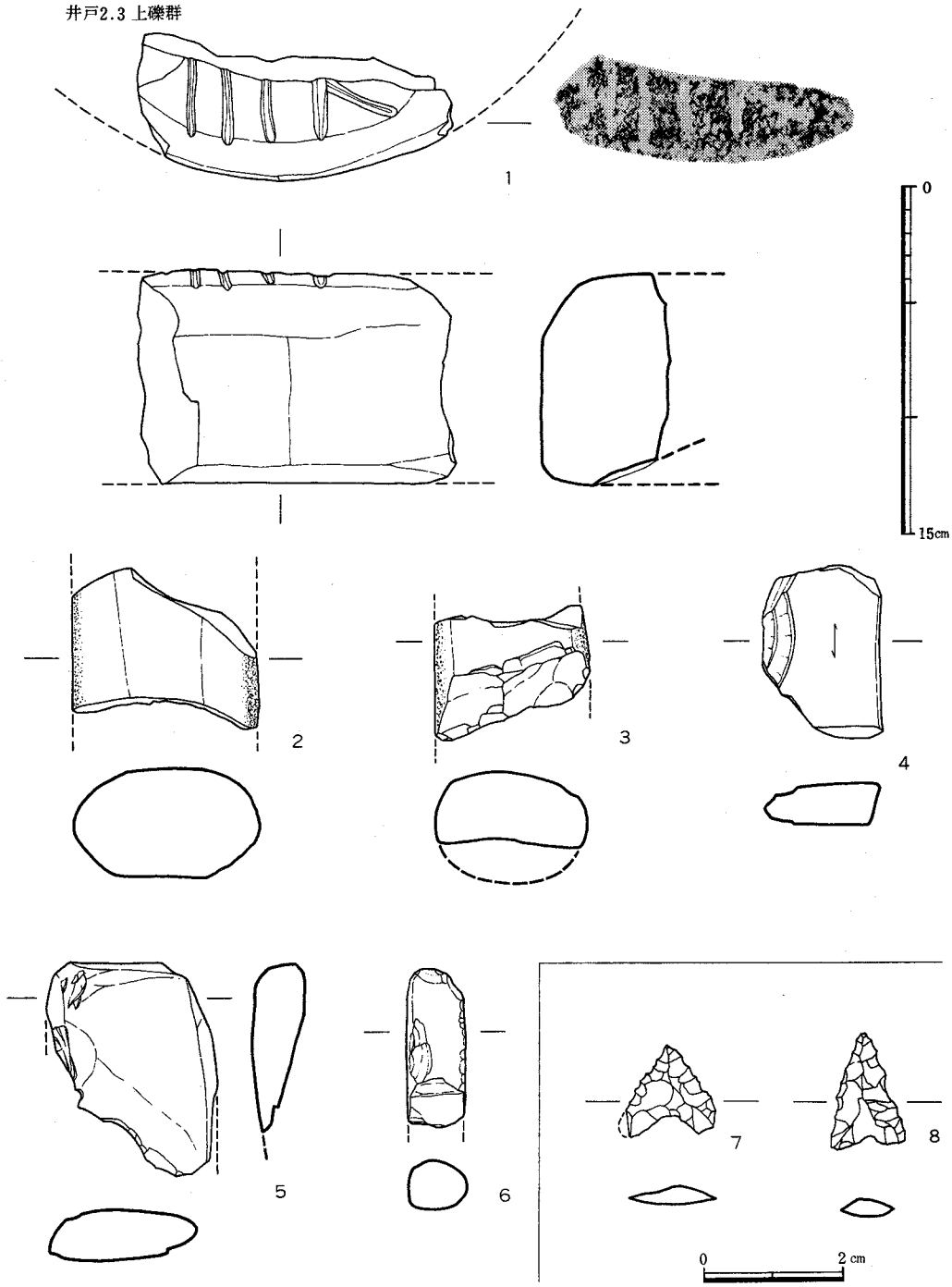
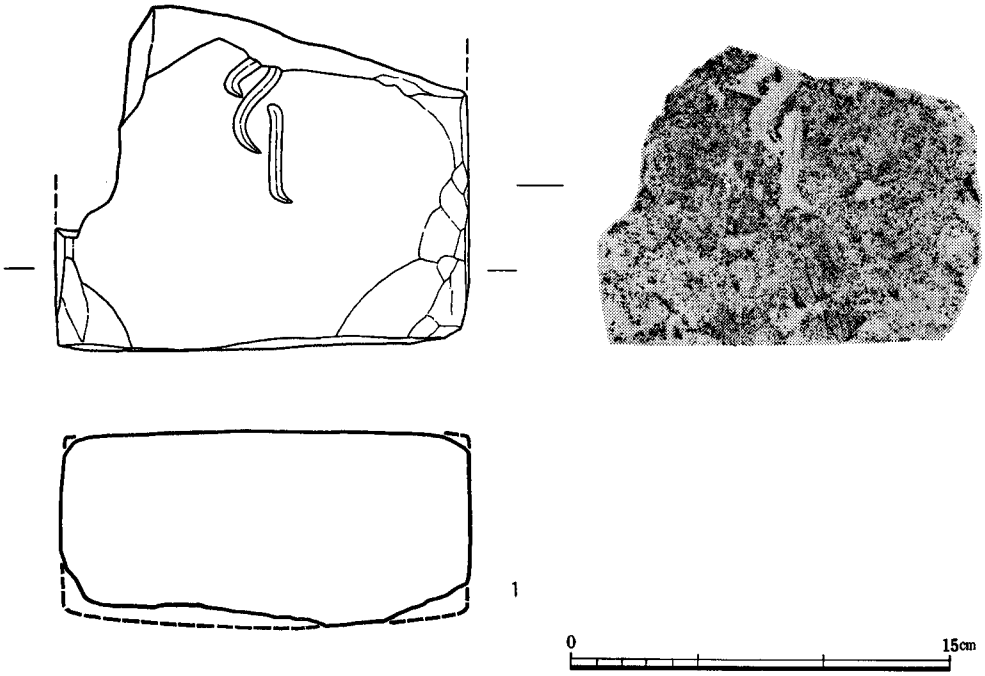


Fig. 52 石　　器　　類（縮尺1/3）



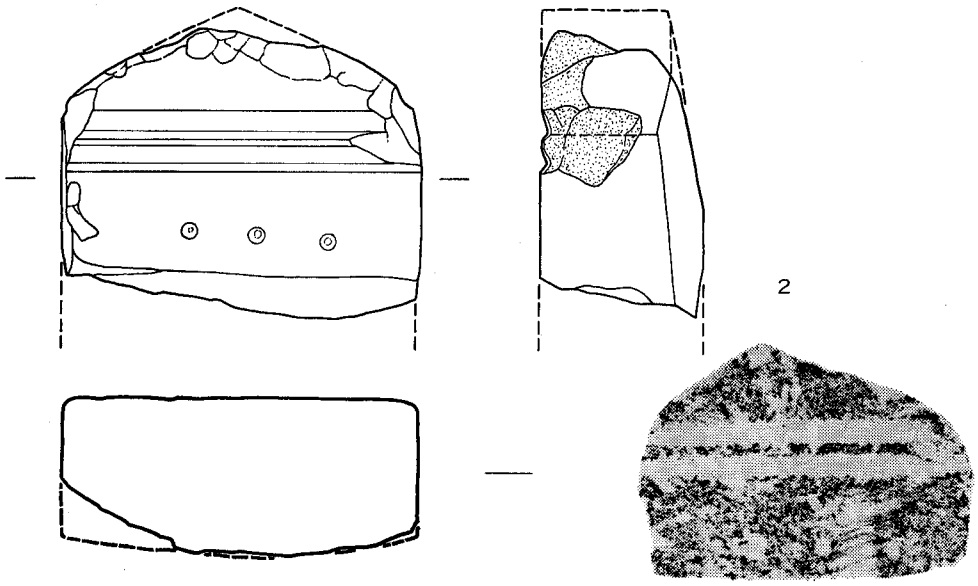
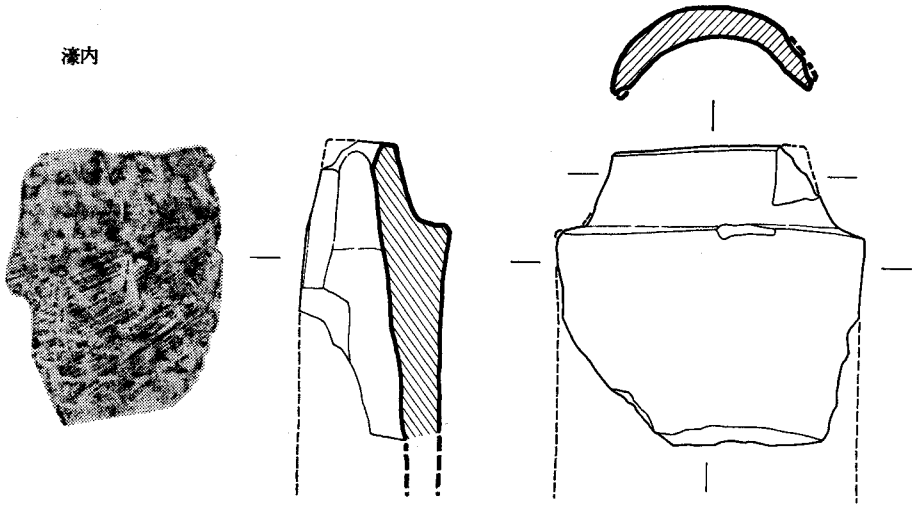
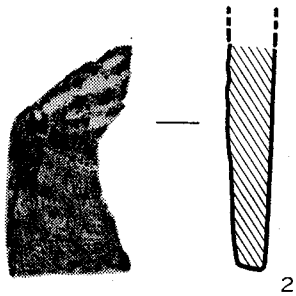


Fig. 53　板　　碑（縮尺1/3）

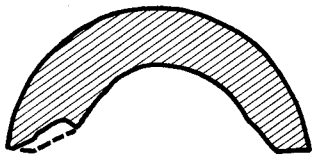
濠内



井戸1 上 礫群

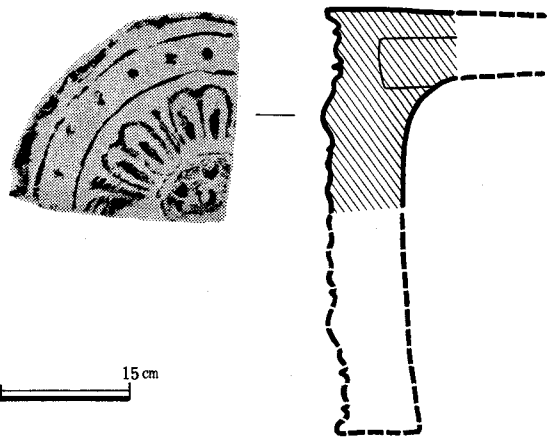


2



1

井戸1 上 礫群



3

0 15cm

Fig. 54 瓦 類（縮尺1/3）

工具で横方向に削り整形している。外面は横ナデ調整し，頸部に数条の沈線を入れる。

土師質土器 (Fig. 50-4, Fig. 51-6, PL. 30)

4は褐色を呈し，胎土に砂を含む。底部は厚く，糸切り痕を残す。器形不明。6は井戸2・3上部礫群出土。土鍋である。口径11.6cmを測る。内外共に黄褐色を呈するが，下部は淡黒色で煤が付着している。外面は横ナデ調整を，内面は細い横ナデ調整を施す。

土鈴 (Fig. 50-9, PL. 32)

濠状遺構内出土。最大径 3.4cmを測る。球形体部の下半には，幅4mmの切り込みがある。釣手の紐通しは径3mmの穿孔がある。外面中位に横方向の沈線を，その上位にやや斜目方向のヘラ描き紋様を入れる。暗い黄灰色を呈し，胎土は良質である。

石器類 (Fig. 52, PL. 31, 32)

1は井戸2・3上部礫群出土。石臼の破片である。気泡の多い凝灰岩質の石材を利用している。平坦部に幅4mm～5mm，深さ2mm～3mmの粉引き溝を作る。側面には成形時の削りがみられる。下部は凹状をなす。2・3は玄武岩製の石斧破片である。いずれも蛤刃の石斧である。2は井戸2・3上部礫群出土。刃部，基部を欠損する。幅8cm，厚さ4.8cmを測る。側辺に敲打痕が残る。3は濠状遺構内出土。刃部，基部共に欠損する。幅6.8cm，厚さ4cmを測る。側辺に敲打痕を残している。4は井戸2・3上部礫群出土。中粒砂岩製の砥石である。3面を砥面として利用している。長さ7.5cm，幅5cm，厚さ1.8cmを測る。5は濠状遺構内出土。粘板岩製で，石斧の再加工途中と思われる。側辺は面取りをされ，若干，敲打痕を残している。A面は研磨されるが丁寧な仕上げではない。B面は自然面を残す。幅7cm，厚さ2.3cmを測る。6は井戸2・3上部礫群出土である。頁岩製の柱状片刃石斧と思われる。刃部を欠損する。現存長7cm，厚さ2.5cmを測る。基部および側辺に打撃痕を残し，部分的には風化剝落もみられる。断面は，不整方柱状に仕上げている。7は井戸1上部礫群出土。長さ1.4cmを測る。黒曜石の剝片を用いた石鏃である。B面は剝離面をそのまま残している。8は同様に剝片鏃で長さ1.7cmを測る。井戸2・3上部礫群出土である。7・8共に腰岳産の黒曜石を原材とする。9(PL.31-5)は井戸2・3上部礫群出土。石臼の破片である。A面には粉引き溝を残す。気泡の多い凝灰岩を用いている。

板碑 (Fig. 53-1, 2, PL. 31)

濠状遺構内より5点出土。1・2共に濠状遺構内上層出土。1は板碑の基部を残し，欠損部分に梵字がみられる。中粒砂岩を用いる。幅16cm，厚さ7.8cmに荒割りし，細かい調整で長方形の板石を形成する。正面および側辺は削り出している。背面には，石材の荒割りの痕跡と思われる長さ10mm，幅5mm～6mm，深さ3mm～4mmのキズが横方向に5条ある。二次的に火を受けており表面が赤褐色を呈す。2は板碑の上部を残すもので，先端を三角形に作り，正面には薬研掘の二条の溝を水平に彫っている。二条の溝下には径7mmの円形の穴を並列に彫っている。

中粒砂岩を用いており，正面および側面を削っており，背面は雑な仕上げである。二次的に火を受けており，背面は黒変している。磨滅風化が著しい。他の3点は破片であり，特徴がないので図示しなかった。いずれも砂岩質である。

瓦類（Fig. 54, PL. 32-10, 11, 12）

1は濠状遺構上層出土。瓦当部外径12.5cm，内径9cmを測る小型の丸瓦で基部を欠損している。凸面はかすかに縄目の叩きが認められるが，全面のナデ調整で消している。凹面は荒い格子布目が残り，糸切痕が認められる。前端は面取りし，削りが行われている。先端の玉縁部分は丁寧なナデ調整を施す。胎土に砂粒を含み，内面は黄褐色を，外面は黄灰色を呈す。二次的に火を受けており，一部に赤変がみられる。2は井戸1出土。丸瓦の基部の破片である。内外共に磨滅が著しいが，外面はナデ調整で叩きを消している。凹面には波状の縄痕が残っている。3は井戸1上部礫群より出土したもので，鴻臚館系複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。破片であるが瓦当面径は復元で16.7cm，瓦当厚約3.0cmを測り，外区は0.3cmの角のない三角形の外縁をめぐらす。内縁には，珠文24個を配している。八葉の複弁蓮華文は，高く浮き出している。中房には1＋4＋8（推定）の蓮子を配置する。胎土はやや暗い灰色で白色の砂粒を微量含む。瓦当面は黒ずんでおり内面は淡黒色である。丸瓦との接合は，丸瓦の先端を瓦当内に差し込んだものである。

滑石製品（PL. 32-8）

石鍋の破片3点と加工品1点が出土。図示し得ないが，灰黒色を呈し，縦長の削り痕を残すもの，細かい縦長の削り痕のもの，鍔が「コ字形」で厚いつくりのものである。

鉄　滓

濠状遺構内より3点，井戸2，3上部礫群より2点，井戸1上部礫群より2点出土している。

馬　歯

井戸1上部礫群より出土。風化著しく，図および写真を示し得ない。

小　　結

濠状遺構の機能と規模は，調査地域が限られていることや，現地が著しい削平を受けていることから，推定の域を出ない。本来の地形は現状より1～2m程高く，したがって濠状遺構の深さは少なくとも2m以上はあったと思われる。この濠状遺構の中央部分にある土台は版築によるもので，上部にはpitや小溝が存在しており，いわゆる橋脚台的な役割を持っていたのかもしれない。調査地点の南側には，中世の城郭の小田辺城が存在する。この城の規模は明らかではないが，旧地形図（Fig. 3）から土塁の存在が伺える。また，調査地点周辺を通称「掘之内」と言い，文献によれば小田部氏の館跡があって，空濠が存在したと伝えられる。[註4.5] 濠状遺構が東西に台地を横断する方向にあることを考え合わせると，この濠状遺構は中世城跡の空濠の

一部の可能性は充分にある。

濠状遺構と井戸1（土壙2），井戸2・3（土壙1）との新旧関係について述べたい。濠状遺構の中央に位置する土台は，土壙1，土壙2によって切られており，井戸1，井戸2・3が後出のものであると言える。井戸1の土層（Fig. 45）を観察すると，人為的に埋め込まれた状態を示すが，濠状遺構の埋土との明瞭な境はない。濠状遺構もまた，鳥栖ロームのブロックを混入した土を多量に投げ込まれ，人為的に埋め込まれた状態を示す。しかし，井戸1，井戸2・3共に上部に礫群が存在し，埋土の塡圧に使っていることから，井戸1，井戸2・3の埋没が濠状遺構の埋没に先行するものと考えられる。濠状遺構→井戸1・2・3→濠状遺構の前後関係が考えられる。しかし，濠状遺構および，井戸1，井戸2・3は年代的には差は無く，濠状遺構内と井戸2から出土した日本製陶器(Fig. 50-1) が接合したことからも言える。出土した遺物のセット関係や編年については今後の検討を要するけれども，濠状遺構，および井戸1，井戸2・3の年代は，大まかに室町時代に属するものと考えられる。また，井戸1の礫群から検出した鴻臚館系の軒丸瓦については，有田地区に奈良時代の廃寺の存在を期待させられるところである。井戸1の礫群より馬の歯が出土しているが，これは中世の祭址に関するものと理解される。

白磁，青磁の分類は，第23次調査に統一し，大宰府の分類に対称させた。[註6]

白磁椀Ⅱ類はⅣ1aに，椀Ⅵ類はⅧ2に，青磁椀Ⅲ類—Ⅰ5b，ⅢⅠ類はⅠ2に相当する。

註1　福岡市教育委員会「有田遺跡」1968
註2　昭和52年度調査　表1参照
註3　〃　表1参照
註4　青柳種信「筑前国続風土記拾置」筑前国続風土記拾遺刊行会　1973
註5　福岡県早良郡役所編「早良郡志」1973年復刻版
註6　白磁・青磁分類図　九州歴史資料館編「太宰府史跡」昭和52年度発掘調査概要　1978年

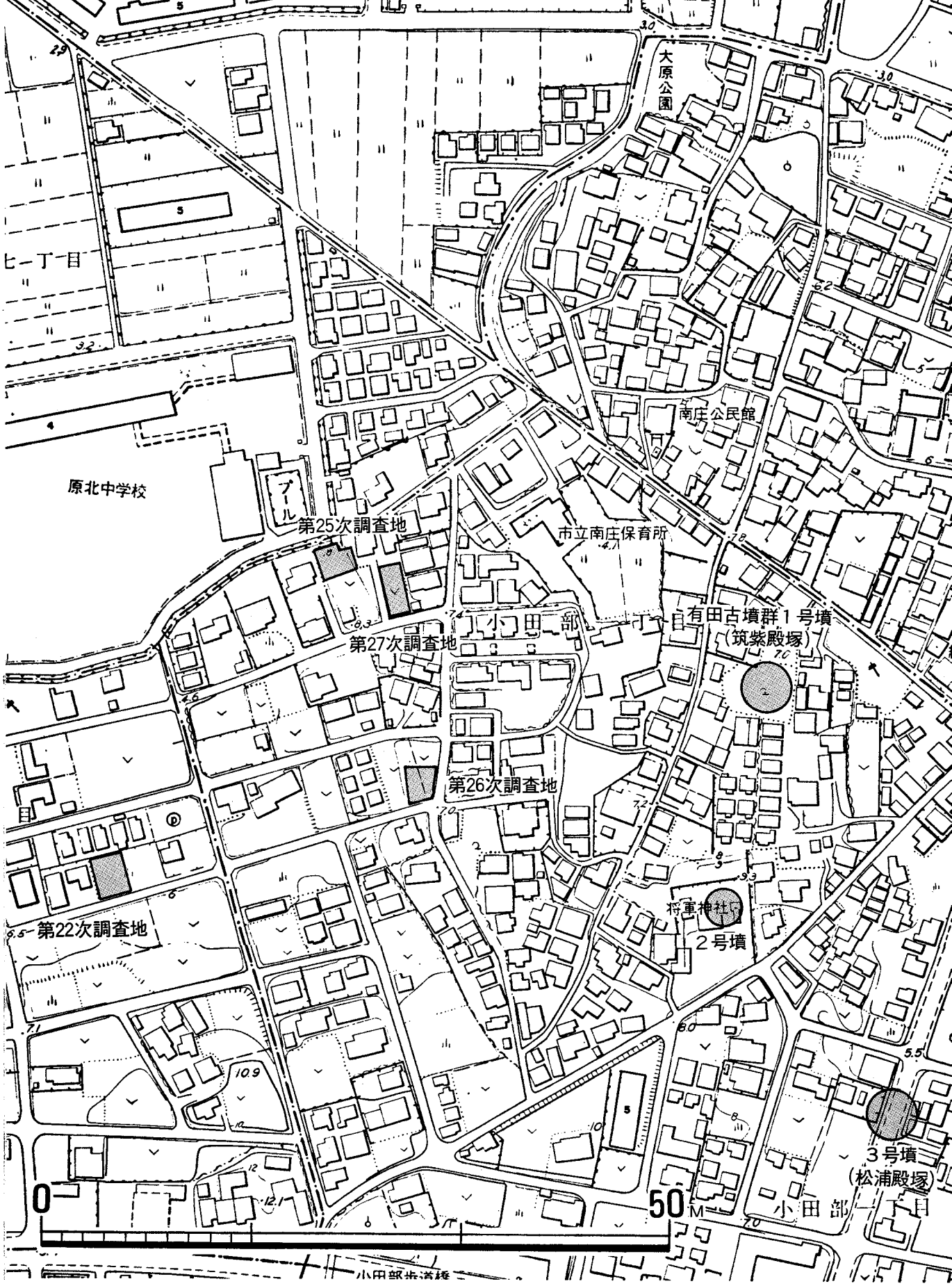


Fig. 55　小田部地区調査地域図(縮尺1/2500)

6. 第25次調査

調 査 の 概 要

調査対象地は，福岡市西区小田部5丁目237—1 に所在し，対象面積は298m^2である。

当該台地の北西部分は室見川の蛇行によって，ところどころ小規模の段崖が形成されているが，特に北端部の段崖は比高差が著しい。北へ舌状に伸びる台地が河川活動によって浸蝕を受けたもので水田面との比高差4mの崖を形成している。当該地はこの舌状台地上に位置し，東，西側には谷が形成されている。

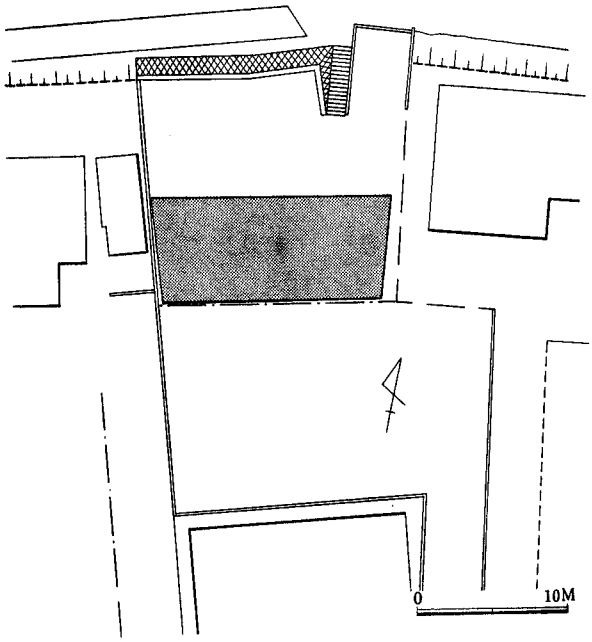


Fig. 56 調査地点現況図（縮尺1/500）

昭和54年度の建築確認申請に伴い試掘調査を実施した結果，遺構を検出したので，発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和54年8月8日～8月11日迄の4日間実施した。発掘調査は対象地の北半分が，石垣構築によって破壊が著しいため，南半分に限って行った。表土下約20cm～30cmで遺構面の暗黄褐色粘質土が露呈する。遺構はこのローム層に掘りこまれたpit群で，幾つかの掘立柱建物が検出された。

検 出 遺 構

掘立柱建物

計4棟を検出した。いずれも柱根が残っていないため，図上復元を試みた。まだ幾つかの建物が建つ余地があるが，一応，まとまりのある4棟について報告したい。

〔**SB 01**〕(Fig. 58)

梁行2間，桁行2間以上の建物で調査範囲外の南側へ1間～2間伸びるようである。主軸をほぼ南北に定めており，梁間10.5m，桁間10.6m～11.8mを測る。柱径25cm～40cm，深さ15cm～25cmを測る。主軸方位は N 3°30′W である。

〔**SB 02**〕(Fig. 58)

SB 01 の東に接して，やや西に主軸を振った建物で，梁行1間，桁行2間である。柱径20cm

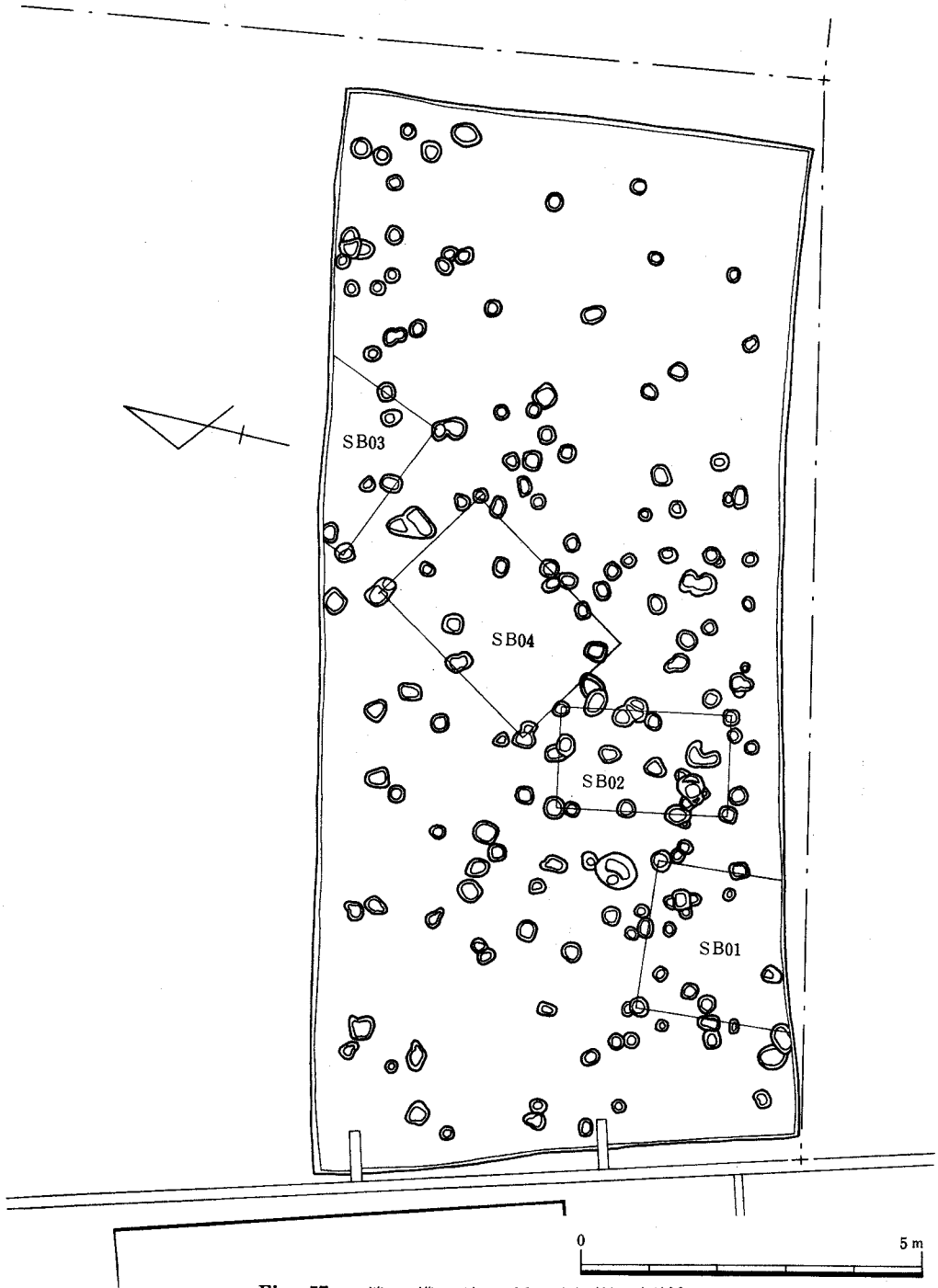


Fig. 57 遺 構 配 置 図（縮尺1/100）

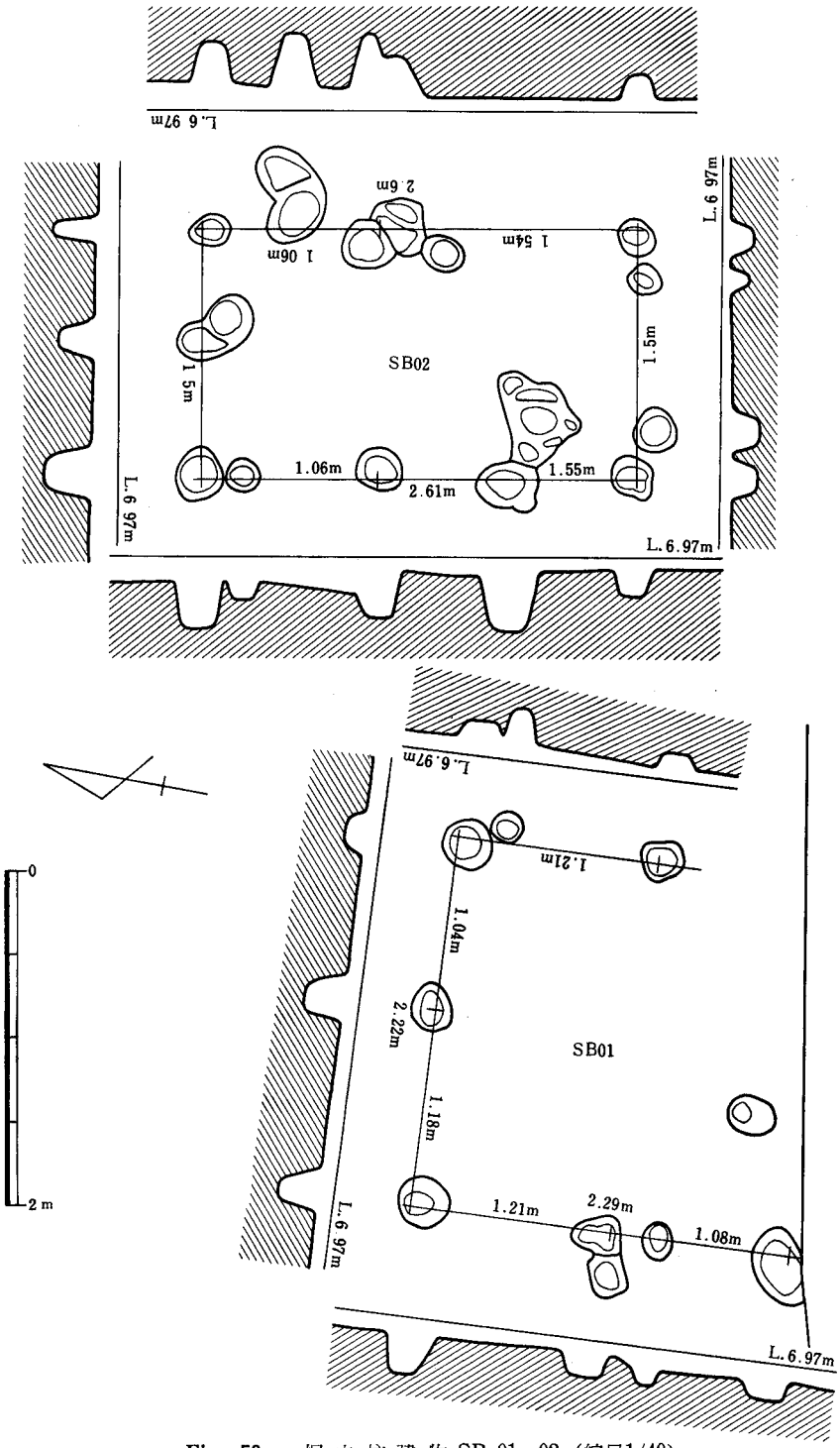


Fig. 58 掘立柱建物 SB 01, 02 (縮尺1/40)

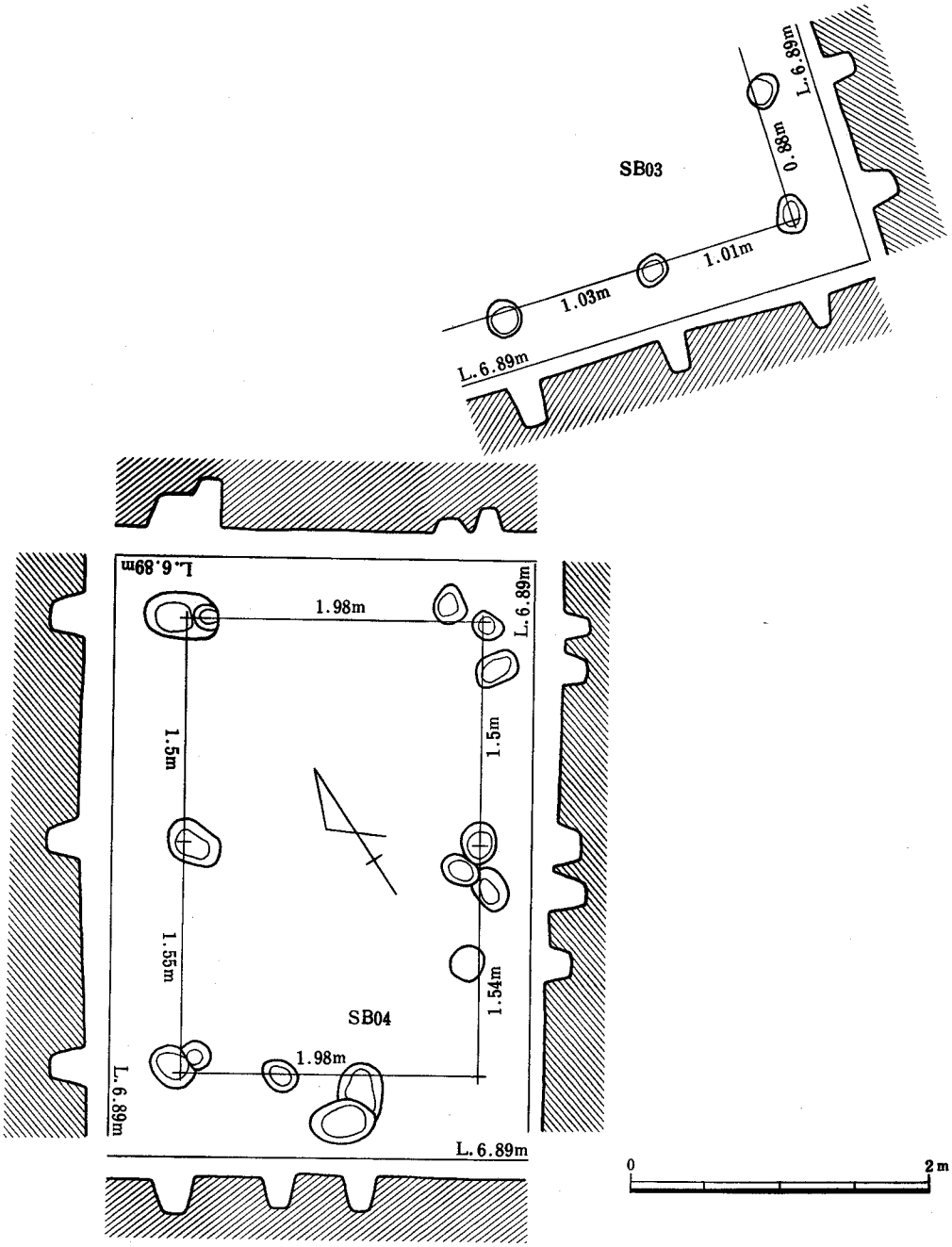


Fig. 59 掘立柱建物 SB 03, 04 (縮尺1/40)

～30cm，深さ15cm～30cm，梁間1.5m，桁間1.08m～1.52mを測る。南半の桁間が北半に比べて狭い建物である。主軸方位は，N 10°W である。

〔**SB 03**〕(Fig. 59) 調査地の北東部分で検出されたが，未発掘の北側に建物の大部分が伸びるもので，規模は不明。ただし，他の建物の規模からして，梁間2間，桁行2間～3間の建物が考えられる。梁間1.02m，桁間0.9mで，柱径20～30cm，深さ20～30cmを測る。北東よりに主軸（N 74°40′W）を定めている。

SB 04 (Fig. 59) SB 03 の南に接している。梁行1間，桁行2間の建物で，主軸方位はN 33°40′E である。柱径30～40cm，深さ20～30cm，梁間1.8m～1.9m，桁間1.5m～1.6mを測る。

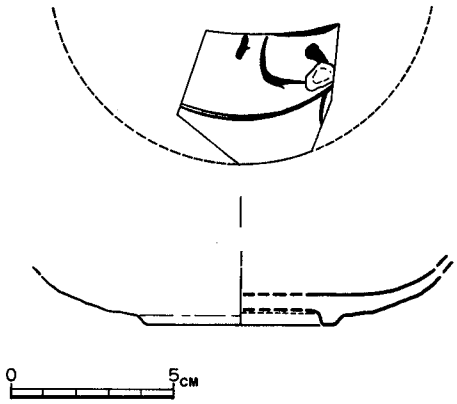


Fig. 60 出土遺物（縮尺1/2）

出土遺物

遺物は細片が多く，図示し得ないが，土師器，平安時代の高台椀片などが出土している。

染付 (Fig. 60, PL. 40-9) 染付の青磁である。高台部は低く，体部は丸味を持っている。釉はくすんだ空色で，全体にかけられる。内面には，濃い紺色の絵付が施されている。

小結

遺構としては柱穴ばかりであった。掘立柱建物の重なりを示しているのであろうが，机上で復元できたのはわずかに4棟だけである。いずれも規模は小さく，小屋がけ程度のものと思われる。また，いずれも同一方向に建っている。時期を判断する遺物は少ないが，表土や柱穴からの出土遺物をみると，古墳時代初期から奈良時代の遺物を含んでいる。さらには，表土より図示したように14～16世紀代の遺物の出土もある。建物を構成する柱穴からの遺物の出土がないので，古墳時代から中世の幅広い時期を与え，今後の課題としたい。

7. 第26次調査

調査の概要

発掘調査対象地は，福岡市西区小田部5丁目219番地に所在し，対象面積は244m² である。

大字南庄に接する台地北端部の最高所は標高10*m*前後を測るが，この台地の東側，西側は深い谷が入り込んでくる。当該地は，この北から切り込む谷の頭に当り，標高8*m*前後の緩やかな傾斜地にある。家屋の改築に先立って，試掘調査を行った結果，遺構を検出したため，昭和54年度事業として発掘調査を実施した。

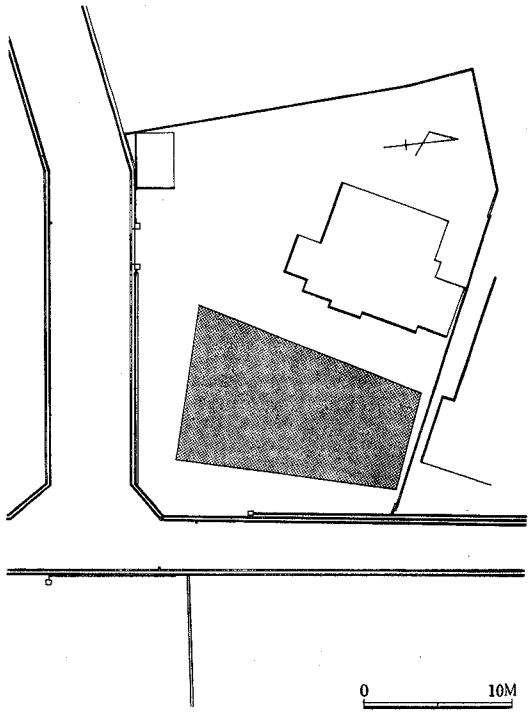
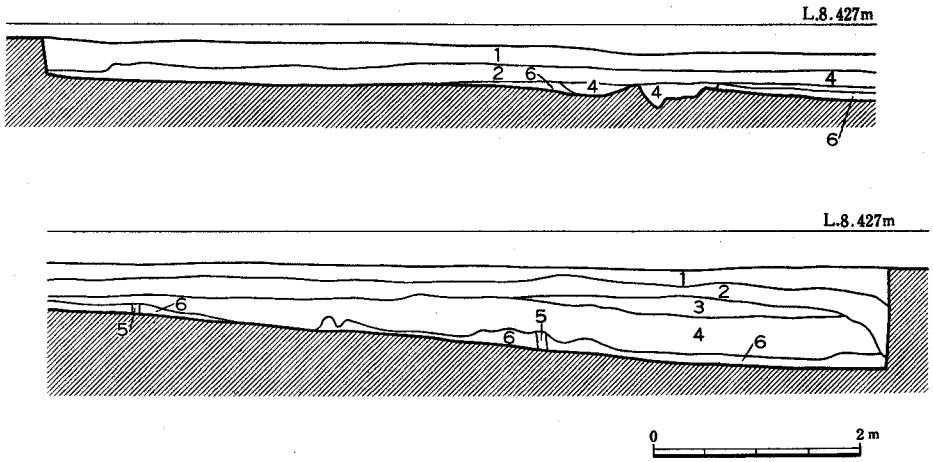


Fig. 61 調査地点現況図（縮尺1/500）

発掘調査は昭和54年8月23日より9月11日迄の17日間行った。屋敷内につき，排土は全て搬出し，作業を円滑に行うよう計った。東，西壁の土層観察によれば，第1層



土　層　名　称

第1層	表　土	第2層	旧耕作土
第3層	暗茶褐色粘質土	第4層	包含層黒褐色粘質土
第5層	柱　穴	第6層	地山褐色粘質土（ローム）

Fig. 62 西　壁　土　層　図（縮尺1/100）

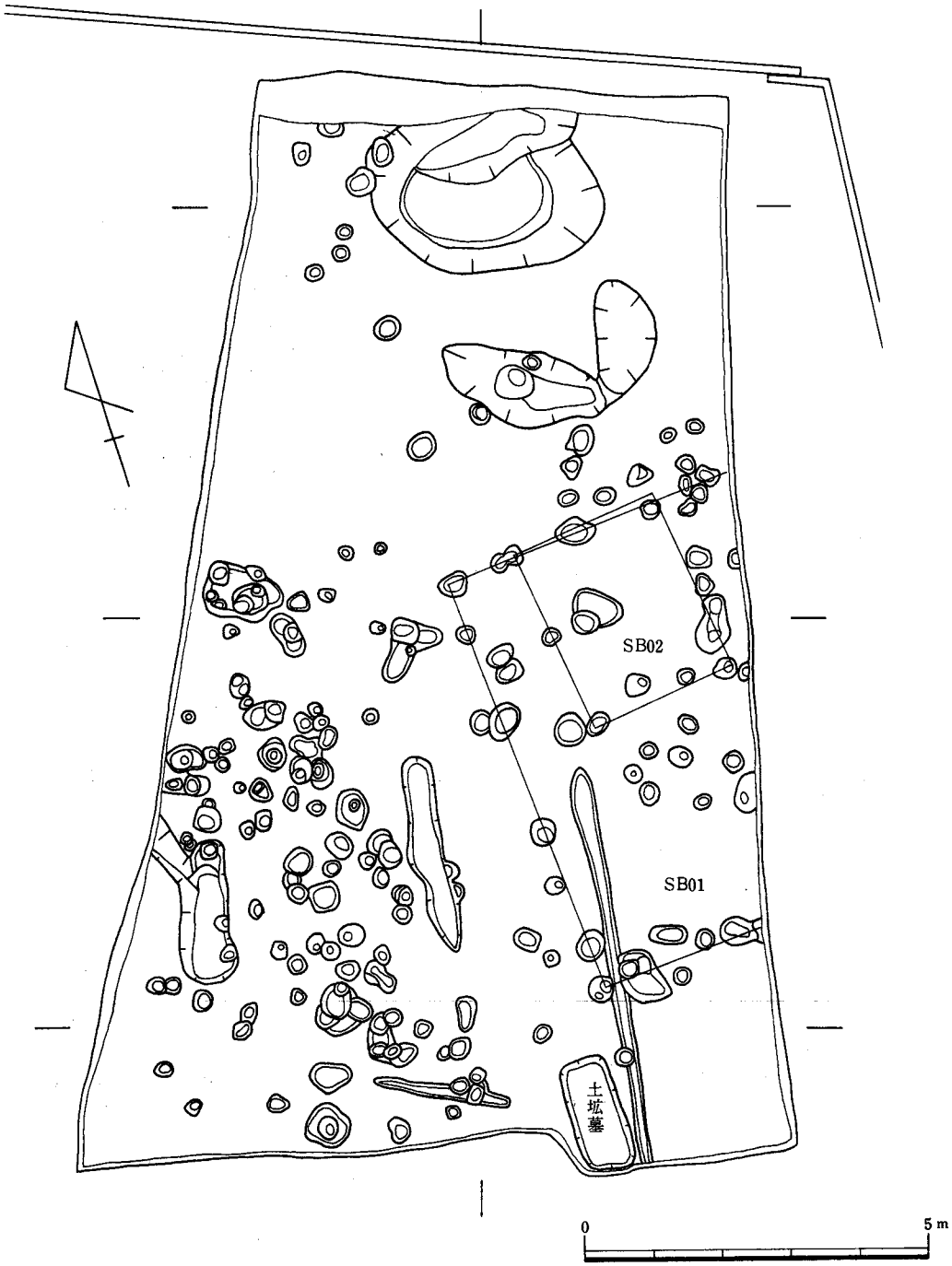


Fig. 63 遺 構 配 置 図（縮尺1/100）

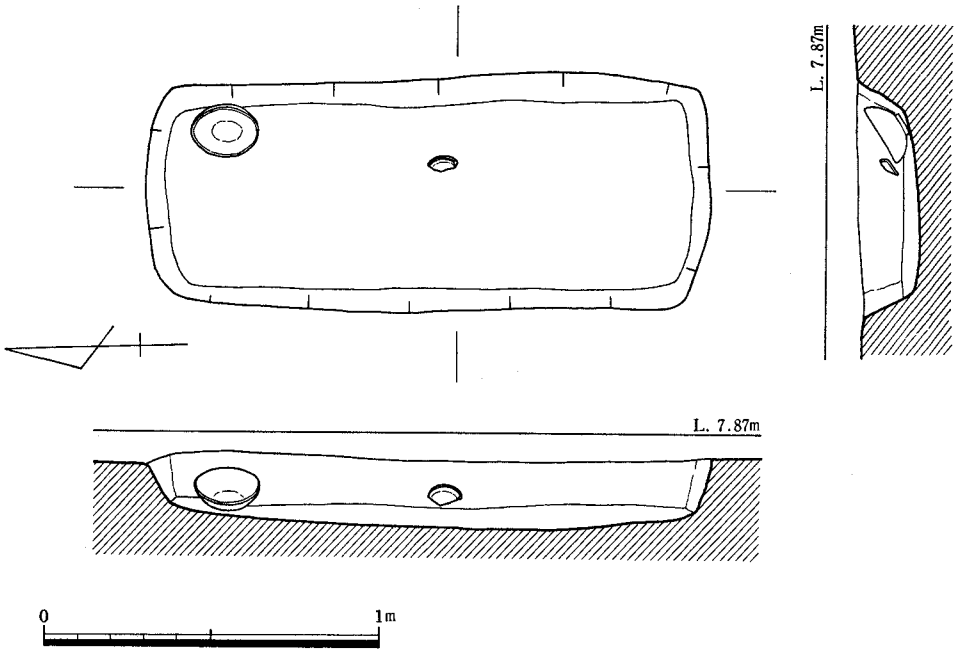


Fig. 64　土 壙 墓 実 測 図（縮尺1/40）

一盛土(表土),第2層—耕作土,第3層—客土，第4層—包含層，第6層—地山(ローム層),の層序である。包含層は，南側には全くみられず，北側へ厚く堆積する。また地山のローム層も北へ傾斜し，南北の比高差は約60*cm*を測る。遺構は，やはり傾斜地の北側に比べ，南半に多く集中する。南半は削平を受けてはいるようだが，遺構の残りは良好であった。検出した遺構は土壙墓1基，掘立柱建物2～3棟である。遺物は少なく，図示できるものは稀かであった。

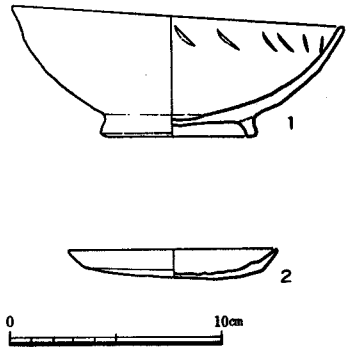


Fig. 65　土壙墓出土遺物（縮尺1/3）

検　出　遺　構

土壙墓 (Fig. 64, PL. 37)

主軸をほぼ南北に定めた，長さ1.70*m*，幅73*cm*，深さ23*cm*を測る隅丸長方形の土壙墓である。上部は削平されており，底部は舟底形に仕上げている。覆土は黒褐色の粘質土が充填されており，粘土等の施設はみられなかった。土壙の北東部分には東側壁に沿って，椀形土器が副葬されていた。また土壙墓覆土中からも土師皿 (Fig. 65-2) の出土をみたが，これも当初の副葬品の可能性がある。主軸は N 3°10′E である。

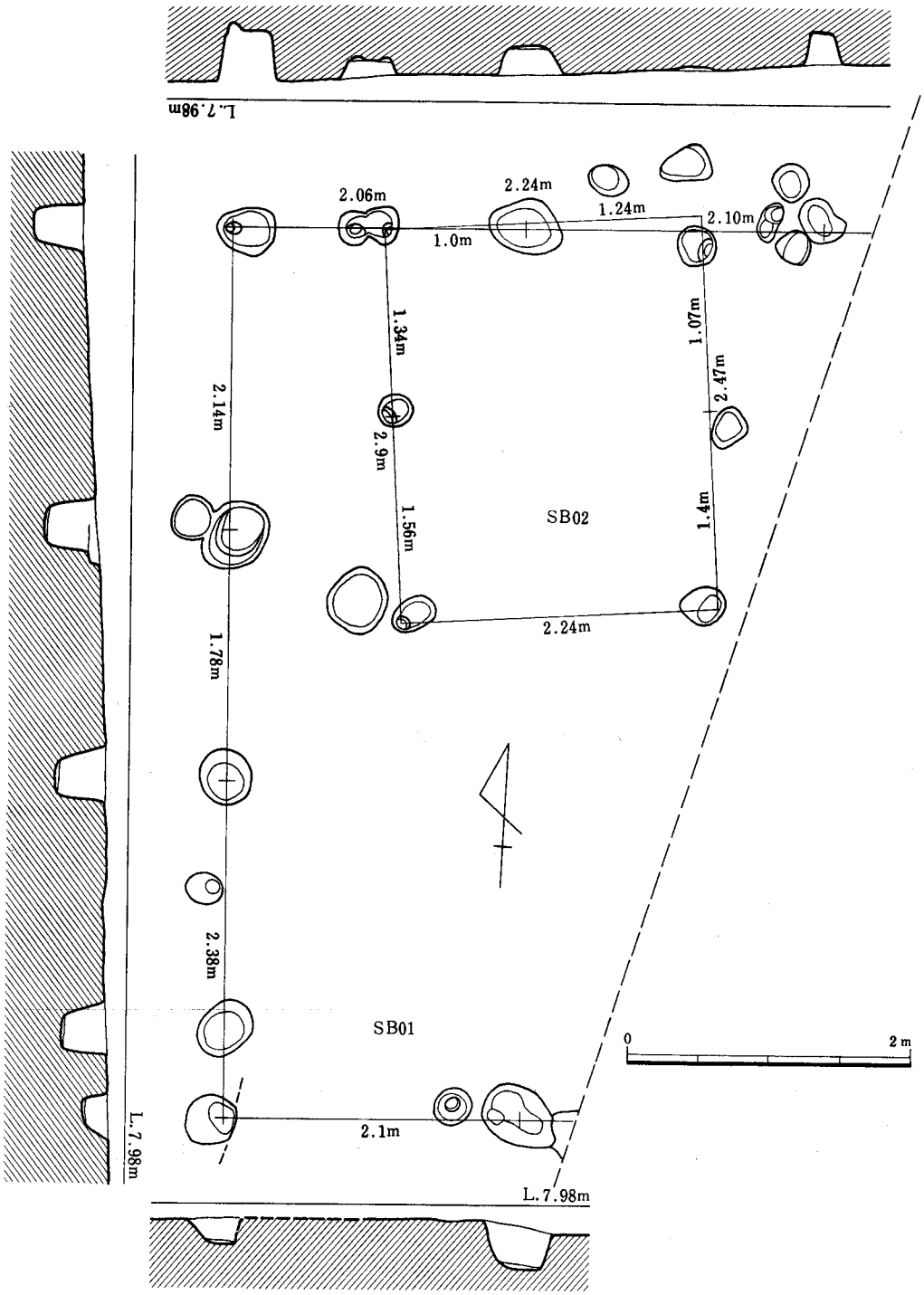


Fig. 66 掘立柱建物 SB 01, 02 (縮尺1/40)

掘立柱建物 (Fig. 66, PL. 36-2)

〔**SB 01**〕 調査区の東側で検出されたが，未発掘部分に伸びており，規模は不明。梁行は2間以上で，桁行は3間である。梁間2.08*m*，桁行1.98*m*～2.14*m*，柱穴径30*cm*～50*cm*，深さ30*cm*～50*cm*を測る。主軸をほぼ南北（N 30°10′W）方向へ定める。

〔**SB 02**〕 SB 01 と切り合うもので，梁行1間，桁行2間の建物である。梁行22.4*m*，桁行1.32*m*～1.48*m*，柱穴径は20*cm*～25*cm*の建物である。東側の桁間が線上に通らないので若干疑問も残るが，建物とし報告したい。主軸を N 50°30′W におく。

出　土　遺　物

土壙墓出土遺物 (Fig. 65-1, 2, PL. 37-1, 2)

土師器

「高台付椀」（1）内外をヘラ磨きされた後，真黒色に燻された土器で，口径15.6*cm*を，器高5.5*cm*を測る。高台は外へやや張ったコ字形の台で，体部は丸みをもって立ち上がり，口縁端部は丸くおさまる。底部の器肉は薄い。内面上位にはヘラ研磨による長さ1.5*cm*のキズが残されている。胎土に砂粒を多く含む。

「皿」（2）口径10*cm*，器高1.5*cm*を測る。底部はヘラ切り離しをされており，内面および体部は横方向のナデ調整である。胎土に石英粒を多く含み，黄褐色を呈す。

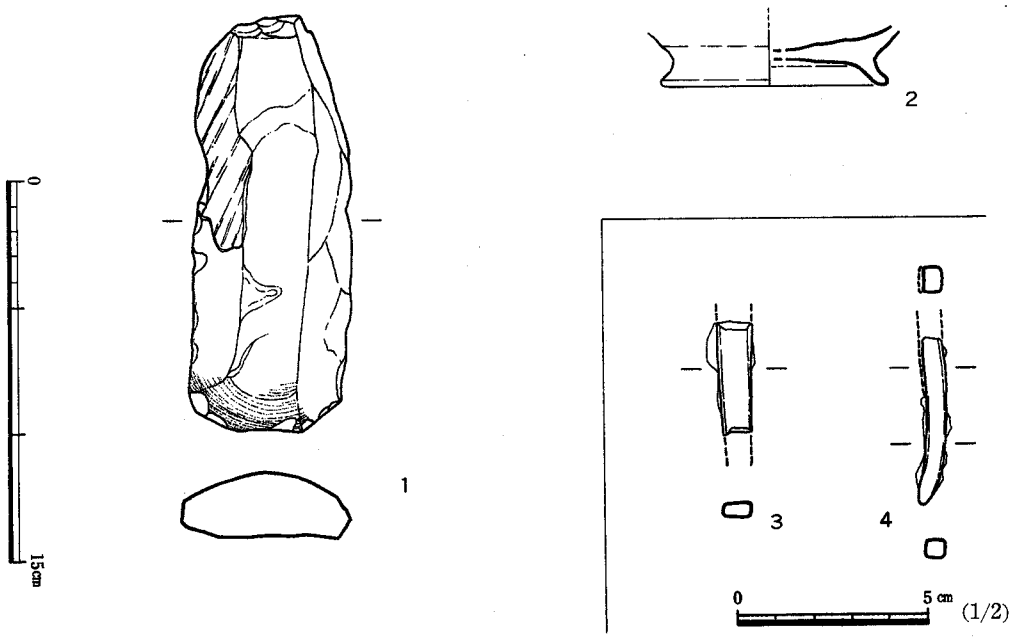


Fig. 67　出　土　遺　物（縮尺1/3）

その他の遺物 (Fig. 67, PL .37)

いずれも柱穴からの出土である。

石　器　(1) 蛇紋岩製の石器で，自然面，荒割面をそのまま残している。先端部は磨滅がみられ，研磨を施したのかもしれない。形態的には石斧にみられるが，石材が特に軟かく，石斧としての用途よりも擦り石としての利用が考えられる。長さ16.5*cm*，幅6.2*cm*，厚さ2.7*cm*を測る。

土師器　(2) 外へ大きく張ったやや高い高台を有する椀の破片である。焼成は弱く全体が磨滅している。胎土に砂を少し含み，褐色を呈する。

鉄製品　(3・4) 3の断面は長方形を，4は方形を呈す。3は鉄鏃の柄部とも考えられ，4は先端の曲がりなどから釘が考えられる。

小　　結

今回の調査地点は，小田部地区においても一段高い舌状台地上にあたっている。調査地の北は傾斜地になるところから，遺構は南に拡がるようである。掘立柱建物は，報告した他にも図上での復元が可能である。時代については，遺物が少なく決め手にならないが，Fig. 67 の高台付椀の出土から奈良時代前後が考えられよう。土壙墓は，その出土遺物から11c末から12c初頭頃にその年代を求めることができる。

8. 第27次調査

調 査 の 概 要

発掘調査対象地は，福岡市西区小田部５丁目241に所在し，対象面積は244 m² である。

第25次調査地点の東南に隣接する。当該地の東は谷になっており，傾斜変換点に位置する。現標高6.50*m*前後を測る。昭和54年度の建築確認が申請されたので，試掘調査を行った。試掘調査は南北方向に二本のトレンチを平行して設定し，地山迄掘削を行った。

地山のローム層は地表から50*cm*～60*cm*下に表出し，北東方向に傾斜する。申請地の西側は，削平を受けており遺構は少なかった。東側のトレンチの南端において遺構を確認したので，昭和54年度の事業として発掘調査を実施した。

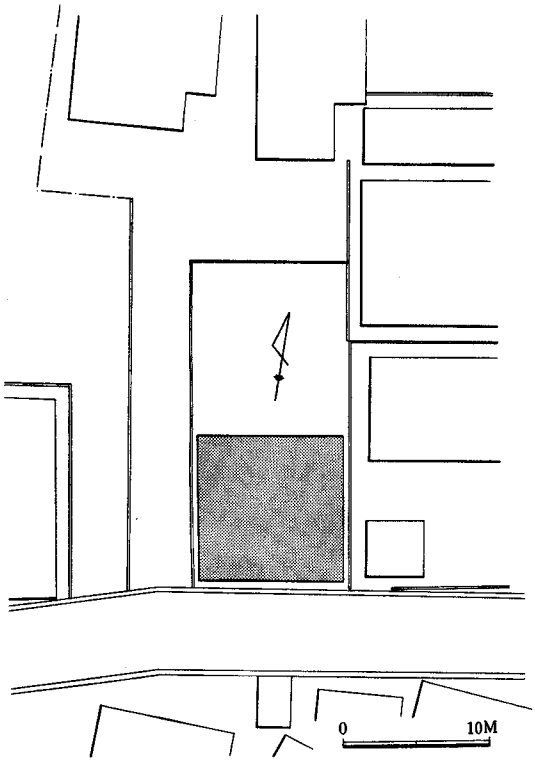
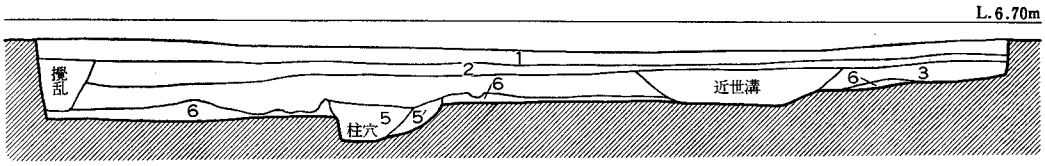
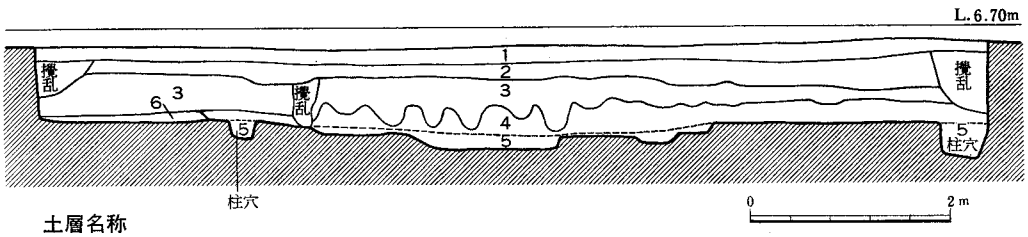


Fig. 68 調査地点現況図（縮尺1/500）

発掘調査は９月10日～９月17日の６日間実施した。土層の観察によれば，第１層は40*cm*～50





土層名称

第１層　表　土　　第２層　旧耕作土　　第３層　暗茶褐色粘質土　　第４層　黒色粘質土（褐色を帯びる）包含層　　第５層　黒色粘質土（真黒）遺構　　第６層　地山（ローム層）

Fig. 69 南　壁　土　層　図（縮尺1/100）

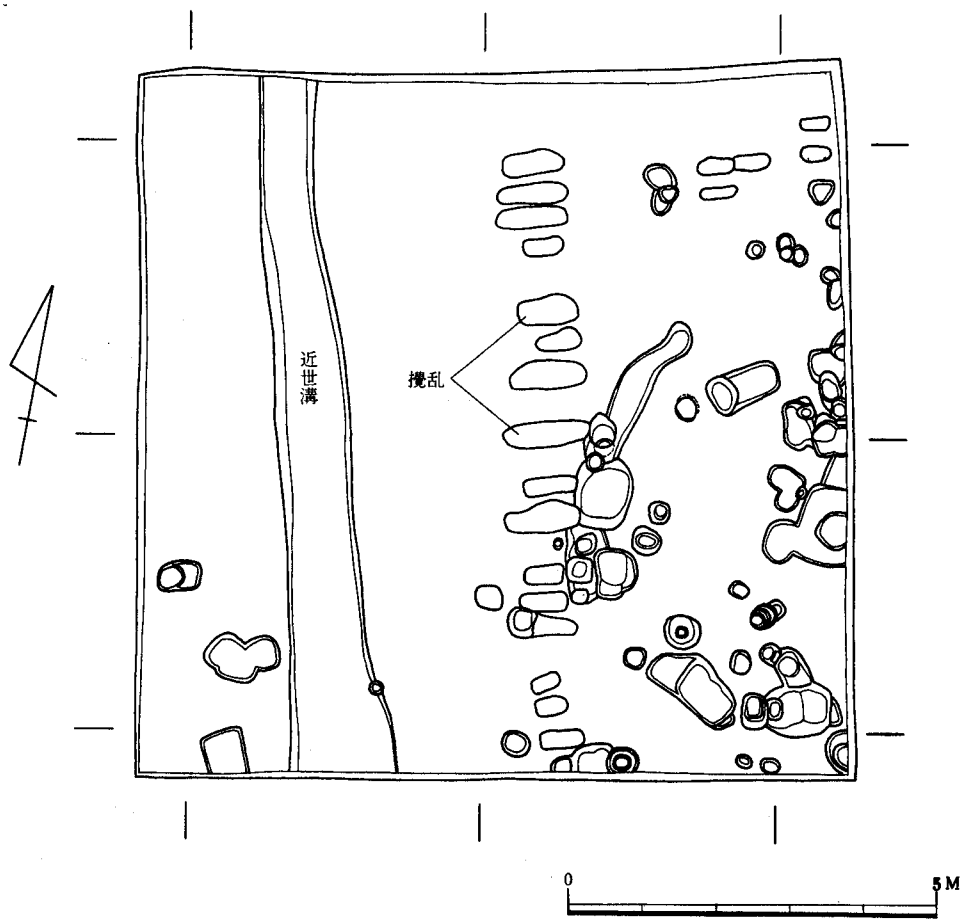


Fig. 70 遺 構 配 置 図（縮尺1/100）

cmの厚さの客土である。第2層は耕作土で，約20cmの厚さである。第3層は暗茶褐色粘質土で，ロームおよび炭化物を含んだ包含層である。この第3層は，西側では削平されて存在しない。第4層は黒色粘質土層で，第3層との境が一定しないのは，上からの汚染によるものだろう。この第4層は，遺構内の覆土と同一層であるため，遺構の前後関係の判別は困難であった。遺構は柱穴群と小型方形の土壙とによって構成される。

検 出 遺 構

住居跡状遺構 (Fig. 71, PL. 39)

柱穴群は発掘地の東西隅に集中しており，柱穴径30cm～50cm，深さ20cm～30cmを測る。環状に巡る柱穴もあり，また土壙より泥岩製の砥石などが出土しているなど，住居跡として考える要素が多い。

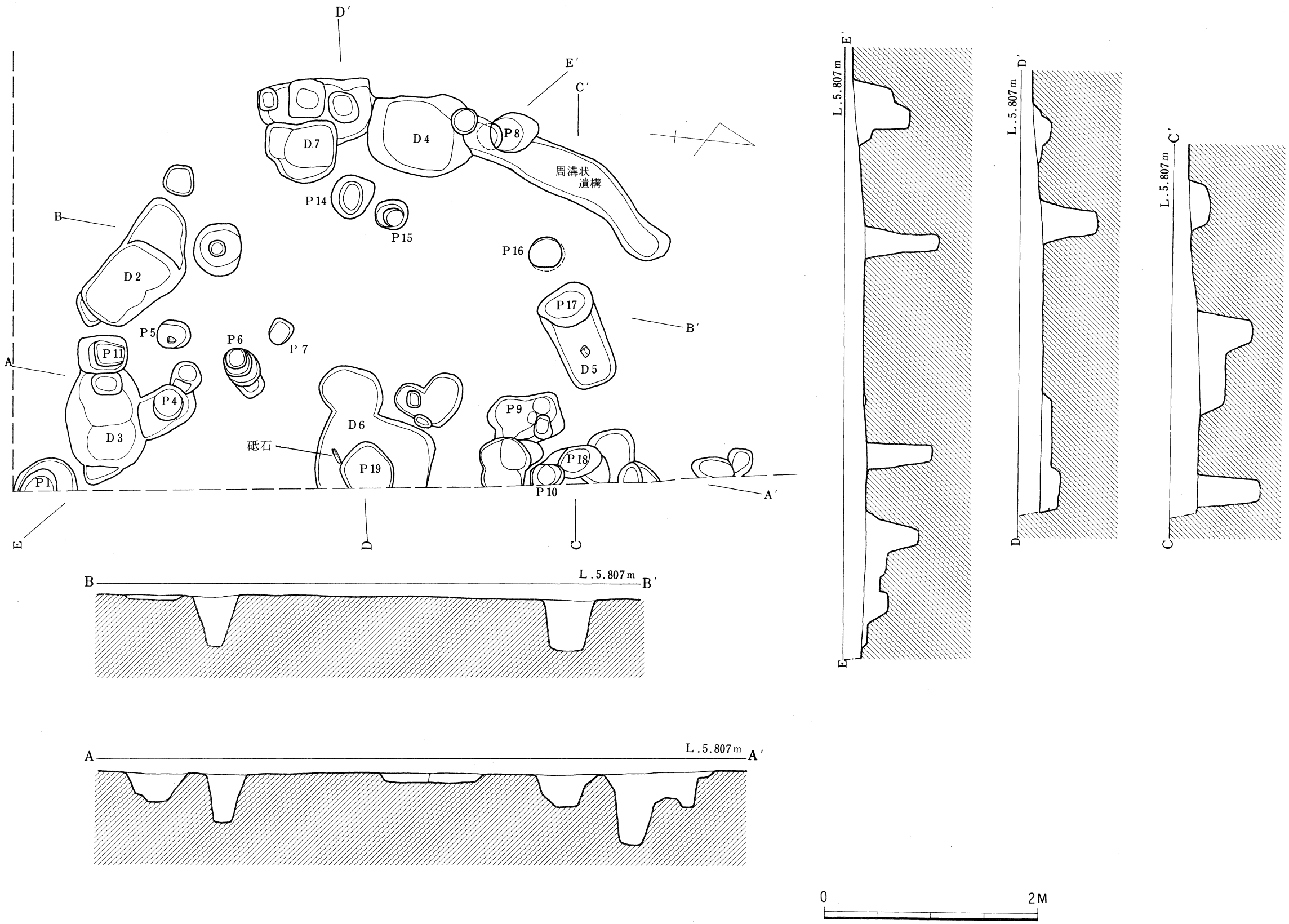


Fig. 72　住居跡状遺構実測図　（縮尺1/40）

（レベル水準 5,807cm を基準）

pit 番号	径(cm)	深さ(cm)	形　態	遺　物
P－4	40	上—15 下—63	円　形	
P－5	26×32	上—13 下—？	隅丸方形	
P－6	30×40	上—13 下—74.5	円　形	高杯・脚 弥生時代 中期後半
P－11	36×46	上—14 下—68	隅丸方形	
P－12	46×50	上—7.5 下—62	円　形	
P－13	25×20	上—12.5 下—26	隅丸方形	
P－14	36×42	上—7 下—62.5	円　形	
P－15	28×30	上—10 下—78.5	円　形	
P－16	30	上—12.5 下—46	円　形	
P－17	38×52	上—14.5 下—65	楕円形	
P－18	28×42	上—16 下—73	楕円形	
P－19	44×50 ？	上—15 下—27	楕円形	
D－4	80×100？	上—0.7 下—30	隅丸方形	
D－5	50×80	上—16 下—41	隅丸方形	

表 4. 柱 穴 計 測 表

柱穴群は別図（Fig. 71）に示した通り，大型土壙D 1～D 6と径30～50*cm*を測る柱穴群によって構成され，環状に配置されている。大型の土壙，D 2・3・5・6は，いずれも土師器，須恵器を含んでおり，弥生時代には属さない。径30～50*cm*で，深さ50～70*cm*ほどの柱穴P 4・5・6・11・12・13・14・15・16・17・18は，D 6およびP 19をほぼ中心として環状にめぐっている。特に外側に廻るP 11・12・14・17・18は，深さの平均が60*cm*を測る。P 15は，深さ78.5*cm*を測り，他に比べ深く，時期差が考えられるかもしれない。この柱穴群の西側には幅40*cm*，深さ25*cm*の周溝状のものが巡る。複数の建て替えがあったとしても，これらの外周を巡る柱穴群が円形住居跡の主柱である可能性は充分にある。主柱とすれば，柱間の平均からP 12→15→17→18をめぐる主柱7～8本の住居跡と，P 11→14→17をめぐる主柱6本の住居跡，あるいはP 5→14→17→18をめぐる主柱6本の住居跡が考えられる。先の周溝状遺構の弧形から，径を割出すと，直径7.2*cm*の円形のプランが復元できる。さらに，周溝状遺構と同じ中心的を用い，柱穴P 14とP 15の中心に合わせ，各々，径5*m*と径4.64*m*の弧をえがくとP 11→14→17，P 5→15→17の2つのほぼ等間隔に連続する環状柱穴群が抽出できる。以上のことから，このpit群は少なくとも1回の立て替えを行った径7*m*前後の円形住居跡を現わすものとして考えて良いだろう。また，炉跡などは検出できなかったが，P 19，D 6はこの環状柱穴群に併なうものと考える。なお，D 6は土師器が出土しているが，他の柱穴と切り合っており，泥岩製の砥石の出土からみて弥生時代の遺構とみて良いだろう。覆土は焼土が混じっていたので炉跡の可能性がある。P 6からは「く字形」に屈折する甕形土器片の出土があった。

出　土　遺　物（Fig. 72, PL. 40）

弥生式土器

「甕形土器」（1，3）　1は口径30*cm*を測る甕形土器である。口縁は「く字形」で，端部は

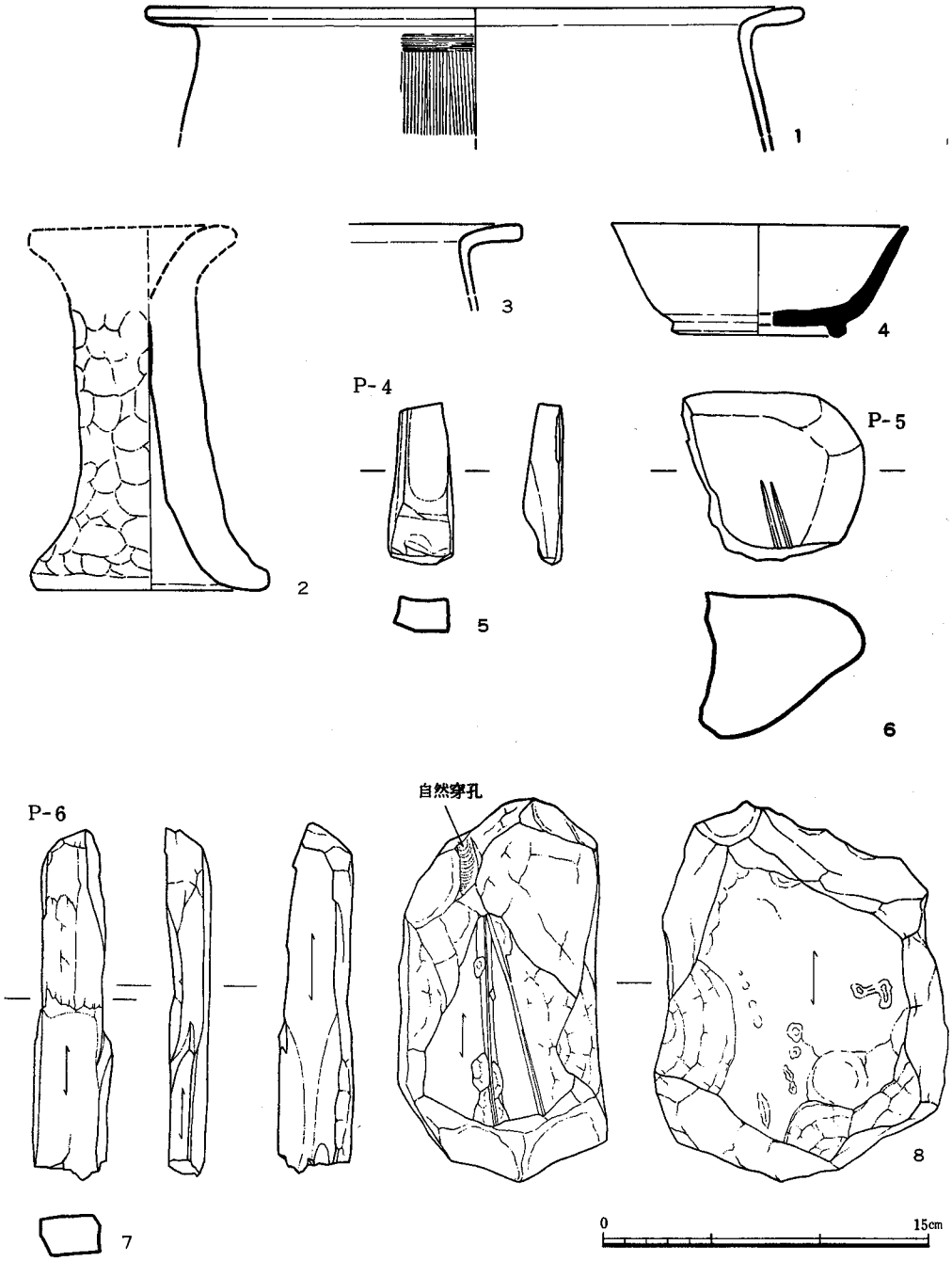


Fig. 72 出 土 遺 物（縮尺1/3）

肥厚する。外面は明るい茶褐色を呈し，内面は赤橙色を呈す。胎土に砂粒を含む。焼成良好である。3も同じ器形を示す甕形土器で端部は肥厚する。1，3共に包含層出土である。

「支脚形土器」(2)　口径11cm，復元高17cmを測る支脚形土器で，外面には指圧痕を残している。外面は黄褐色を呈し，二次的に火を受け，部分的に赤橙色を呈する。包含層出土である。

石器（5・6・7・8）

6はP5出土である。やや荒い砂岩を用いた砥石で，自然石を利用したものだろうか，不整形の礫状をなす。二面は平坦になっており，砥面として利用されたようだ。A面には，長さ4cm，幅2mm，深さ2mmの研磨痕の小溝が平行している。5，7は泥岩質の砥石で，本来同一の個体より分かれたものであろう。5は長さ16cm，幅3.5cm，厚さ2cmを測る柱状の砥石である。上下の側面は荒割りのままである。砥面は4面利用されている。節理面で破損し易いが，再加工し易い材料を用いている。7は長さ7.5cm，幅3cm，厚さ1.7cmを測る。4面を利用されており，A面は中央部分が窪んでいる。P4の出土である。8は包含層出土。中粒砂岩製である。長さ17cm，幅14cm，厚さ9cmを測る。全体は荒割によって成形しており，A面と左右側辺を砥石として利用している。左側辺には，長さ10cmの鋭く掘られた溝がある。金属製品の研磨に利用されたものと考えられる。砥面のA面は，凹凸もあるところから，工作台兼用として利用されたと考えられる。

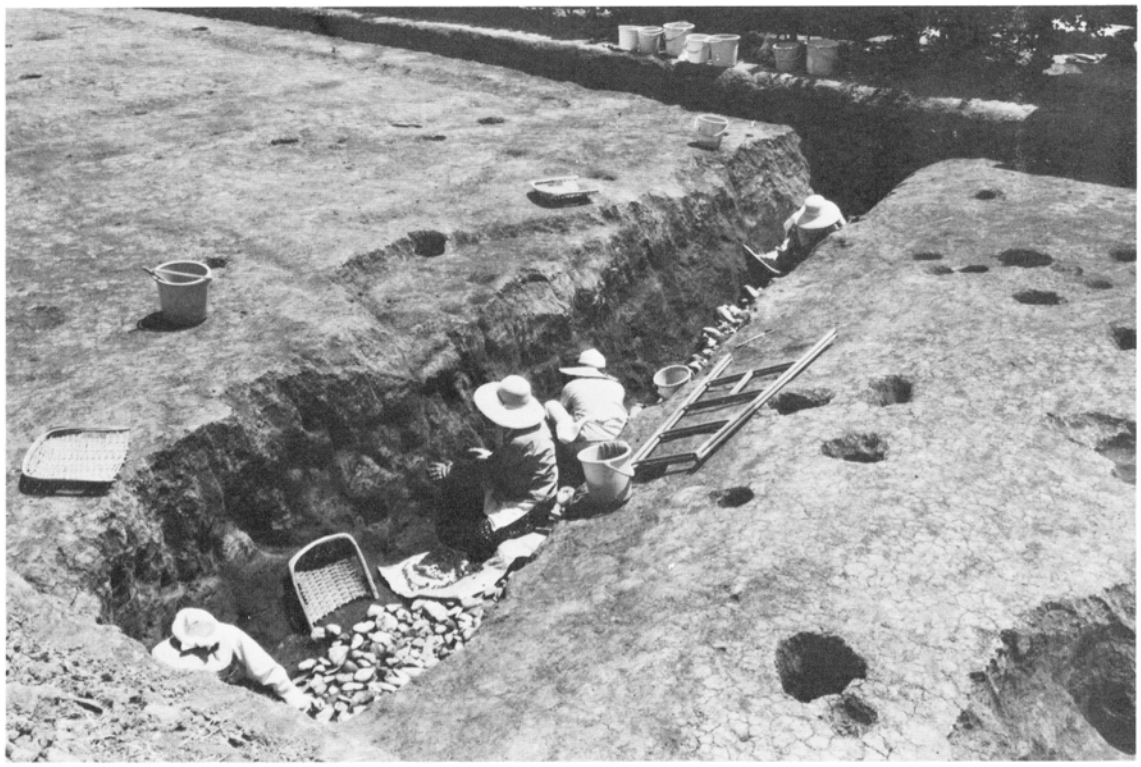
須恵器

「高台付椀」(4)　包含層出土である。復原口径13.5cm，器高5cmを測り，高台は低く，「コ字形」をなし，体部は直線的に立ち上がる。内外共に淡褐色を呈するが，内面は灰青色である。須恵器の赤焼けである。胎土に細い砂を少し含む。8世紀前半代の土器である。

小　　結

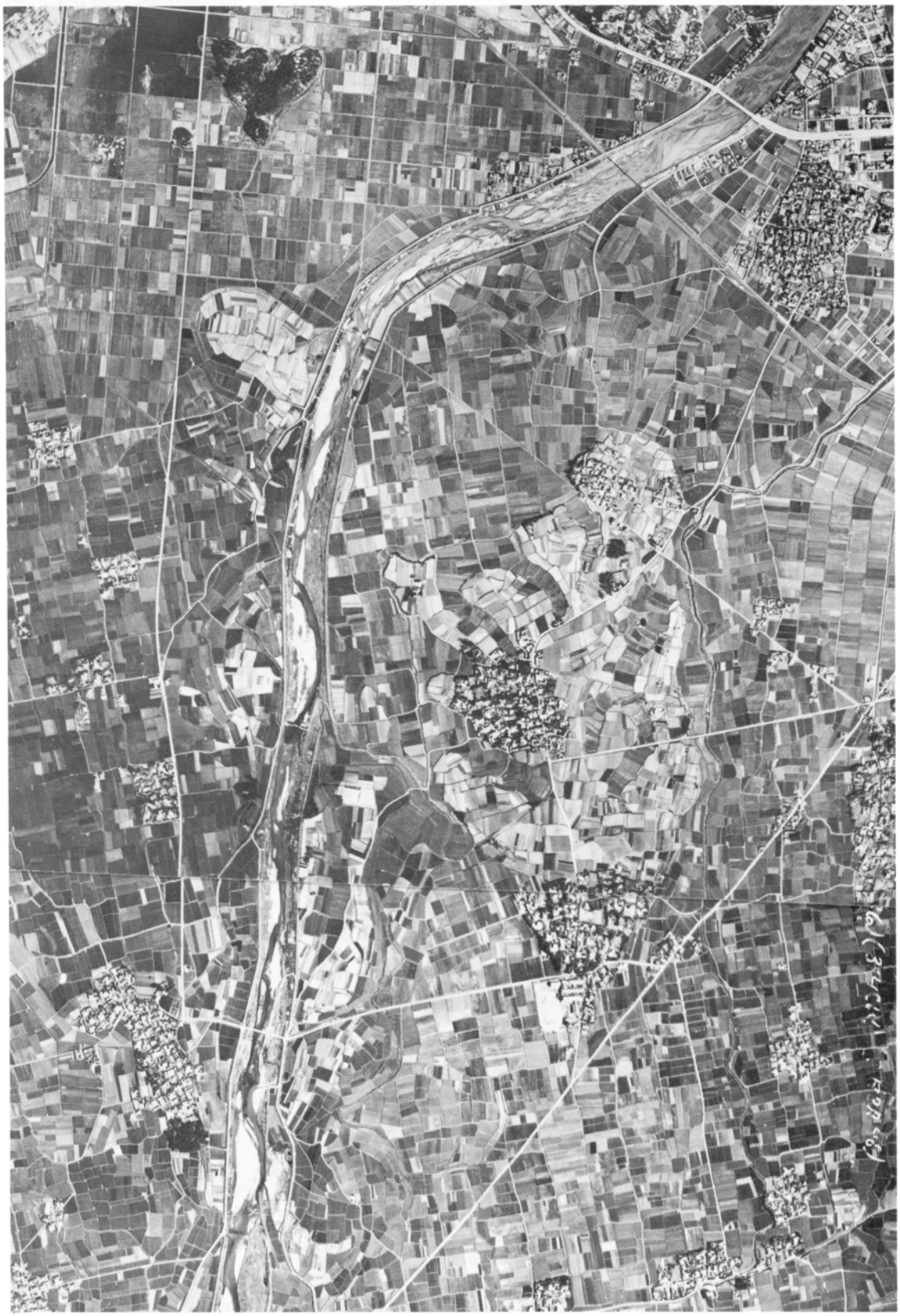
土壙のD2・3・4・5は幅50～80cm，長さ80～100cm，深さ30～40cmを測る。形状は楕円形状，あるいは隅丸方形をなし，舟底型の床面をもっている。主軸方向は一定しない。D2・3から土師器の出土があるので，古墳時代以降のものと考えたい。環状に巡るpit群については弥生時代に属すと考えられる。口径，深さの近似する柱穴が環状に並ぶこと，また，焼土をもったD6土壙の存在から径7m前後の円形住居跡の存在が推測された。環状に並ぶ柱穴から弥生時代の遺物の出土は少ない。しかし，P6出土の甕形土器は，弥生時代中期後半の時期に比定できる土器であり，また，包含層からも支脚形土器 (Fig. 72-2) などの同時期の破片が出土している。さらにこの調査地からは中期後半以前，以後の弥生式土器の検出はないので，推測される円形住居跡はほぼ中期後半の時期と考えて良いであろう。なお，包含層，およびpitから奈良時代の椀も出土しており，第25次調査と同様にこの一帯に奈良～平安時代の遺構の存在も推測できる。

図　　版



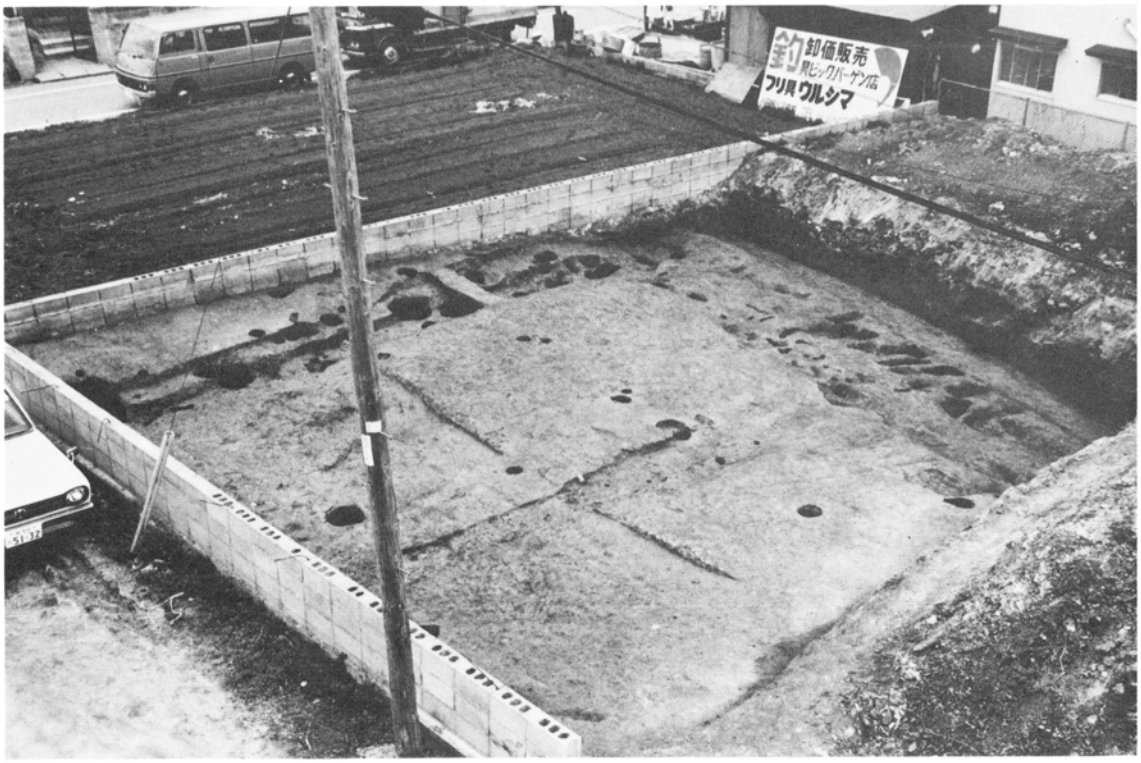
作 業 風 景(才23次調査) 昭和54年 8 月

有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）



有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）

1. 才17次調査　遺跡近景　　北より



2. 遺跡全景　　西より

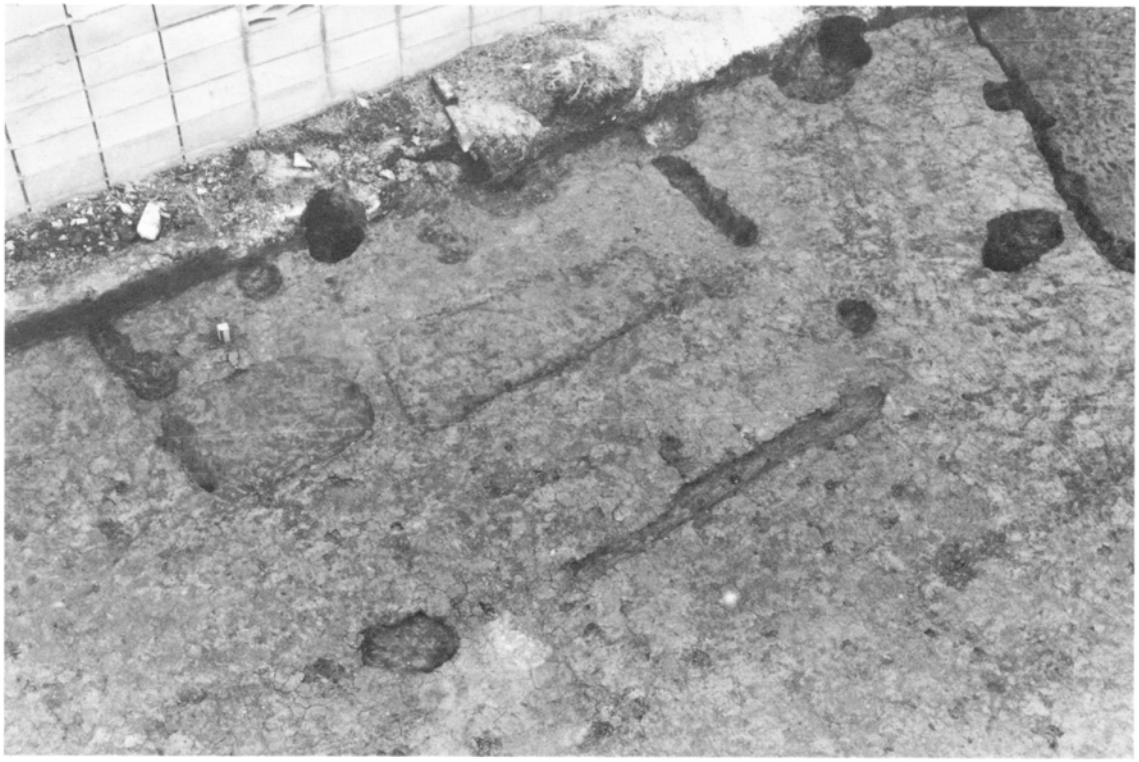
1. 中 世 溝　　西より

2. 土坑出土遺物

1. 才21次調査　発掘調査前　　西より

2. 遺 跡 全 景　　西より

1. 住 居 跡 1　　西より

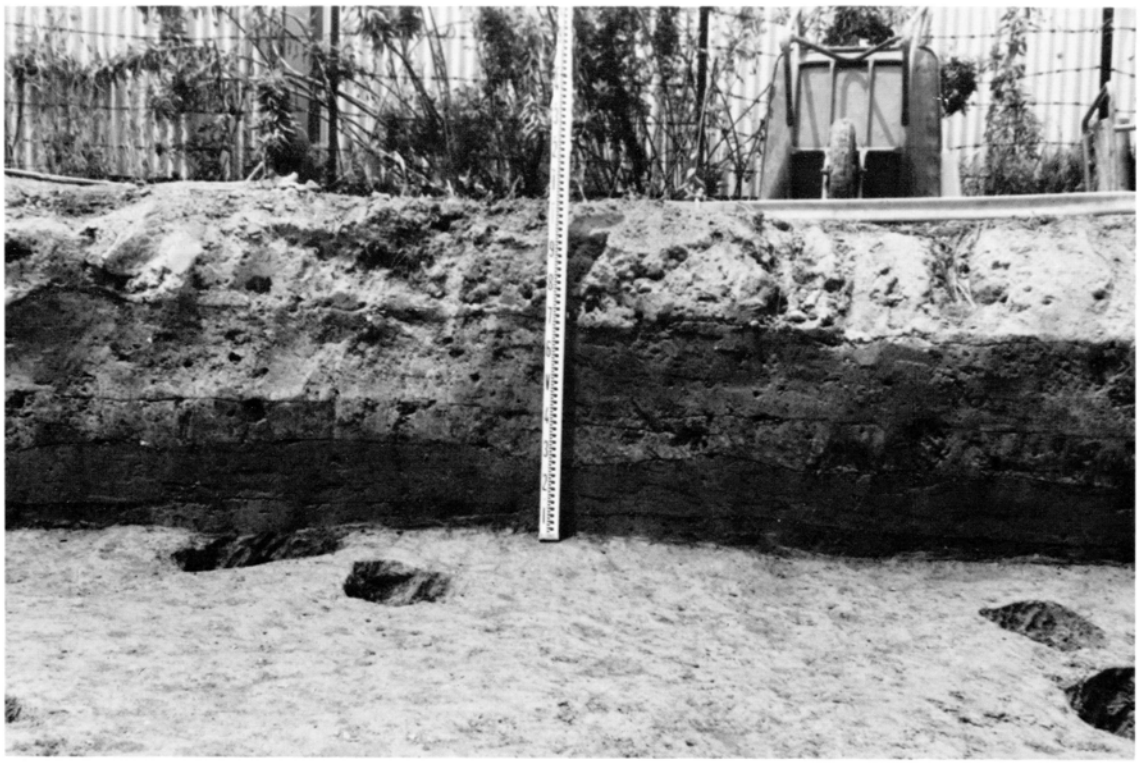


2. 住 居 跡 2　　西より

1. 掘立柱建物　　西より

2. 遺跡完掘状況　　西より

1. 才22次調査　遺跡全景　　南より

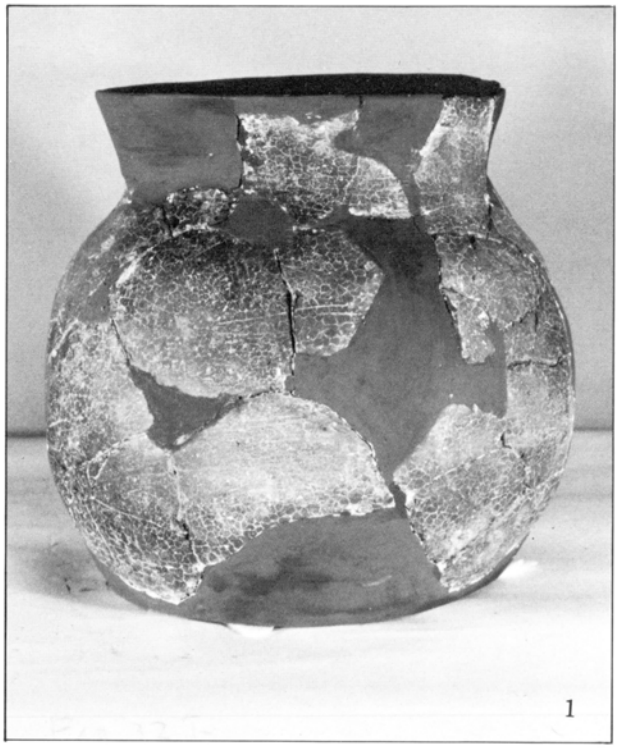


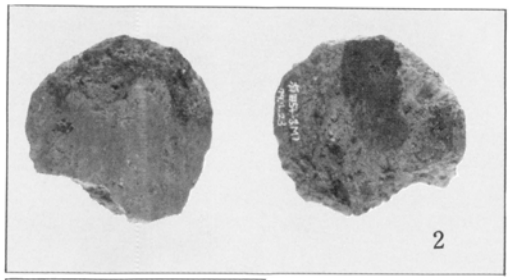
2. 土層の状態　西壁

1. 遺跡南半　　南より

2. 遺跡北半　　南より

1. 掘立柱建物　　西より





1. 甕形土器
2. 鞴羽口
3. 土錘(1/1)

2. 出土遺物

1. 才23次調査　発掘調査前　南東方向より

2. 遺跡南半　東より

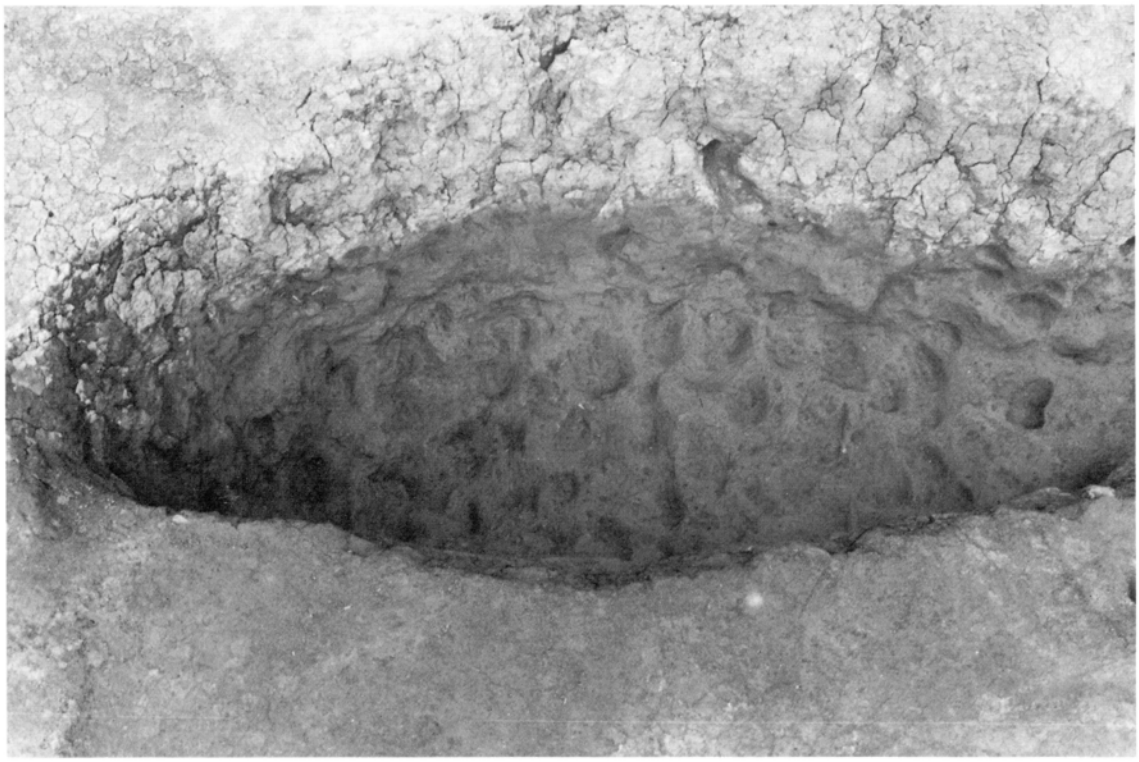
1. 溝 1·2·3　　北より

2. 溝 1·2·3　　南より

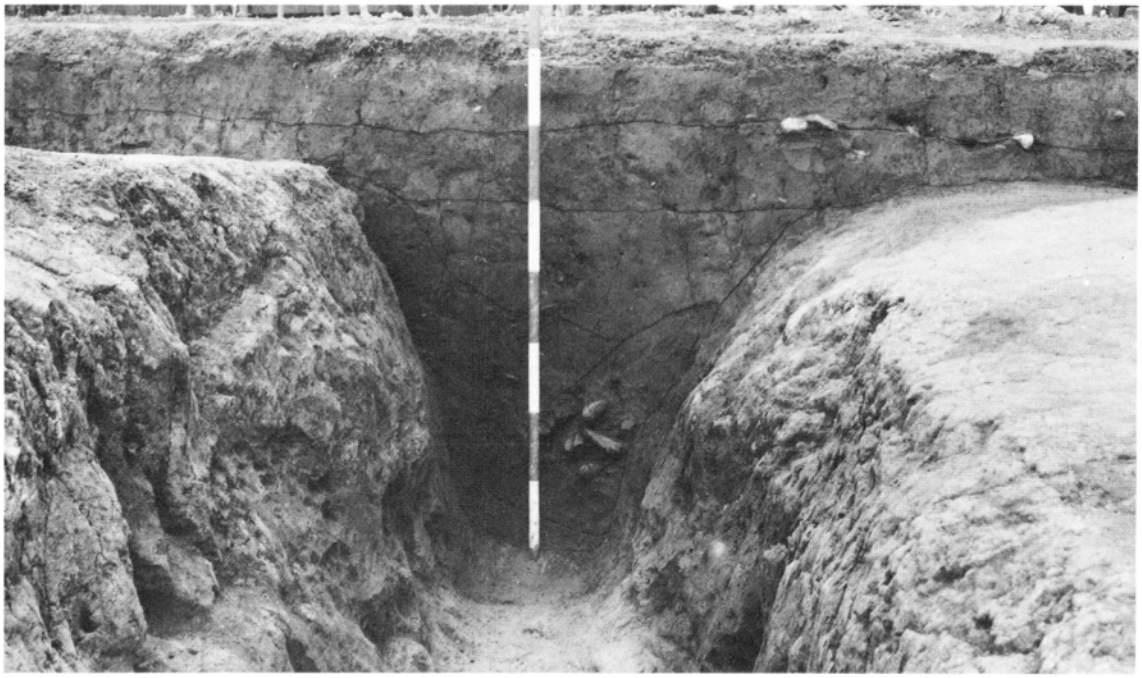
1. 溝1 北より

2. 溝2 北より

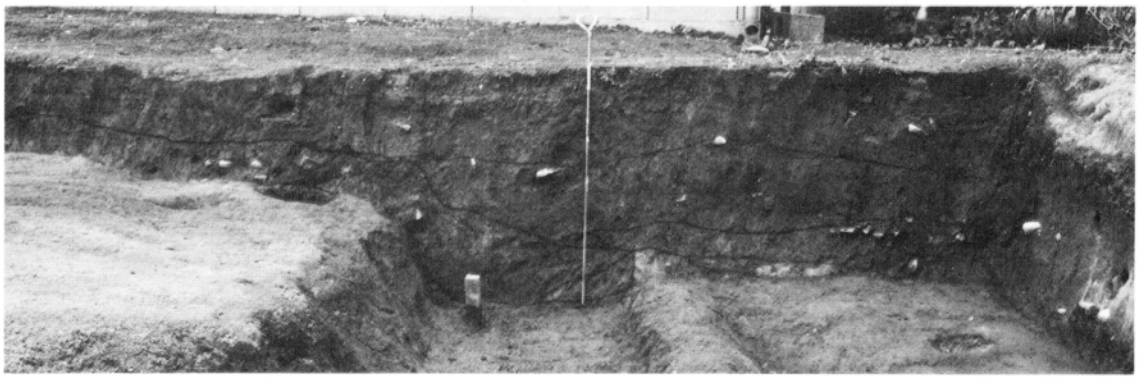
1. 溝1　先端部分　　東より



2. 溝1　先端部分礫取り上げ後　西より



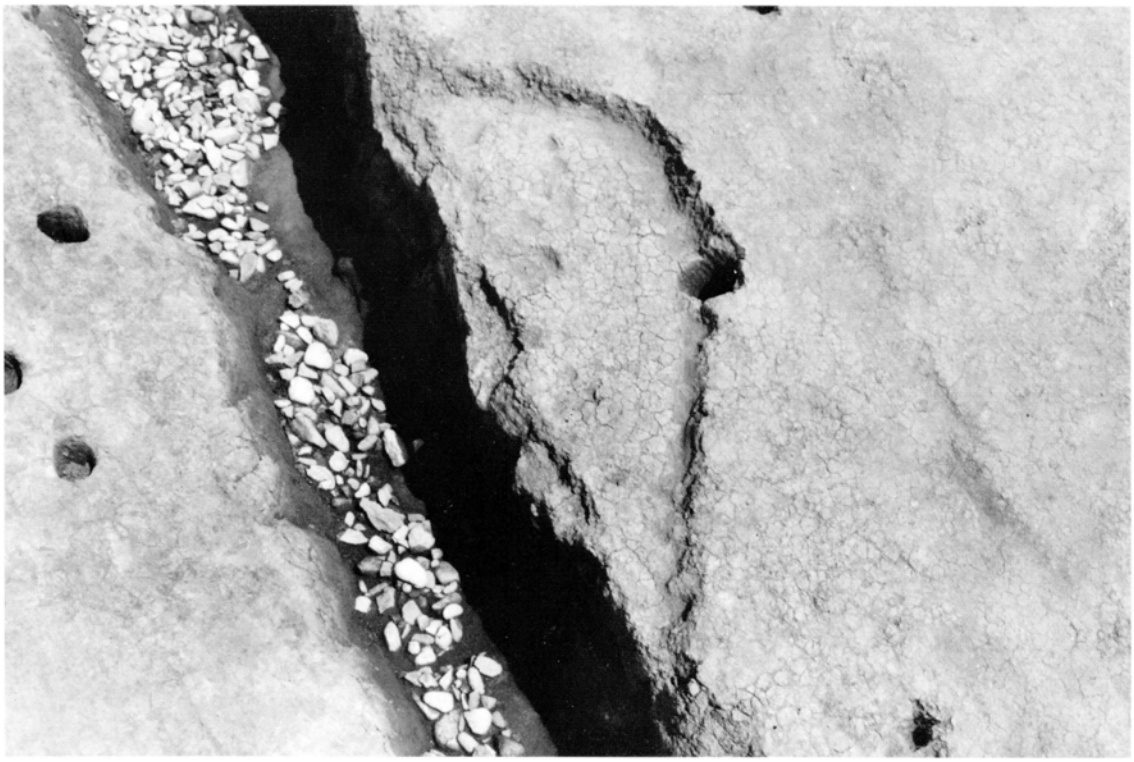
1. 溝1 土 層　　北より



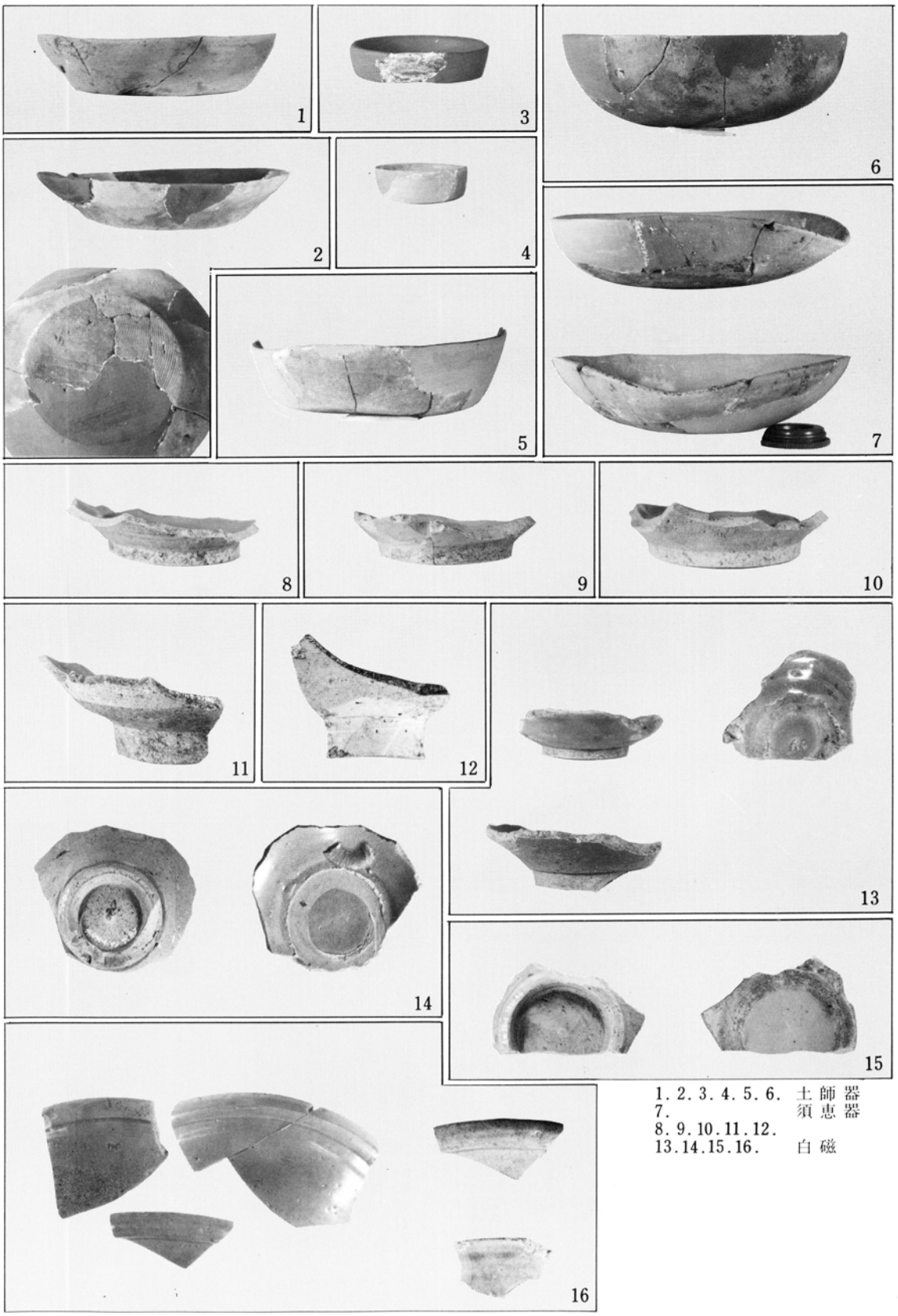
2. 溝2 土 層　　北より

3. 溝3 土 層　　南より

1. 溝1　遺物出土状態　　東より

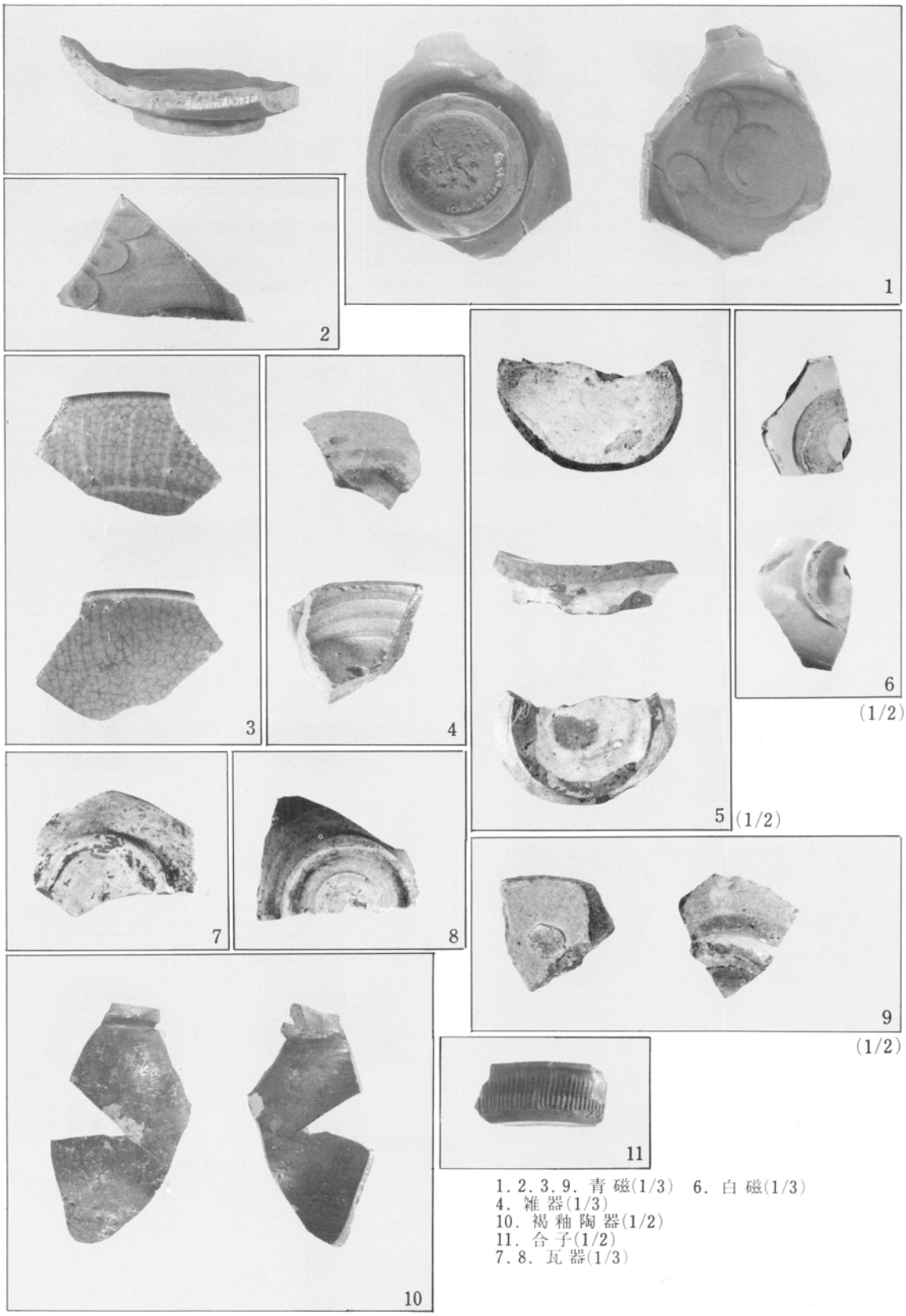


2. 住 居 跡　　南より



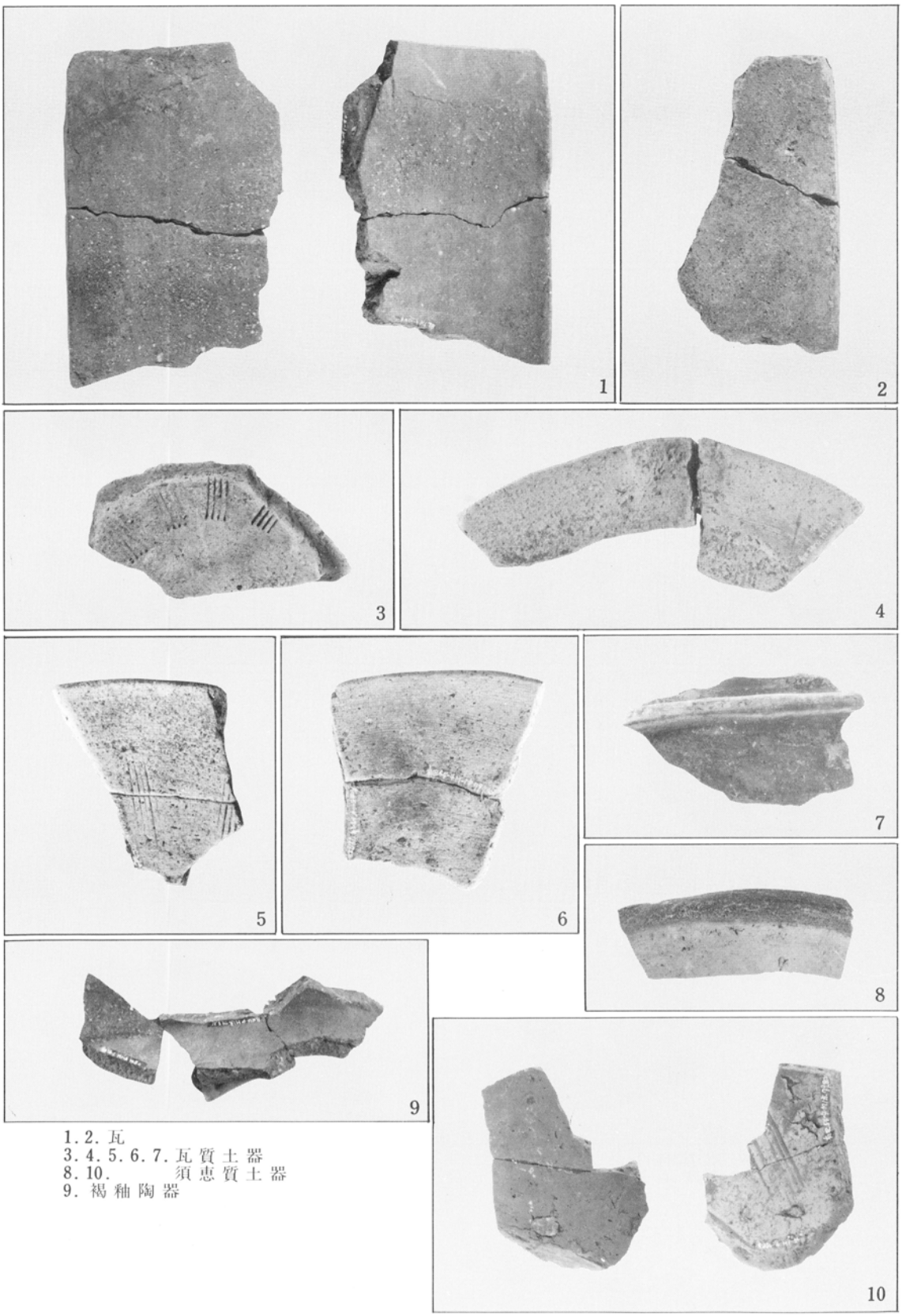
1. 2. 3. 4. 5. 6. 土師器
7. 須恵器
8. 9. 10. 11. 12.
13. 14. 15. 16. 白磁

出土遺物(1/3)



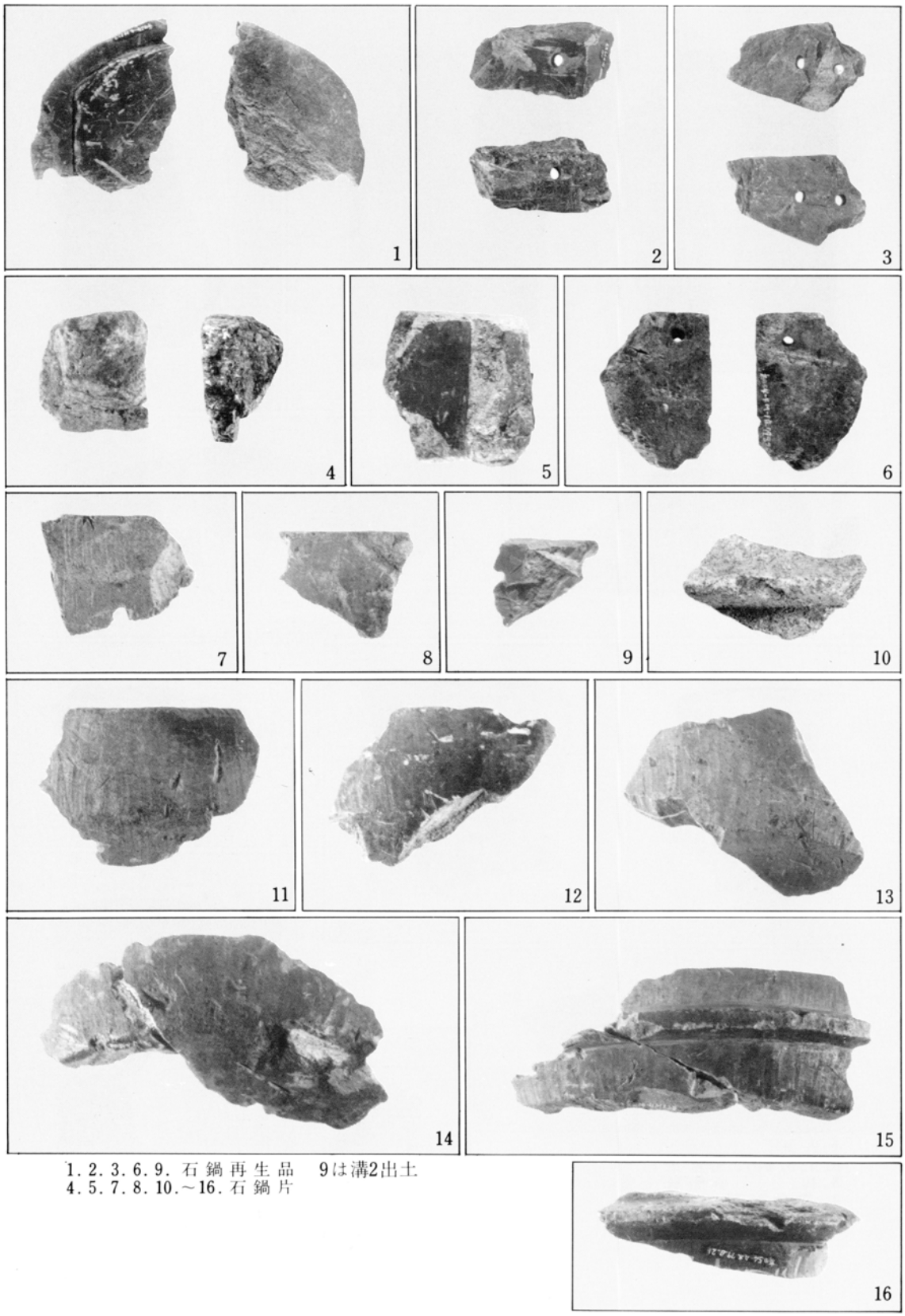
1. 2. 3. 9. 青磁(1/3)　6. 白磁(1/3)
4. 雑器(1/3)
10. 褐釉陶器(1/2)
11. 合子(1/2)
7. 8. 瓦器(1/3)

出土遺物



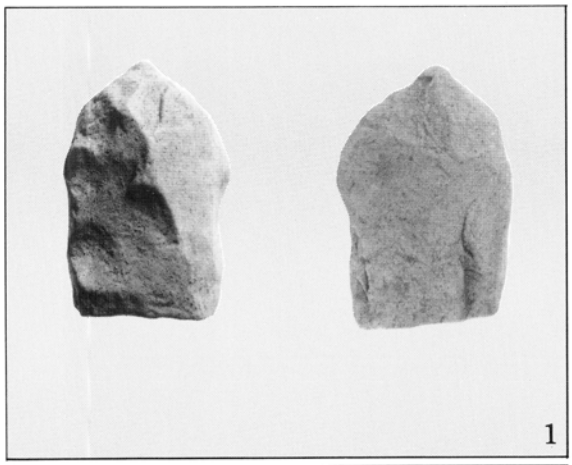
1. 2. 瓦
3. 4. 5. 6. 7. 瓦質土器
8. 10. 須恵質土器
9. 褐釉陶器

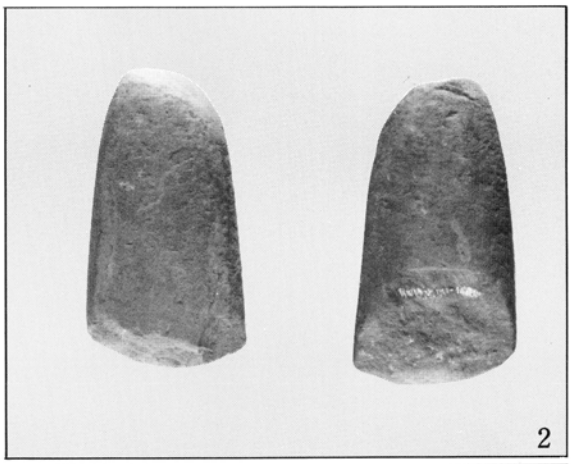
出土遺物(1/3)

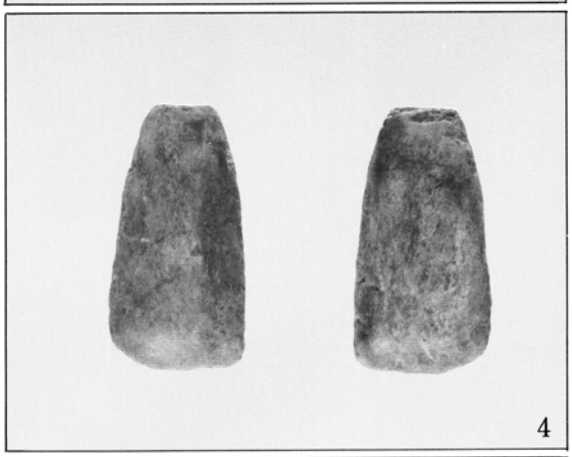


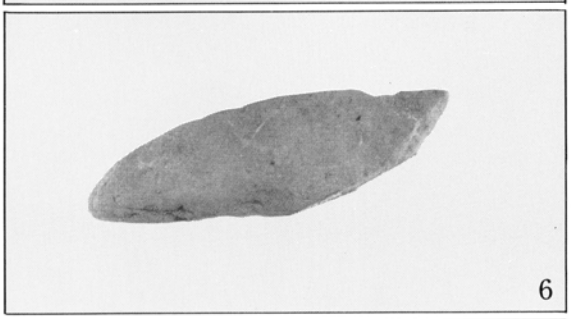
1. 2. 3. 6. 9. 石鍋再生品　9は溝2出土
4. 5. 7. 8. 10.～16. 石鍋片

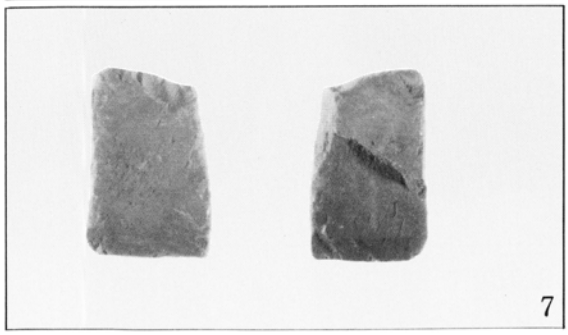
出土遺物　滑石製品(1/3)

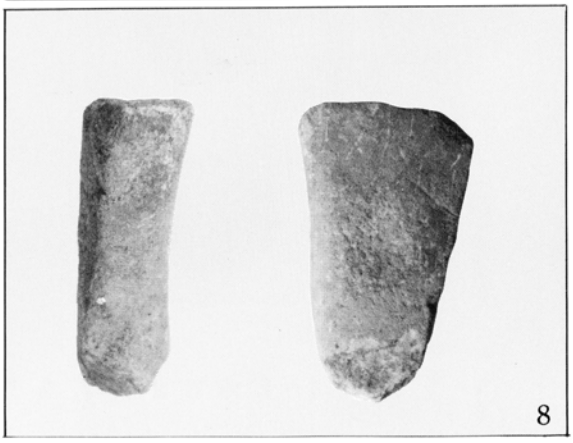




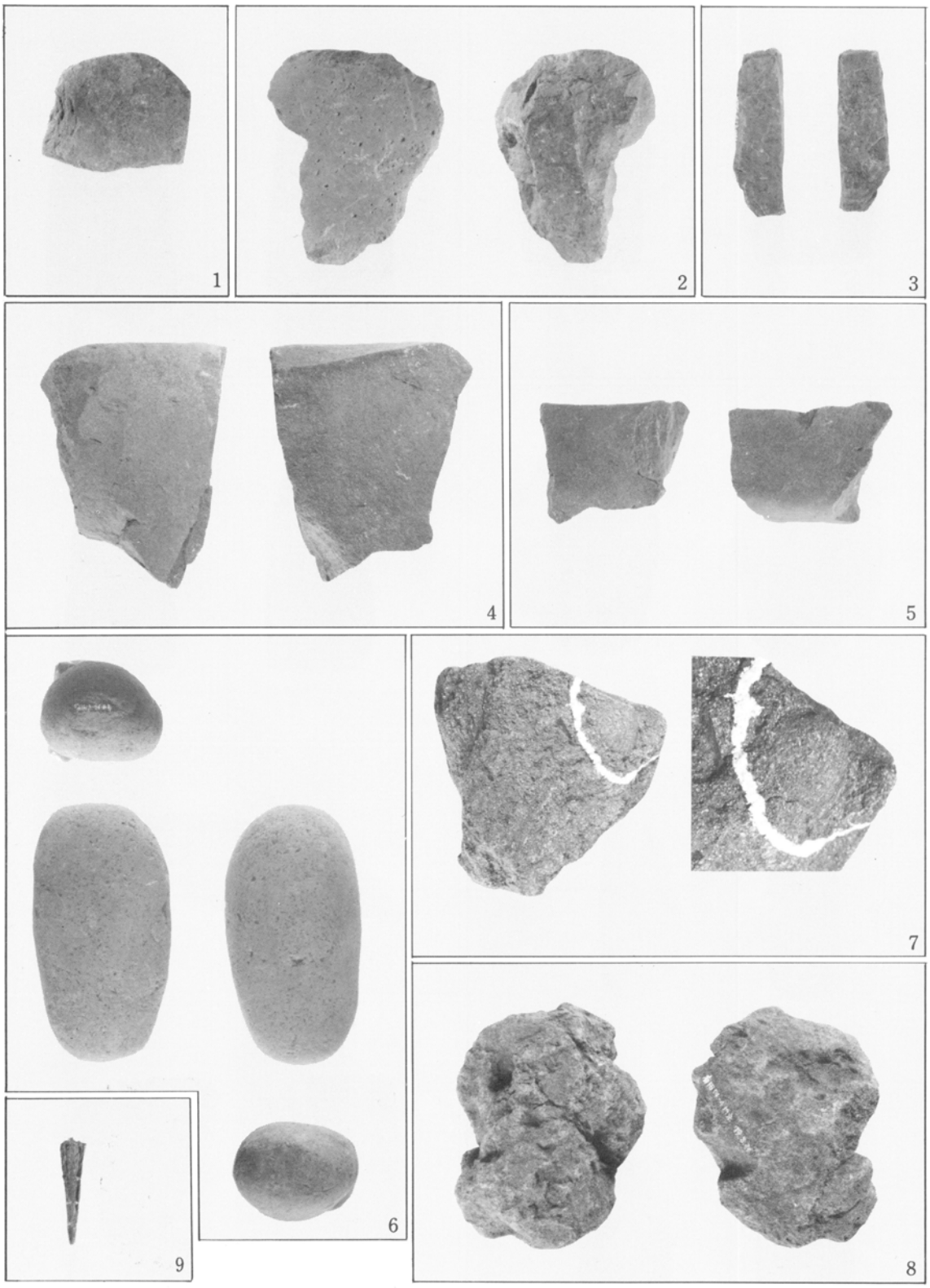








出土遺物　石器(1/3)

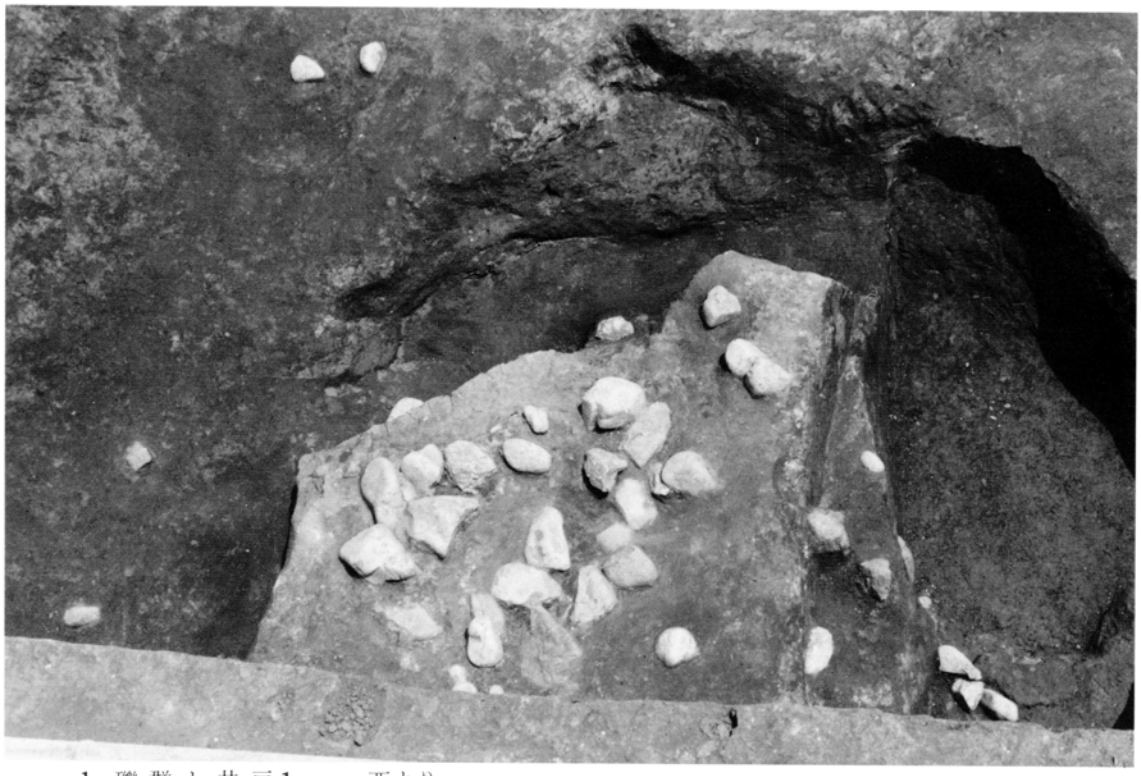


1～6 石器　7～8 砂岩自然礫　7 貝化石
9 鉄器(1/2)

出土遺物(1/3)

1. 才24次調査　発掘調査前　　北より

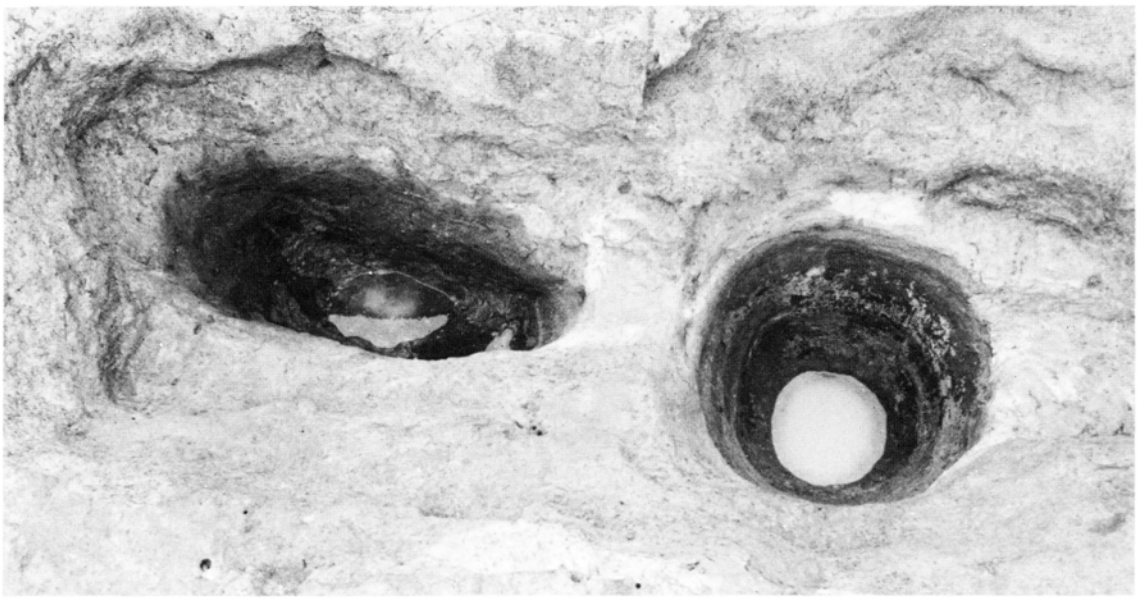
2. 濠状遺構と礫群　　西より



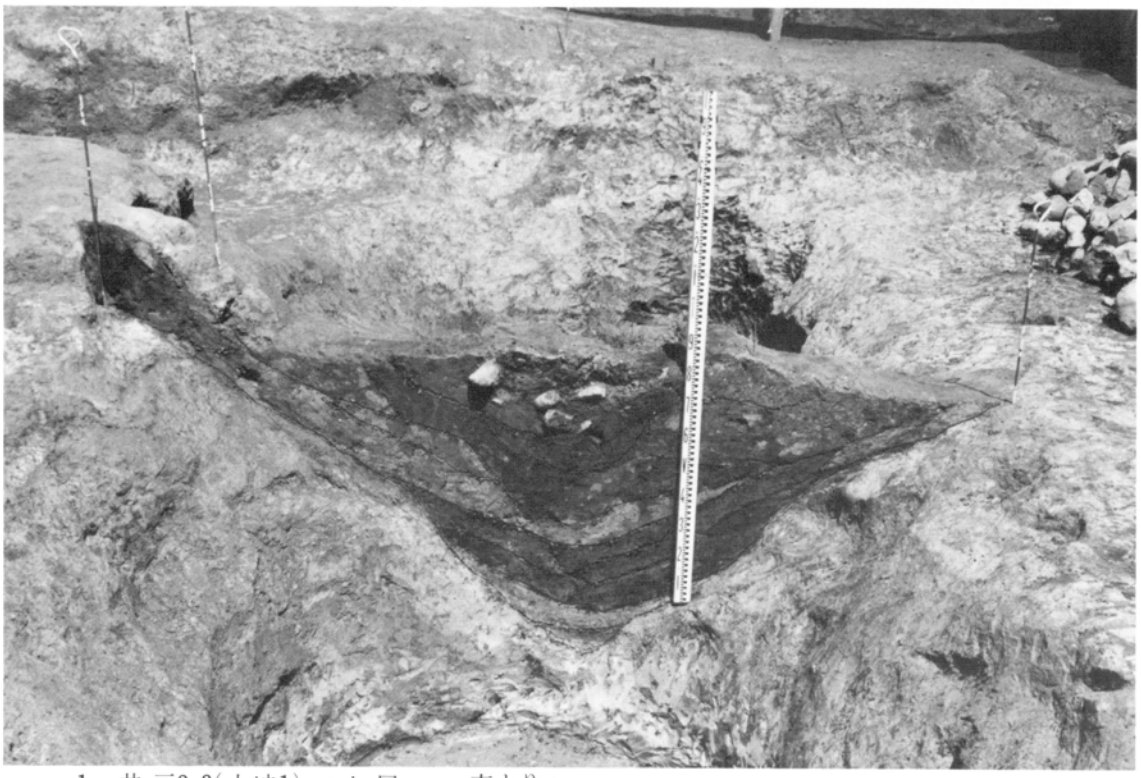
1. 礫群と井戸1　　西より

2. 井戸1　　西より

1. 井戸2・3と礫群　南より

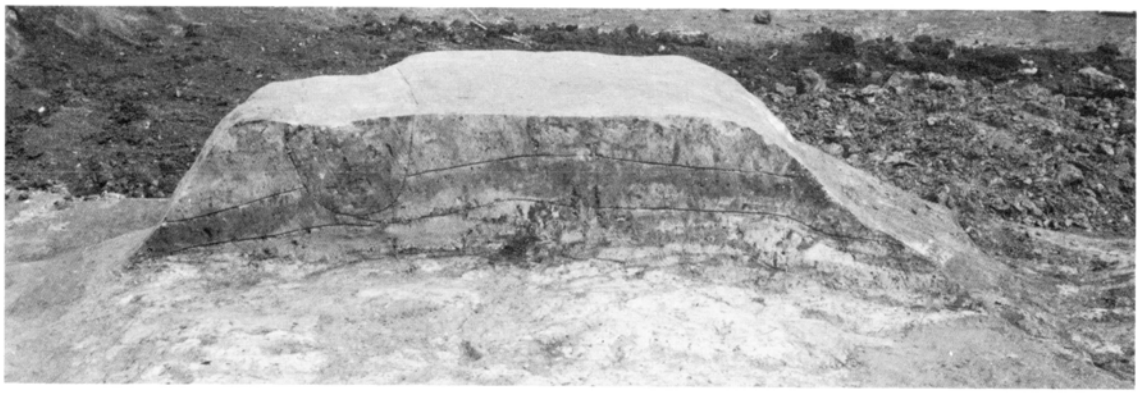


2. 井戸2・3　西より



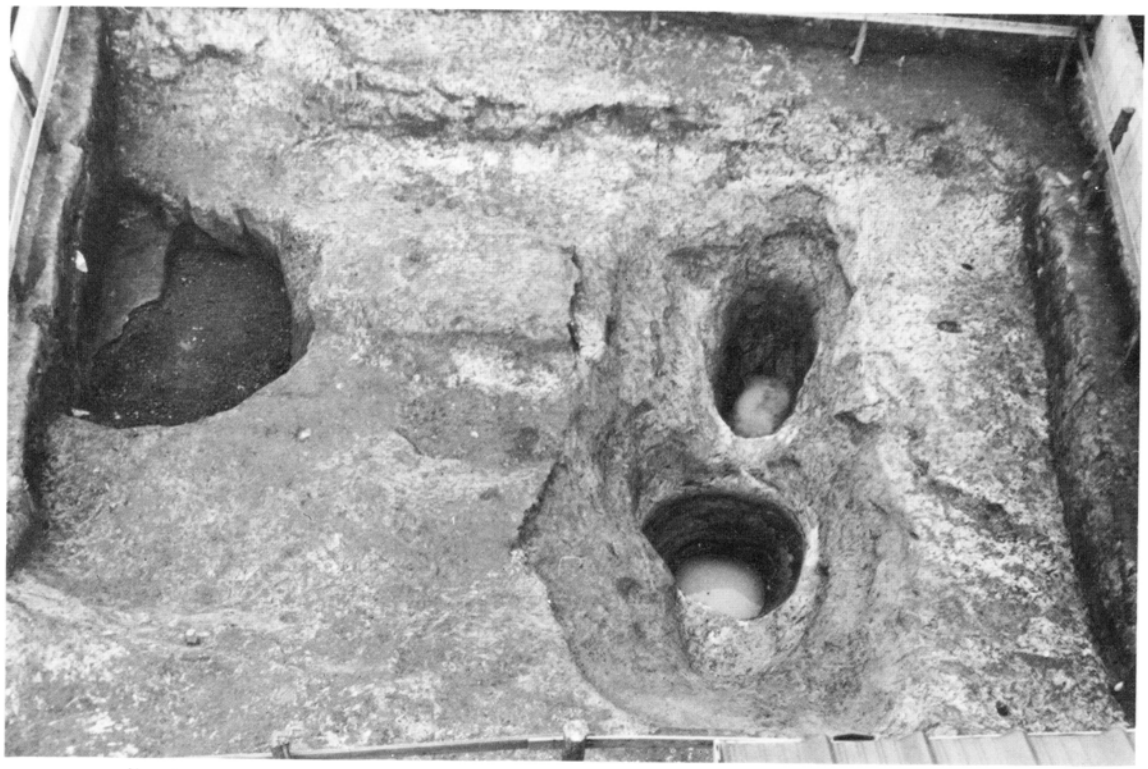
1. 井戸2·3(土坑1)　土層　　南より

2. 濠状遺構　土層　　西より

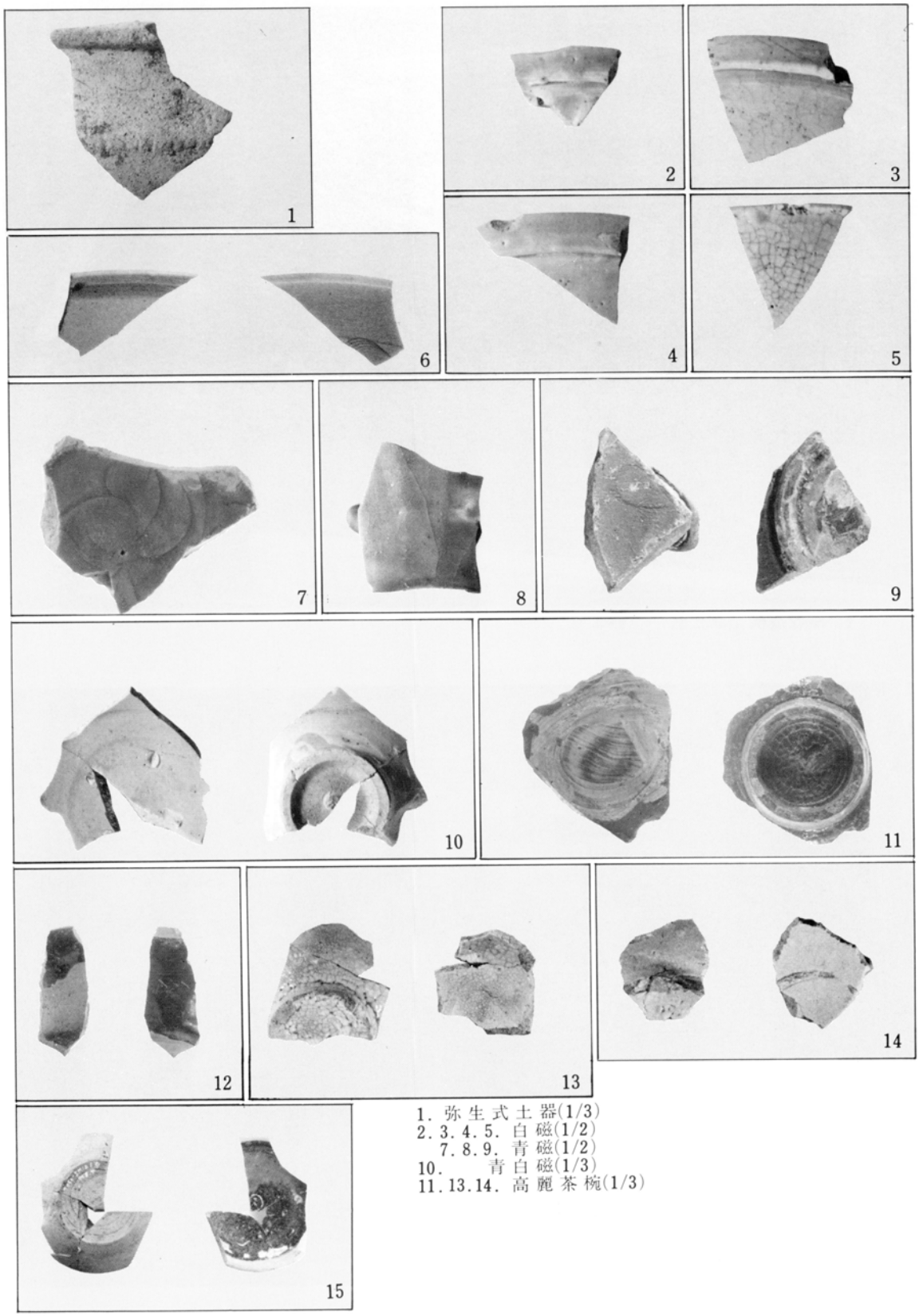


3. 土台　土層　　西より

1. 濠状遺構完掘状態　　西より



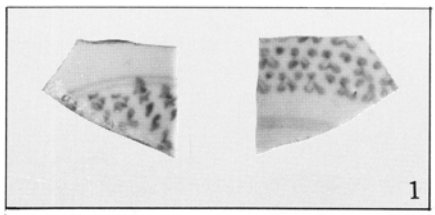
2. 井戸1·2·3　完掘状態　　西より

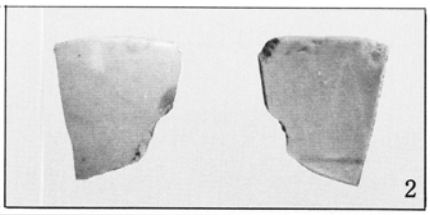


1. 弥生式土器(1/3)
2. 3. 4. 5. 白磁(1/2)
7. 8. 9. 青磁(1/2)
10. 青白磁(1/3)
11. 13. 14. 高麗茶椀(1/3)

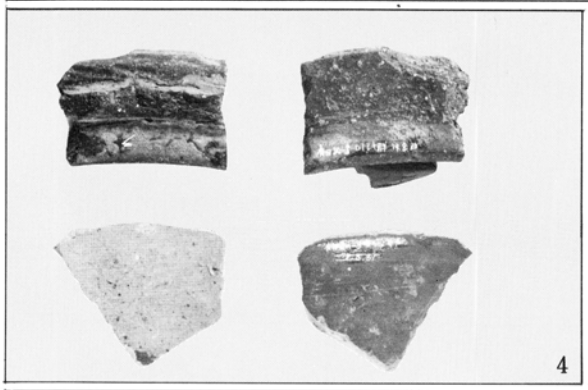
出土遺物

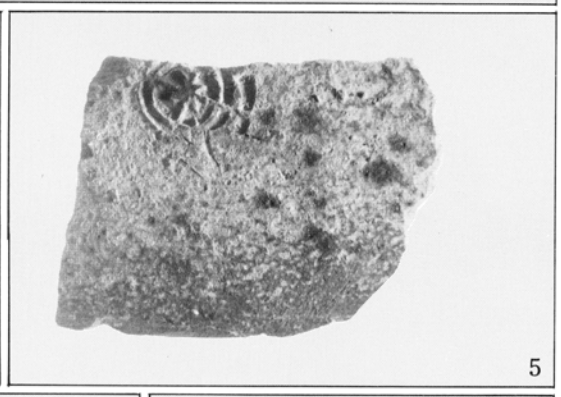
1. 2 染付(1/2)

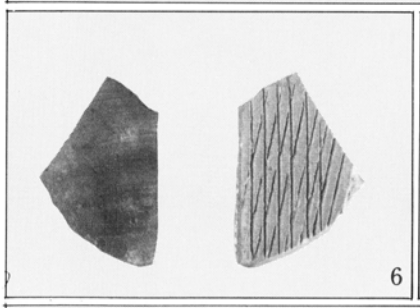

1

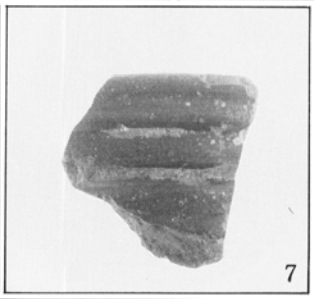

2

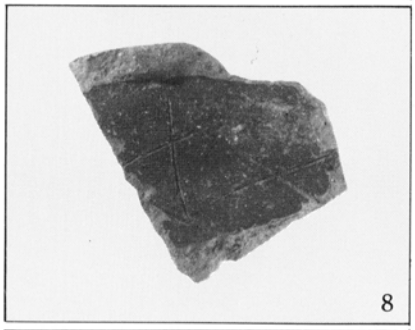
3 (1/4)

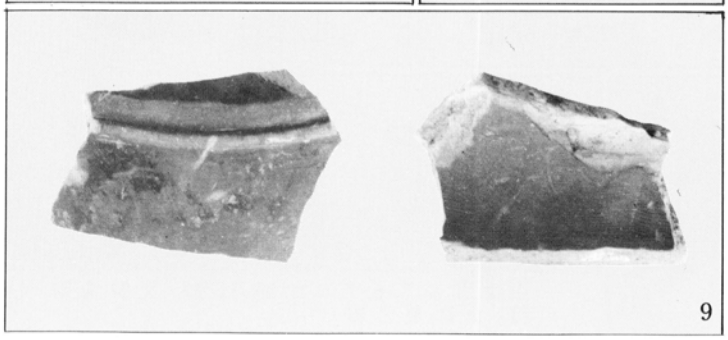

4

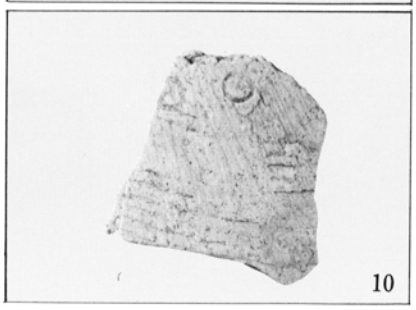

5


6


7

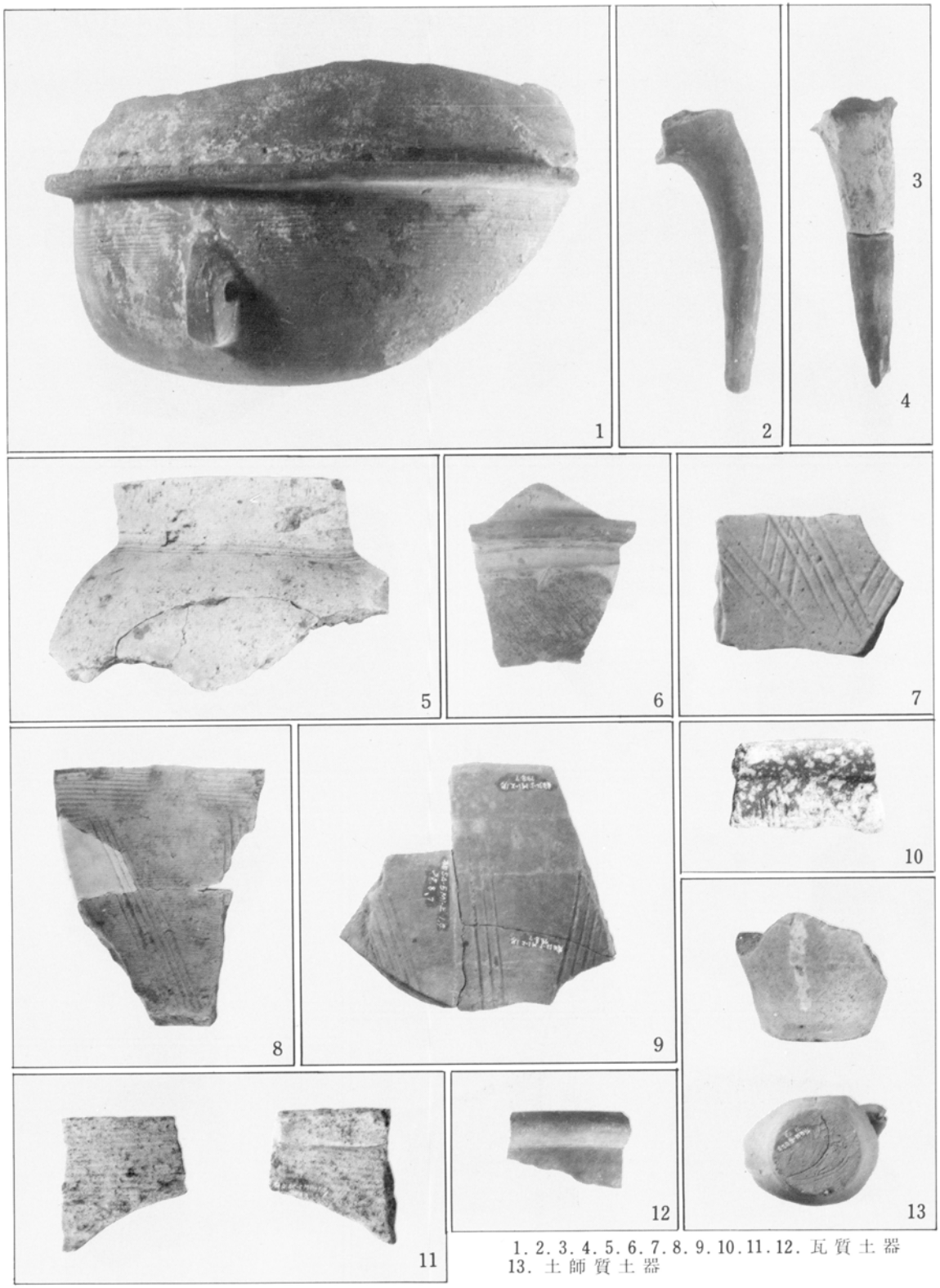

8


9


10

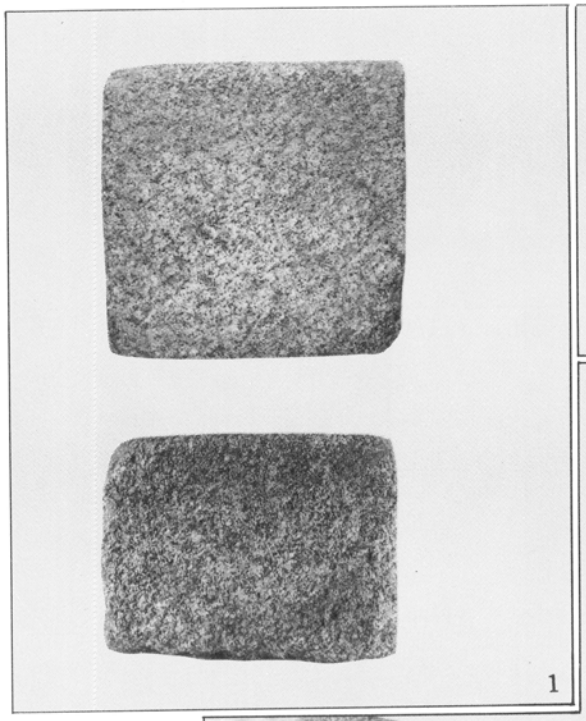
3. 4. 5. 6. 7. 褐釉陶器　8. 須恵質土器　9. 10. 瓦質土器
4. 7. 9-(1/3)　5. 6. 8. 10-(1/2)

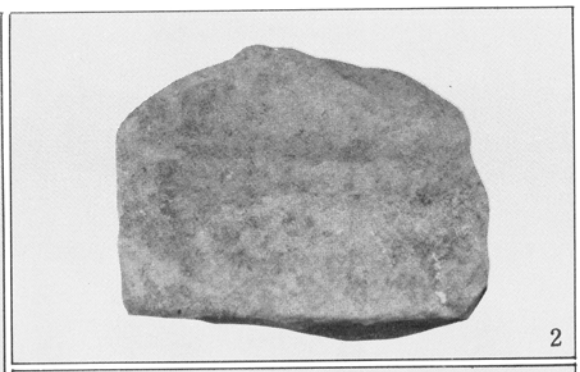
出土遺物

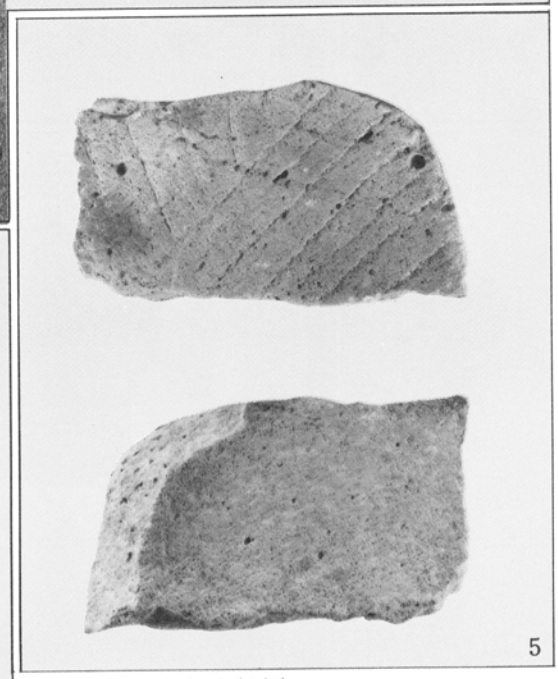


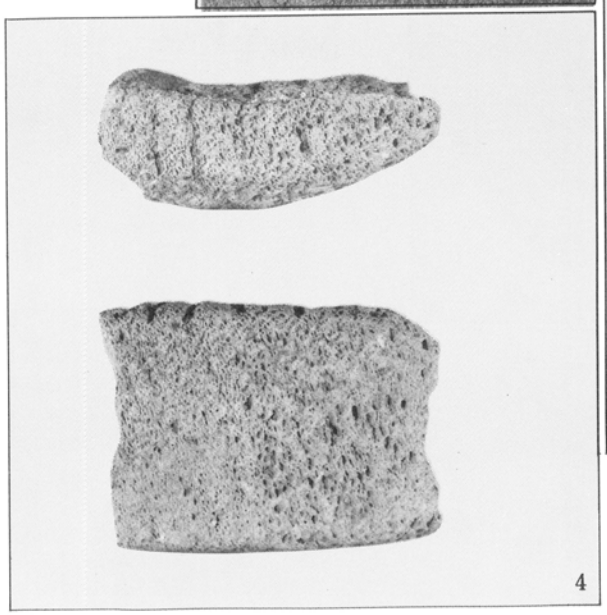
1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 瓦質土器
13. 土師質土器

出土遺物(1/3)



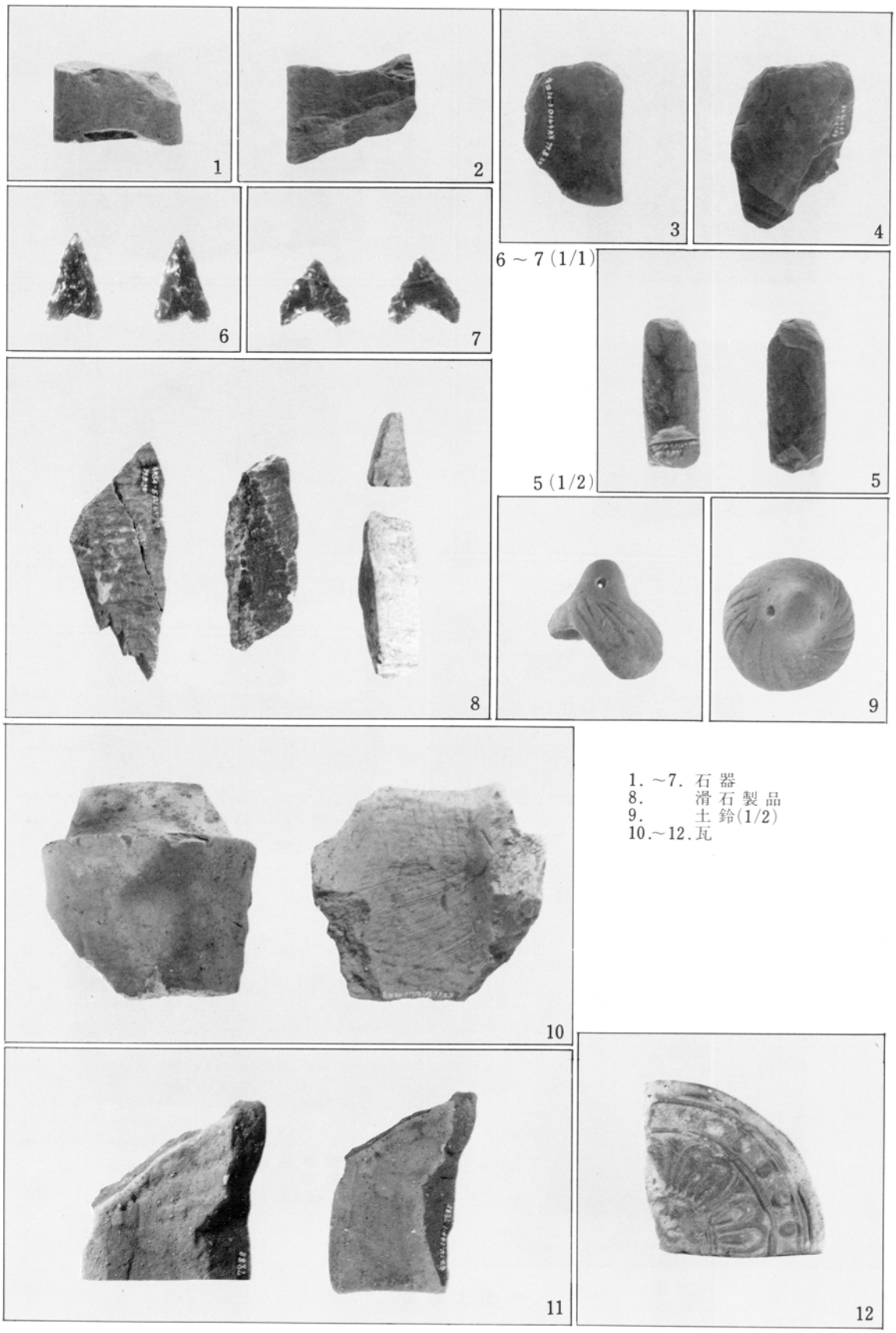






1. 板碑基台(1/6)
2. 板碑　　(1/3)
4. 5. 石臼　(1/3)

出土遺物



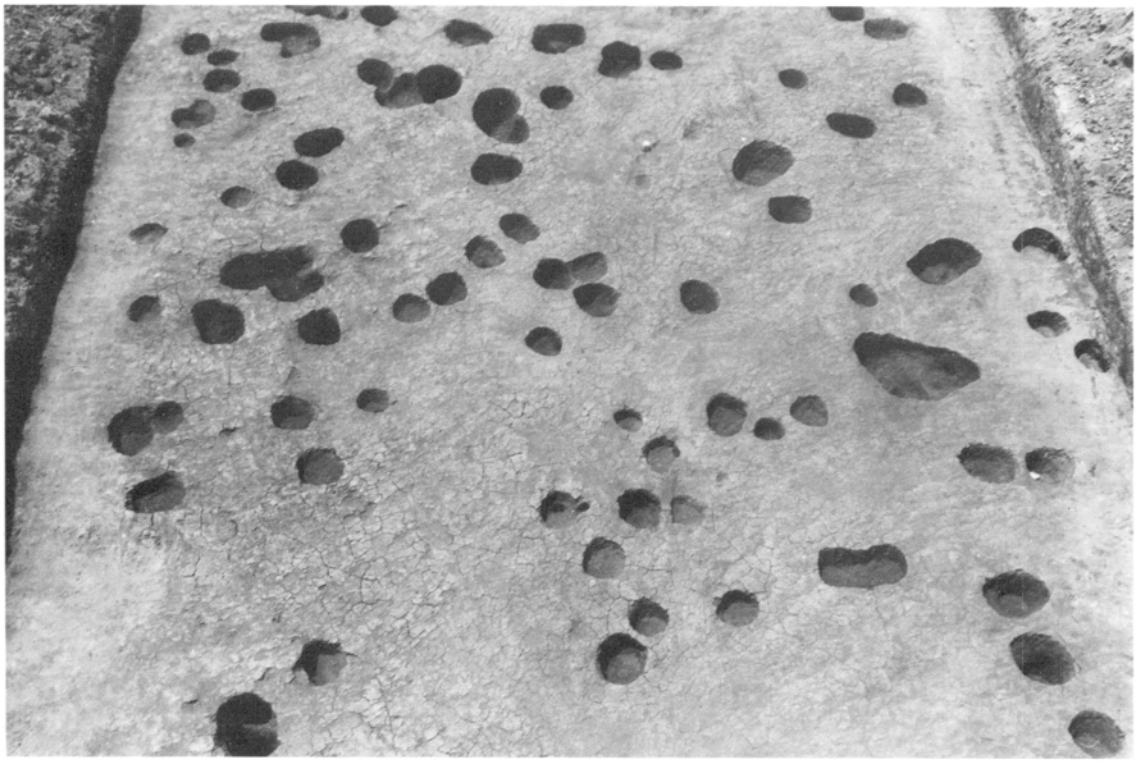
1. ～7. 石 器
8. 滑 石 製 品
9. 土 鈴(1/2)
10.～12. 瓦

出 土 遺 物(1/3)

1. オ25次調査　発掘調査前　南より

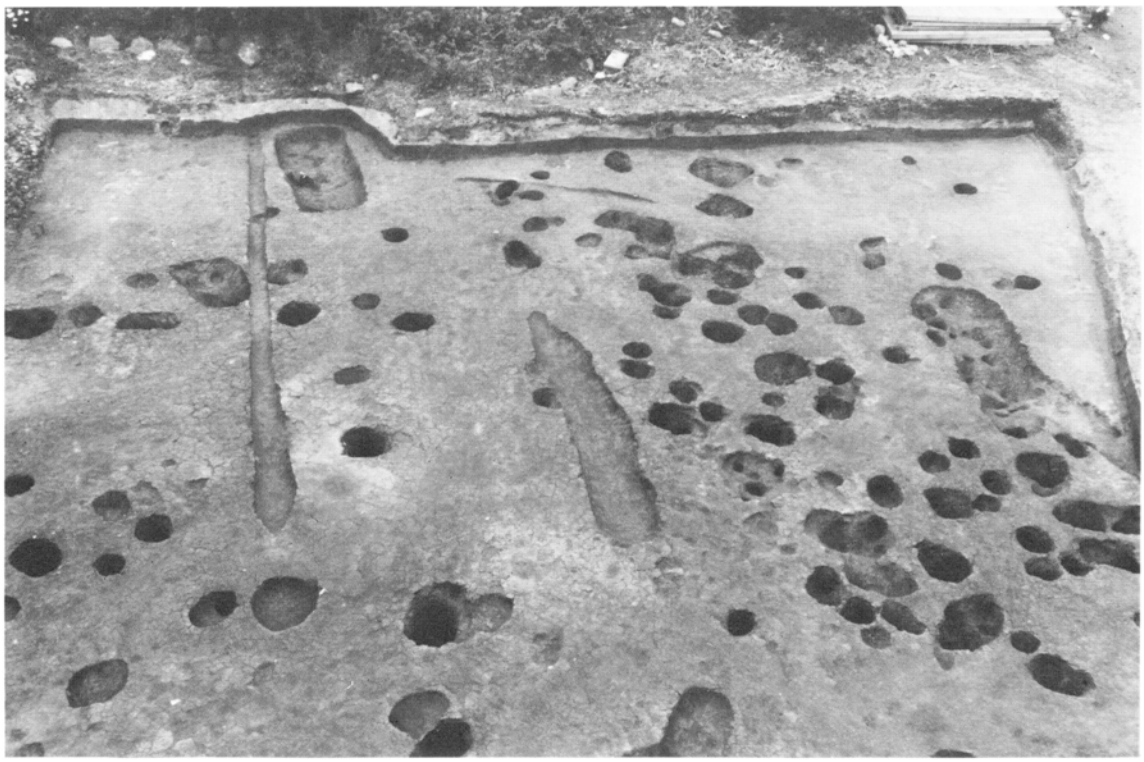
2. 遺跡全景　南より

1. 遺跡西半　　東より



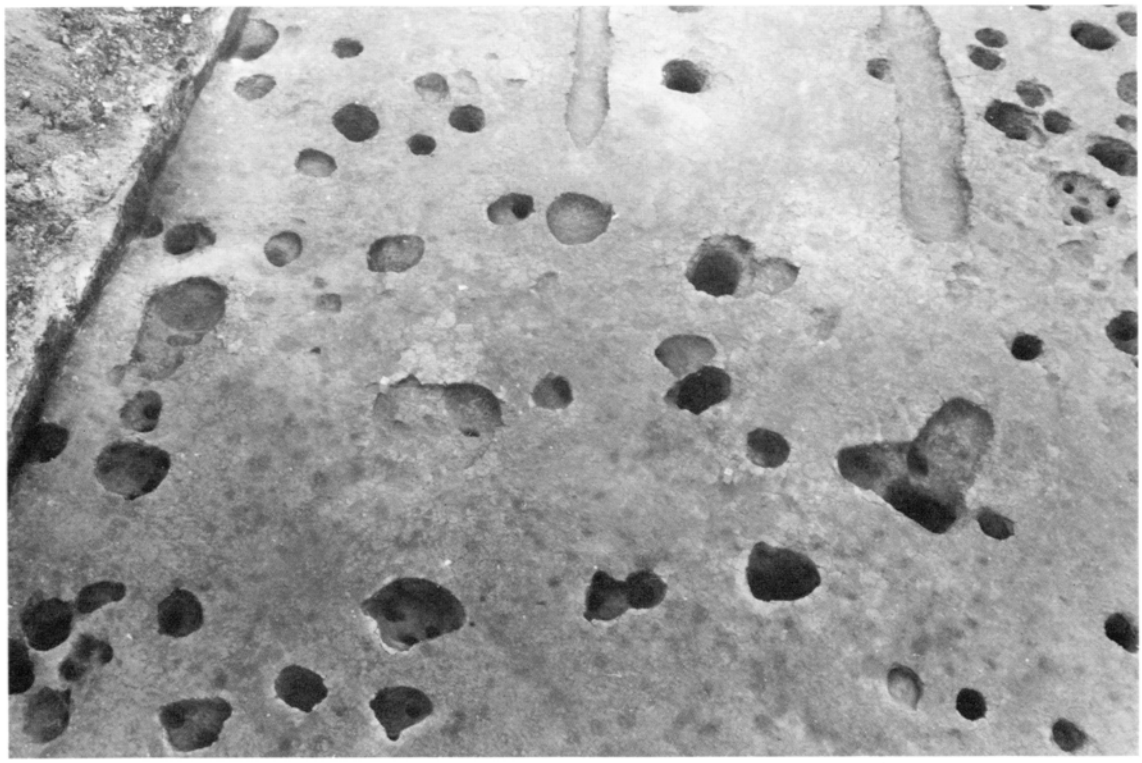
2. 遺跡南半　　東より

1. 才26次調査　発掘調査前　南より



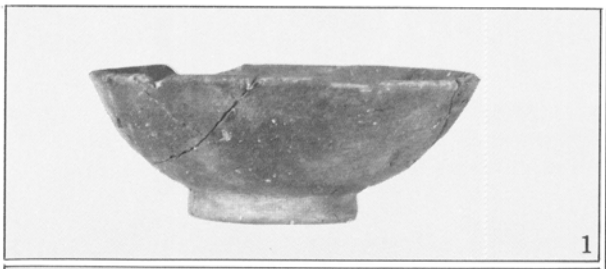
2. 遺跡南半　南より

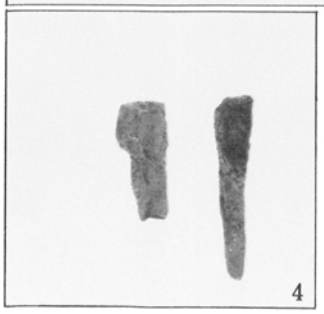
1. 遺 跡 全 景　　北より



2. 掘 立 柱 建 物SB01.02.　　北より

1. 土 坑 墓　　西より

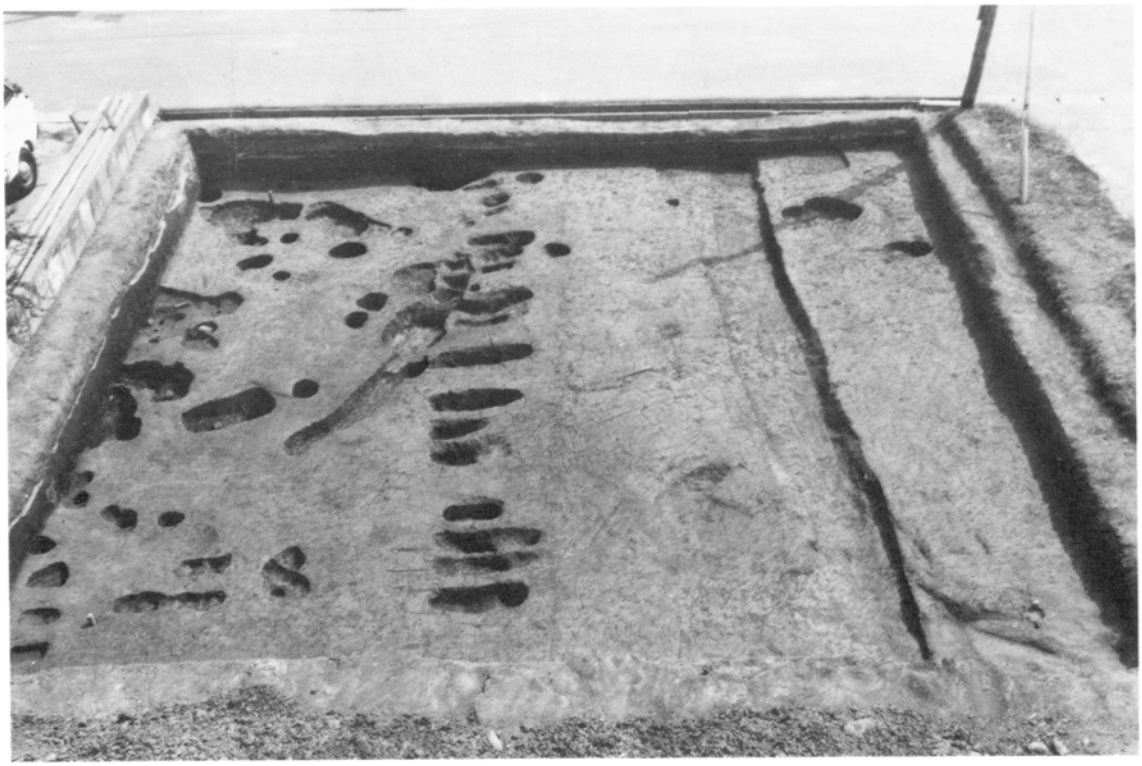




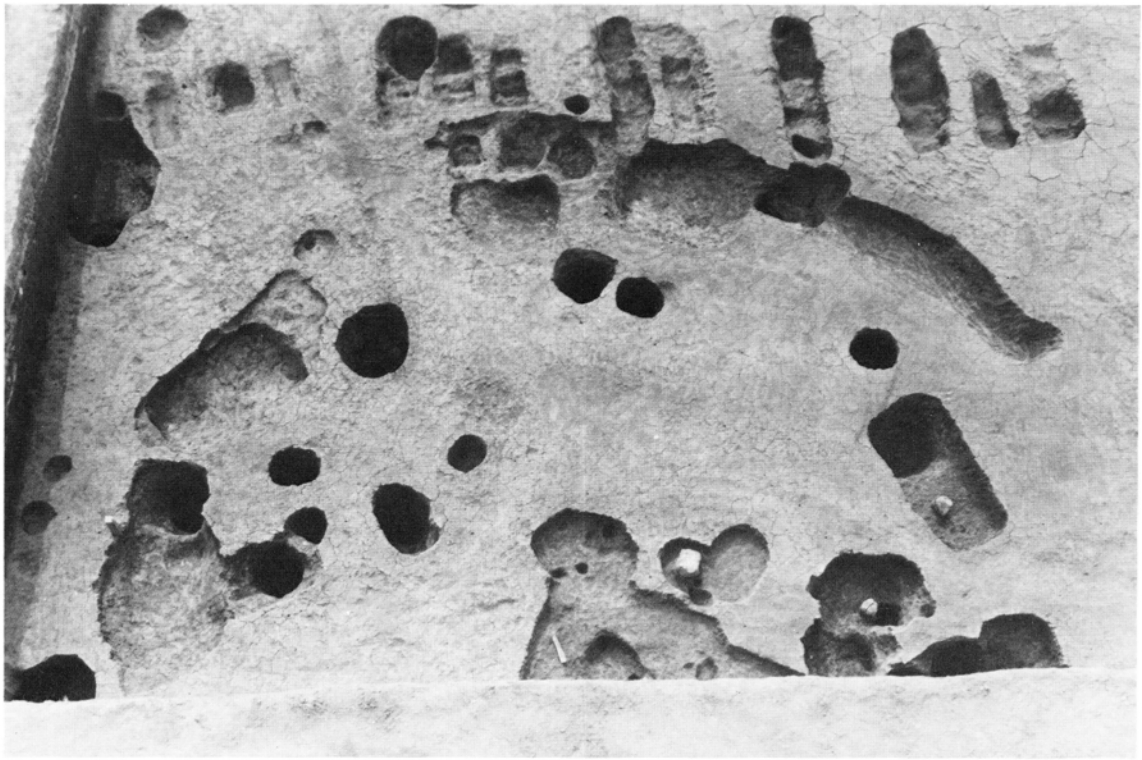
1.2. 土 坑 墓 出 土　土 師 器(1/3)
3.　　石 器(1/3)
4.　　鉄 器(1/2)

2. 出 土 遺 物

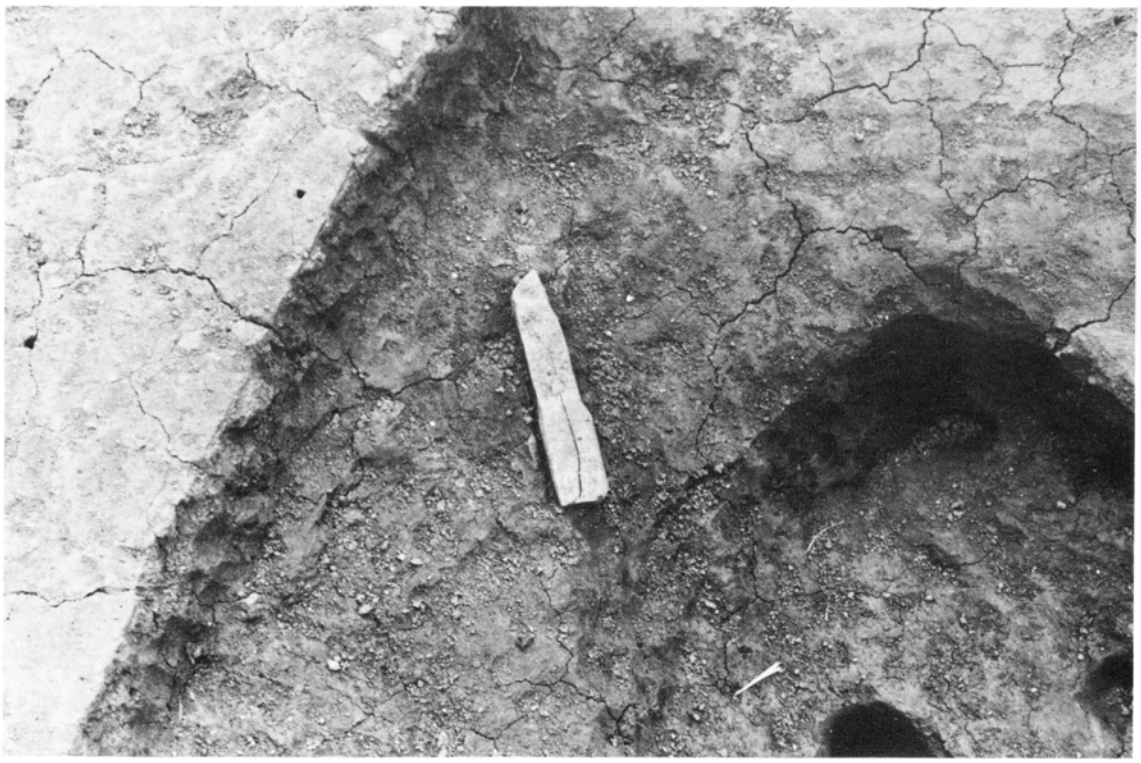
1. オ27次調査　発掘調査前　　南より



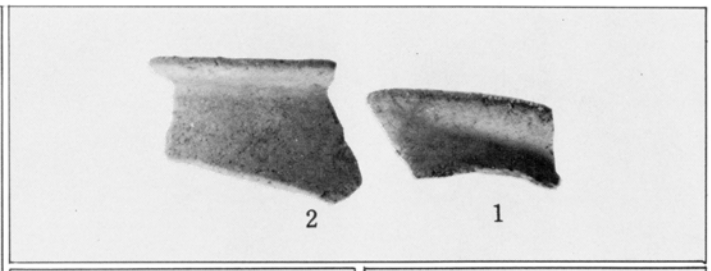
2. 遺跡全景　　北より

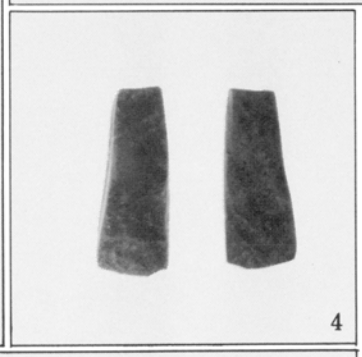


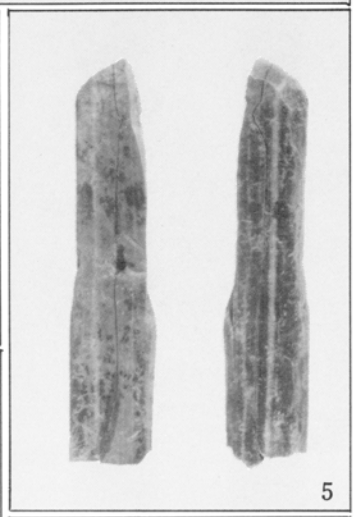
1. 住居跡状遺構　　東より

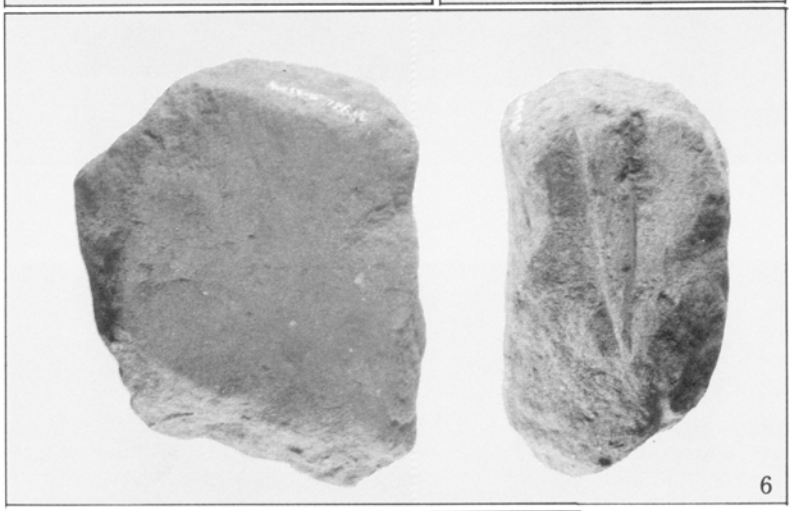


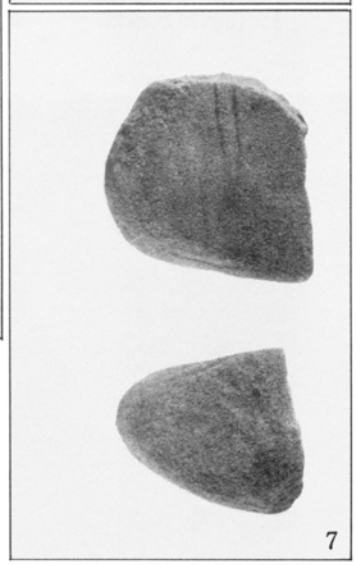
2. 遺物出土状態(砥石)

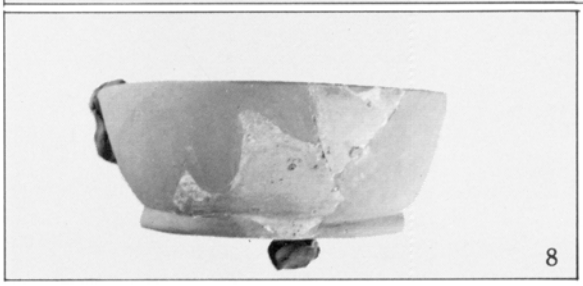


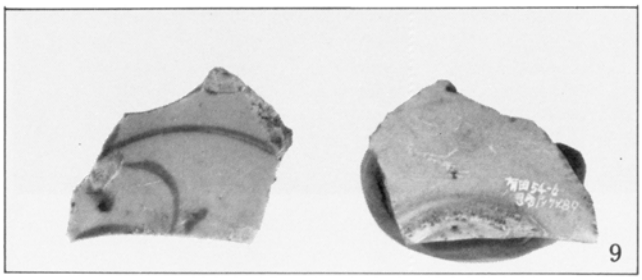












1. 2. 甕形土器
3. 支脚形土器
4. 5. 6. 7. 石器
8. 須恵器高台付椀
9. 染付

1.～8. 才27次調査(1/3)
9. 才26次調査(1/2)

出土遺物

有田・小田部　才1集
福岡市埋蔵文化財調査報告書才58集
1980年（昭和55年）3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-7-23

印刷　福岡印刷株式会社

有田・小田部　第1集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第58集　福岡市教育委員会